

さいたま市立東浦和中学校3年 佐々木 彩佳

「消費税がなかったら、もっと買い物ができたのにね。平成三十一年から、消費税が十パーセントに上がるんだって。嫌だね。」と、料理をしている母に話しかけていたら、「何を言っているの。彩ちゃんが唯一払っている税金でしょ。ちょっとくらい、社会の役に立つことをしてもいいんじゃない。」と、逆に母に言い返されてしまいました。母だって、「思ったよりも住民税が引かれているのね。」なんて、愚痴を言ったりするのに。

でも、我が家にとって税金は、「感謝」の一言でしかありません。もし、なかったら……。考えるだけでも恐ろしくなります。

それは、八年前のことです。私の弟は難病にかかり、救急車で病院に搬送されるとすぐに、CT、MRIなどの検査や手術が行われました。それからというもの、弟は点滴での投薬や放射線治療、再び何回もの手術や移植など、長い闘病生活のスタートとともにあらゆる治療が必要になりました。

突然の入院でパニックになっていた母に、主治医の先生は優しく、病状や治療の説明と同時に、弟のような難病を抱えた小児のための慢性特定疾病医療給付制度の申請手続きを、すぐにするよう勧めて下さったそうです。弟には高度な最先端の医療が必要でした。しかし、その検査や治療の一つひとつに、数十万から数百万円の費用がかかるのです。可愛い我が子のためには、貯金を全部使っても、家を売っても、借金をしてでも助けてあげたいと両親は思ったそうです。しかしながら、先の見えない治療費を負担するには、我が家だけではどうにもなりません。

残念ながら、弟は一年半前に息を引き取りました。しかし、最期まで、悔いなく最善の治療を受け、家族とかけがえのない日々を過ごせたのは、紛れもなく税金からなるこのような給付制度があったからに他なりません。

母は、役所の窓口で医療費の負担を軽減するためのこの申請手続きをする度に、我が子のために皆が一生懸命働いて納めてくれた税金を使わせていただくことへの感謝の気持ちと、申し訳ない気持ちでいっぱいになったそうです。私は、病院で病魔と闘いながらも笑顔を忘れない子供達の顔を今も鮮明に覚えています。難病を抱えた子供達が高額な費用のために治療に専念できなかつたり、その家族が崩壊するようなことは決してあってはなりません。その反面、病気の当事者もその家族もそれに甘えるだけでなく、病気と真摯に向き合い、諦めずに闘うことが必要不可欠です。

今の私には、何が出来るでしょうか。おそらく多くの方々が、税金を納めることは支出となり、マイナスのイメージを持っていることでしょう。しかし、素晴らしい恩恵を受けた私達家族のような人間が、税金が心も身体も救う、プラスになる、ということをイメージではなく、事実として根気強く伝え続けていくことが使命だと思います。

栃木市立栃木東中学校2年 池嶋 俊平

「おい、大丈夫か。」友人が駆け寄ってくる姿が見える。大丈夫だったらこんなに痛くないだろう、と思いながらも「大丈夫だよ。」と言った。しかし、全く痛みが引かない。仕方なく母に迎えに来てもらい、病院に行った。

診断の結果、骨折だった。部活動を早退し病院に着いた後、すぐにレントゲンを撮ってもらった。腕はギプスでがっちり固定され、包帯で何重にも巻かれた。少しオーバーではないか、と母に言ったところ、母は「まあ、あと一年だから。今、サービスを受けといたほうがいいよ。」と言った。

僕が住む栃木市には「こども医療費助成制度」といったものがある。これは子育て支援の一環で、栃木市に住民登録をしている中学三年生までの子供の医療費を、市が全額負担してくれるものだ。この制度によって、お金のことを気にせずに病院を受診することが出来る。しかし、これは義務教育終了、つまり中学三年生までの期間限定だ。だから、母はあんなことを言ったのだろうか。

しかし、僕は母の考えに疑問を抱いた。お金がかからないから、病院を受診するのだろうか。それでは助成制度の本来の目的に反するのではないか、そう考えた。この制度が成り立っているのは、皆が払っている税金のおかげである。栃木市民全員が平等に税金を払っているが為に、僕ら子供達に恩恵があるのだ。しかし、中には税金を払いたくない人だっているのだろうか。払うことすらままならない生活をしている人だっているのだろうか。それでも、払いたくない気持ちを抑えて、苦勞して払ってくれている。それなのに、大した病気や怪我ではないのに、病院を受診していないだろうか。今のうちに、などと言って必要以上に薬などを処方してもらっていないだろうか。自分の中にも少しだけ、タダだからいいや、と思っている自分がいたことは否めない。自分の考えの甘さを痛感した。

母に頼んで、骨折したときの医療明細書を見せてもらった。決して安いとは言えない金額である。僕に対してこんなにも多くの税金をかけてもらっている。初めて、税金と僕とのつながりを感じた瞬間だった。

僕達の医療費は無料なのか。それは違うだろう。市民全員が払う税金分の費用がかかっている。その巨額の税金が、僕達の生活を支えているのだ。僕達は常にそのことを心に留めておかねばならない。

僕達のすぐそばに税金は存在する。「税金から出ているから」とか、「税金で払ってほしい」などの税金を軽んじるような考えは持つべきではない。税金から出ているから、無料だからこそ、税金の大切さをもう一度認識し、将来税金を払うことがあったときに、しっかりと、税金が納められる大人になりたい。

「おじいちゃんの遺言？」

私は、母の口から出た言葉に驚き思わず聞き返した。

私の家は祖父の代から建設業を営んでいる。私の母は私が生まれた年に祖父の後をついで、いつも忙しそうにしている。今年受験生の私は、自分の将来について色々と考えることが多くなり、母に会社を経営するのに一番大切なことは何か？と軽い気持ちで聞いた。すると母は、

「おじいちゃんの遺言やね。」

と言い祖父の残してくれた言葉を話してくれた。

祖父は入院していた病室に母を呼んでこう言ったそうだ。

「経営者として一番大切な事は納税する事。利益を出して納税する。これを守れば会社は強くなる。納税するためには利益を出さなければいけない。つまり、納税を目標にすれば会社も黒字になる。そして経営者として、利益の一部を税金として納める事が一番の社会貢献だと信じてやってきた。すべての人にすべての物に分配される税金。これ以上平等なものはない。そのことを忘れないで必ず守ってほしい」

それから一月後祖父は亡くなった。母は、それからずっと祖父の言葉が支えになって、仕事に励んでいる。

私はその話を聞いて、税金というのは取られたり、納めさせられたりするものだから嫌だという人もいるが、自分から納めるものという意識を持つことが一番大切な事だとわかった。そして、すべての人が少しの額でもいいから、いつも納税を心掛けたとしたら、日本は今以上に社会保障や教育などが行き届いたすばらしい国になると思った。

私が五歳の時に亡くなった祖父はいつも優しくかったが、母にだけはとても厳しかった事を覚えている。でもそれは立派な経営者になってほしいという母への深い愛情だったと思う。そう考えたとき、納税という意識も、自分の国への深い愛情なのではないかと感じた。生まれてから成人するまでは教育費の恩恵を受け、働くようになったら全員で一生懸命に納税し、老後にはまた充実した医療を少ない負担で受ける事が出来る。この税金の恩恵・納税・恩恵のサイクルの素晴らしさを、多くの人が祖父と同じ様に思える為に、これからは私がこの遺言を伝えて行きたいと思う。

これからの私に必要な事は、税金の仕組みについて勉強し理解を深める事だ。納税した大切なお金が無駄なく、納得いく使われ方をしたのか疑問を持ったり、意見が言える高校生になりたいと思う。

埼玉大学教育学部附属中学校3年 須賀 ありさ

「なんて立派な空港なんだろう。」

私は目の前に広がる場所が本当に新興国のマレーシアにあるとは信じられなかった。クアラルンプール国際空港。日本による多額の円借款、日本人建築家による設計で、日本の建設会社によって造られたというマレーシアの玄関口だ。今や世界の良い空港ランキングベストテンに評価され、私に日本よりも進んだ国に降りたかのような錯覚さえ起こさせた。

昨夏、私は国際協力機構の研修でマレーシアに派遣された。この研修は次世代を担う中高生を国際協力とは何か、その重要性を伝えるメッセンジャーにするための事業だ。私は現地で学校やゴミ処理施設など様々な場所を訪れた。中でも一番驚いたのはマレーシア日本国際工科院という大学だった。二〇〇一年十一月、ASEAN＋三首脳会談による政府間協定を基にあるプロジェクトが始まった。それは、日本の勤労文化というハイテクを学べというルック・イースト政策の集大成として、それまで日本に留学していた学生を留学させずに同様のことをマレーシア国内で実践するというものだった。その取り組みにも日本は多くの資金協力をしていたのだ。私が支払った消費税、父が納めた所得税、私達日本国民が納めた大切な税金が、どうして海を越えて異国の空港建設や学生を育成するために使われているのか大きな疑問がわいた。

そこで、私は日本が多額の援助をしている理由を調べてみた。世界には二百六の国と地域があるが、先進国はその中の二十三国国だけだ。もし地球に暮らす人が百人だとしたら開発途上国に暮らす人は八十二人もいることになる。それらの人々が暮らす国は衛生事情の悪化による感染症の蔓延や環境汚染、貧困や紛争といった様々な問題を抱えている。こうした問題は世界規模に発展する可能性があり、日本も援助をしていかなければ影響を受けてしまうのだ。事実、日本は生活や産業に欠かせないエネルギーは八割、食料も穀物や肉類、果実など多くを海外からの輸入に頼っている。グローバル化が進んだ今日において世界各国は相互に依存しているのだ。

また、日本は戦後復興するにあたり国際社会から支援を受けてきた。日本の経済基盤は世界銀行からの支援でつくられたものだ。現在の日本の繁栄は国際社会の支援がなければありえなかったといえる。したがって、先進国となった日本がこれまで受けてきた恩を税金を使って開発途上国を支援して返していくことは、とても大切な役割の一つなのだった。

海外研修に際し、すべての費用を国の税金で行かせていただいた。そのおかげで、貴重な経験を重ね、国際協力に通じる新たな税金の使われ方を見て学べたことを私は心からありがたく感謝している。今、世界に目標として掲げられている持続可能な社会の実現のためにも、将来きちんと納税できる大人になりたいと強く思っている。

たくさんの人に支えられて

音更町立緑南中学校 2 年 村岡 麟

小学校の入学式の日。初めて手にした教科書に、私はこれから始まる学校生活や勉強に思いを巡らせ、心踊らせていた。家に帰り、貰った教科書一冊一冊に名前を書きながら母が言った。

「教科書は、子どもたちのために日本中のみんながお金を出し合って買っているんだよ。」

母の言葉に、しっかり勉強しようと誓った。

今年の夏、私は手術をするために二週間程入院した。手術直後、全身麻酔で意識が朦朧としている私にいつもと変わらぬ明るい声で話しかけてくれた母の声、久しぶりにつかない母の手の温もりが私の大きな不安をかき消し、術後の痛みにも耐えることができた。

この二週間の入院中、看病してくれた母はもちろん、妹と弟を連れて病院に通ってくれた父、お見舞いに来てくれた友人、励ましの手紙をくれたクラスメイトや部活の仲間、そして先生……。

「たくさんの人に支えられている。」

私の周りにいる人たちの温かさを再認識した。

退院後、「育成医療」という医療費の助成を受けることができたため、我が家が支払った医療費がわずかであったことを知った。そして、それが税金で賄われていることも知った。見ず知らずの誰かが納めてくれた税金のおかげで、私はより良い治療を受けることができ、治療に専念することができた。

「たくさんの人に支えられている。」

入院中に感じたあの思いを再び痛感した。私は身近にいる人たちだけに支えられているのではない。顔も名前も知らない多くの人たちにも支えられているのだ。

母は、よく

「人の役に立つ人間になって欲しい。」

と言う。自分には何ができるのだろうと重荷に感じることもあった。でも、ちっぽけな私だけでも、納税という形で誰かの暮らしを支える力になれる。これまで私が受けてきた恩恵をお返ししなければならない。そして、税の大切さ、税のありがたさを次の世代に伝えてゆける大人になりたい。

小学校の入学式の日母のあの言葉を思い出し、教科書を手に取った。

「この教科書は、これからを担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

教科書の裏表紙にある言葉をととてもありがたく感じる一方で、重みも感じずにはいられなかった。私たちは税金によって支えられ、恵まれた環境で勉強することができている。中学生の今は勉強に励み、将来の日本を支えられるように努めることが恩返しになるのではないだろうか。

かばんの重みは税の重み。今日もたくさんの教科書をかばんに詰め、私はいつもの坂道を登校する。

潤う緑の町づくり

音更町立駒場中学校 3 年 山本 妃笑

私は自然豊かな音更町に住んでいる。私の暮らす農村地域では農道がアスファルトに整備され、下水道が通るなど、自然のなかでも暮らしは便利だ。

だが一方で、山では伐採が進み、宅地が広まってきているのが現状である。自然あふれる緑が減少しつつあるのだ。

だが私は、この事実とは別にそれと正反対の事実も知ったのである。

昨年の夏休みに私は東京に住む祖母と一緒に銀座へ行った。ふと周りを見てみると、ビルの屋上に畑があったり、ツタがビル一面を覆っていたりと驚く光景があった。不思議に思っていると祖母が、東京には都市計画税があるんだよ、と教えてくれたのである。私の身近にある自然が都市では緑化事業とされていることに再び驚いた。

街路樹の倍増、埋め立て地の海の森公園への整備、屋上緑化、接道緑化など緑化事業には多くの種類がある。特に私が強く興味を抱いたのが、校庭芝生化だ。種まきから芝管理まで P T A や児童も参加していて、緑化に対する意識の高さを感じた。

税金は、徴収だけのマイナスイメージが強かったが、このようにうるおいやすらぎある町づくりに大きく関わっていることに気がついた。私の地域の自然の緑と大都市の人工の緑。どちらも税金により人々に和みを与えてくれている。それは人々の心だけではなく、ヒートアイランド現象を緩和させ、地球を守ることにもつながっていく。

その地域、その都市でそれぞれに合った税をあて、その地域を活性化させるために使われているみんなの税。国に納められる国税は国民の幸せのために、地方公共団体に納められる地方税は地域に根ざした愛である。それは、音更町という地域が、東京都という都市が、それぞれをより明るく力強いものにし、いずれ日本という国が世界に伝わるような、美しい国になるようにするための土台づくりなのである。どんなにキレイですばらしい建物もしっかりとした地面が下になればすぐに崩れてしまう。日本という国も同じなのではないだろうか。私はそう思う。

二〇二〇年、東京オリンピックの開催国である日本。外国人観光客はおよそ三千万人という予想が立てられている。日本の魅力を最大限に伝えるためには、まずしっかりと土台をつくっていかねばならない。そのために、私たち国民が税という存在を理解し協力していく必要があるのではないだろうか。

中学生の私たちにとって、支払う立場になってからではなく、今から知っておくことが大切なのではないだろうか。

税金と未来

宮城県古川黎明中学校 3 年 吉岡 優

今までの私が「税金」と聞いて思い浮かぶものといえば、消費税ぐらいだった。そんな私が、税金について詳しく知ったのは宮城県に引っ越してきた時だった。

小学校二年生の三月、当時山梨県に住んでいた私は東日本大震災による震度五弱の揺れに襲われた。こんなにも大きな揺れを体験したことのなかった私は、とても恐怖だった。しかし、地震の状況を知ろうとつけたテレビには、山梨で観測された揺れとは、かけはなれた揺れを表す数字、倒れた看板。そして、見たこともない大きな波が町をのみこんでいく映像がうつし出されていた。それから何度も東北という言葉を目にし、東北の人は大変だな、とニュースを見るたび思っていた。

地震から三年後、父の仕事の都合で宮城県に引っ越すことになった。私は驚く気持ちとともに、「地震は大丈夫かな。」という不安もあった。しかし、私の住むことになった地域は道路や店がきれいで、活気のある町だった。「本当に三年前、ここで地震があったのだろうか。」と疑問に思った。しかし、新しくできた友達に、当時の様子を聞くと、壊れた家も多くあり、道路や学校にもひびが入ったそうだった。現在の様子とはまったく違う状況に「なぜこんなにも復興がはやいのだろうか。」と不思議に思った。私はさっそく東日本大震災の復興について、インターネットなどで調べてみることにした。すると、「税金」が大きく関わっていたことが分かった。消費税ぐらしか知らなかった私は、税金がこんなにも重要な仕事をしていることにとても驚いた。友達から聞いた町の整備だけでなく、医療、仕事、児童の学習など、色々な面で利用されていた。調べる中で仮設住宅という言葉が目にとまった私は、税金の形をこの目で見てみたいと思い、沿岸部の地域に行ってみた。そこには、高く積み上げられた土やショベルカー、高い所に建てられた仮設住宅などがあった。震災の傷痕と、税金の復興への力を同時に見ているようで、複雑な気持ちになった。沿岸部の人々は、今も、税金によって生活を助けられている。今までの暮らしに、完全に戻れるかどうかは分からないが、税金によって未来への道を作ってもらえる、そんな気がした。

小学生の頃、震災の復興を外側から見ていただけで、何も知らなかった私は、震災の被災地である宮城県に住んで、震災の様子とともに、税金について詳しく知ることができた。今まで遠い存在だった税金が、とても身近なものに感じられるようになった。税金は、私たちの明るい未来を創る、未来への道なのかもしれない。税金によって整備された、このきれいな町を、未来につなげられるように、大切にしていきたいと思った。

「僕を支える税金は年会費」

女川町立女川中学校 2 年 村上 悠真

「おじいさん、また固定資産税の通知きてるよ。あらら、税金ばかり上がってやだねえ。」そう言いながら、祖母は役場の茶封筒を開けため息をついた。そんなに払いたくないなら払わなくてもいいんじゃないかと祖母に言ってみたが、返ってきた言葉は僕が思っていたのとはちがった。「税金は皆んなが払わないとだめなんだよ。税金を払う人達がいるからこそ、学校や病院に通えるんだから。」と税金が自分達の生活を支える大切なお金だという事を教えてくれた。

今まで、自分の中で税金といえば消費税というものが一番身近なものだ。だが、何のためにあるのかなんて深く考えたこともなかった。自分が中学校に通えているのも、国からの補助金や税金の一部に支えられているということを祖母から聞いた。僕の町は震災後、あちこちで、復興のために道路や住宅再建が行われており、新しく信号機や横断歩道などが設置され新しくできた道路には外灯がつき今まで真っ暗だったのが明るくなり、お年寄りや部活帰りの僕達にとってとても安心して通れる道になったことはうれしいことだ。

町民一人一人が安心して住める町のために復興を通して、多くの税金が僕の学校生活や日常生活のために使われているんだなあと、あらためて感じた。

僕の家のはわりは津波で流され何もない状態だ。だが、六年が経ち少しずつ道路ができ、空き地だった場所へ家が建ち人が集まる場所が増えてきた。人が増えればまた新しい人の輪が大きくなり、町全体に活気がもどってくるのではないかと僕は思う。

税金を納付してくれる人達がいることで、町が成り立ち支えられているんだということに感謝したいと思う。また、僕自身も税金の制度についてまだまだ知らないことばかりだけれど、何かの会員になった時には必ず会費を納めるということと同じことではないかと思えた。

好きなアーティストがいればファンクラブに入会し会費を支払い会員となり応援する。

それと税金のしくみは似ているのではないか。大好きな自分が暮らすこの町に会費という税金を納め町民となり安心して暮らせる町づくりを応援する。

なんだか税金という言葉で考えるととても難しい制度だと思っていたが、僕のような考え方をすればきっとそんなに大変なことではないと思う人も少なからずいるのではないだろうか。

祖母が税金を納め、僕達の未来を応援してくれているのだから、僕達もまたその先の未来のために税金を大切に使うように心かけていきたいと思う。

納税の義務

南相馬市立小高中学校 2 年 大谷 陽奈

納税の義務は、国民の三大義務の一つです。税を払うのはあたりまえだけれど、私達には少し遠く知識もうすいものでした。しかし、調べてみれば、意外に近い存在ということがわかりました。

私が税金を身近に感じた出来事は、今から六年前に起きた東日本大震災です。その時、私は小学一年生で税金の事も全く知りませんでした。しかし、今考えると、私達が今の様な福島に復興する事ができたのも、税金が大きく関わっているという事がわかりました。

私の住んでいる福島県南相馬市では、震災の影響で、家を失ったり、道路がこわれて通れなくなってしまうという事がとても多くありました。その時税金で家を失った人の為に仮設住宅が建てられました。できる前は体育館で生活をし、ストレスがとてもたくさんたまっていました。仮設住宅は、広くてすごい快適というわけではなかったけど、家族だけで暮らせる場所ができ、とてもうれしかったのを今でもハッキリおぼえています。そしてボロボロになった道路や、海の方から流されてきたガレキの撤去にも税金が使われました。

福島には、地震や津波の他に原発事故がおき、放射線の影響で元の家にも入れないような状況が長く続きました。私達が帰れるように、たくさんの除染作業員を税金で雇い、復興を進めました。

そして、今、税金のおかげで除染作業が終り、南相馬で快適に暮らせるようになりました。しかし、南相馬市の山の方にある小高区に帰るとなると、学校を直したり、区役所を直さないといけませんでした。修理にかかるお金も税金でまかなわれています。

ついに、今年、仮設校舎から小高にある本校に戻れたのです。ここまで戻るには、たくさんの税金を使い、たくさんの人に助けられました。税金は、災害に多く使われます。私達一人一人がきちんと税金を納めることでどこかで災害がおきた時や、新しい公共の物を作るのに使うことができます。私は、東日本大震災を経験し、税金の大切さを知ることができました。

私は、テレビのニュースで滞納をしている人がいることを知りました。日本では、国民の三大義務の一つなのに、払わない人がいると、その分災害などに使える税金が減っていきます。いつか、自分が災害などにまきこまれた時、税金がないとみんな困ると思います。

私は、税金を納めることで、どこかの困っている人を助けたいと考えています。みなさんも、困っている人を助けたり、住みよい日本にするために、ルールを守り、しっかり税金を納めましょう。そして、税金を納めない人を厳しく取りしめ、国民全員が税金を納めるようにしていきましょう。

五・四・三・二・一・ゼロ。発射！

八月十九日、午後二時二九分、種子島宇宙センターから準天頂衛星システム・静止軌道衛星「みちびき三号機」を搭載したロケットが打ち上げられた。ライブ中継で見守っていた私は、「やった！」と思わず叫んでしまった。日本の科学技術はすごいぞと心が震えた。

みちびき三号機は測位衛星であり、官民協力のもと内閣府が打ち上げた。打ち上げ済みの一、二号機、今回の三号機に加え、年内打ち上げ予定の四号機の計四号機で本格稼働を始めるという壮大な国家プロジェクトなのだ。まさに税によって作られ打ち上げられたロケットだと言えるだろう。打ち上げの成功は、日本の科学技術を支える技術者や研究者の熱い思いと尽力のお陰だと思う。だが成功のもう一つの要因は、ロケットに携わった方々のご尽力に加えて、日本中の人々の勤勉な労働であることも忘れてはならないだろう。労働で得た貴重なお金の一部が国の財源である税となり、金銭面で底から支えてくれたお陰だからだ。みちびきは国民みんなの思いを乗せて、日本の上空を現在も回っているのである。

ところで、みちびきは私達の暮らしに何をもたらすのだろうか。調べてみた。日本のほぼ真上を通る準天頂衛星のため、米国のGPS衛星と一体で利用することで高精度の位置情報を維持できることが最大の利点だ。災害時に各避難所の情報を自治体や消防に伝える衛星通信設備が整う。これにより、電気が不通でも個人の避難場所や状況をすぐに伝えることが可能になる。また、カーナビやスマホも今以上に性能が良くなる。車の自動運転や無人トラクターによる農業の効率化など様々な分野で応用されることが見込まれている。

今の生活も、高度に発達した情報通信網のお陰で十分便利になった。しかし、東日本大震災の折、携帯電話が使えず頼った情報源はラジオと防災無線のみで、不安な時を過ごした経験がある。また、最近の異常気象や地震は、予想を上回る規模の災害をもたらし、避難所生活を余儀なくされた人々も大勢いる。高齢者の車の事故も増えた。労働力人口も減り始めている。こうした世の中を見てみると、便利で豊かな生活も、不安や災害と常に隣り合わせなのだ。これらの不安を解消、もしくは軽減してくれるのが「みちびき」なのだ。

税は、日本の科学技術を支援し、みちびきを誕生させた。少子高齢化で活力を失いつつある日本の救世主となるに違いない。応用が進めば新たな需要を生み出し、経済も活性化すると思う。様々な応用が期待できるみちびきは、日本の未来をより良い明日へと導いていくだろう。明るい未来を私達子供世代に準備してくれた日本の科学技術に敬意を払いたい。そして、日本の明日のために真摯に働いている納税者の方々にも感謝したいと思う。私もいつか納税者の皆さんの仲間入りをして、日本の更なる発展のために貢献したいと思う。

命を救う税金

邑楽町立邑楽中学校 2 年 小貫 史織

私が、ドクターヘリを扱った緊迫感あふれるドラマを父と一緒に見ていたとき、父が、「実は自分が勤務している中学校に、ドクターヘリが着陸して、救急搬送しているところを見たことがあるよ。」と話し始めました。ドクターヘリに関心があった私は、その話をさらに詳しく聞いてみることにしました。

部活動の時間に、突然「ドクターヘリが数分後、校庭に着陸するので、校庭で部活動をしている生徒は、校庭の端に集合してください。」という放送が流れ、すぐに救急車が校庭に入ってきました。患者は、近くにある高木で作業をしていて落下事故に遭ってしまった方だそうです。数分後、ドクターヘリが上空に現れ、着陸するために降下すると、見ている先生方や生徒たちにも、緊張が走ったそうです。皆、固唾をのんで見守っていましたが、患者を乗せたドクターヘリは上昇を始め、病院に向かって飛んでいきました。父は、ヘリコプターのチャーターには莫大な費用がかかるだろうが、大病院まで十数分で搬送できるドクターヘリはとてもありがたいものだ、と実感をこめて話していました。

父の緊迫感のある話を聞いて、私は、ドクターヘリを運用するためには、どのくらいの費用がかかり、しかも、そのお金は一体どこから出ているのか、と疑問に思いました。

そこで私は、ドクターヘリについて調べてみました。すると、救急車と同じように税金が使われていることが分かりました。ドクターヘリは、およそ時速二百 km というスピードで飛んでいます。また、高度な医療器具も機内に設置されていて、緊急手術に備えるための処置が施せるようになっています。そのため、一回の往復の搬送に、およそ五十万から百万円の税金がかかるそうです。群馬県では、年間七百から八百件、出動しています。そうすると、年間数億円の税金が使われていることになります。ドクターヘリは、大病院から私が住んでいる所までは片道四十 km 以上あります。それを十数分で飛んでいき、少しでも早く緊急手術ができるようにしています。これほどありがたいことはありません。もし私たちが税金を納めなければ、ドクターヘリが運用できなくなってしまいます。

もちろん、私たちが納める税金は、ドクターヘリのみに使われるわけではありません。医療や消防、警察など命や安全に関わるサービスだけでなく、教育や福祉、年金など様々なことに使われています。税金によって私たちの生活は守られていることを忘れてはいけません。

私は、ドクターヘリについて調べたことによって、税金を納めることの大切さを、これほど痛感したことはありませんでした。最後に、私の納める税金が、ドクターヘリの運用に少しでも役立てられ、尊い命が救われることを願って止みません。

私にかかる教育費

長岡市立大島中学校 3年 長島 優花

夏休みの課題の一つに「税の作文」があった。また作文か。いざ書こうと思っても、何を書けばいいのか全く分からない。そもそも「税」について良く知らない私が作文なんて書けるはずがない。そう思った。しかし、中学三年生にもなって社会の仕組みすら知らないのは、恥ずかしいことだと思い、「税」について、色々調べてみた。

私は、資料を見て驚いた。私達中学生の年間教育費に一人当たり約百万円かかっているのだ。一日当たりで考えると約五千元。中学校を卒業するまでに約三百万円ものお金がかかっていることが分かる。これは、一人にかかるお金であって、全国に中学生は、三百万人以上いる。当然、教育費がかかっているのは中学生だけでない。小学生や高校生にもかかる。だから、全てをあわせたら、ものすごい大きな金額になるはずだ。自分の知らないところで税金が動き、使っていたんだ。それを知った私は、もっと知りたい、学んでみたいと思った。

新学期となり、教室に入るとずらりと並んでいる新しい教科書。毎日使う、机や椅子。先生が黒板に字を書くために使うチョークなど、これらはすべて、多くの人が納めた税金によって、まかなわれている。日本では、年間で約五兆三五六八億円の税金が教育のために使われている。私の住んでいる新潟県でも福祉や医療よりも多くのお金を教育にかけているということを知った。なぜ税金をこんなにたくさん教育にかけてくれているのだろうか。他にもお金を使いたい場所なんて山ほどあるはずだ。もっと道路をきれいにしたい。もっと福祉に力を入れるべきだ。もっと医療を充実したものにしてほしい。考えれば、意見を求めれば切りがない。それでも、勉強をさせてくれる。教育にお金をかける理由。それはきっと、将来この国を背負っていかねばならない私達への期待をこめて。そして未来への投資をしてくれているのではないかと私は考えた。こんなにありがたいことはない。世界には、勉強したくても出来ない。学校に行きたくても行けない。そんな人がいる中で私達は、いろいろな人が納めた税金によって今、こうして学校に通うことが出来ている。もし、税金がなかったら…。今いる友達と出会えていなかったかもしれない。勉強だけに集中することは出来たのかな。今、こうして学習に集中させてくれ、好きなことに没頭できる環境に感謝しなければならないと改めて感じた。

この作文を通して、税金の大切さを知った。今、私は支えられている。しかし、十年後。今後は、支える代になる。今、投資してもらっている税金にあたるものを私はまだ出来ていないような気がする。だから、これからは一日一日を大切にしていきたい。いつか、恩返しをするために。

「思いやりの連鎖」

岡谷市立岡谷南部中学校 3 年 小林 万優子

お盆間近の日曜日の夕方、我が家は丁度夕食を済ませた所だった。開け放した窓からはヒグラシの声がひっきりなしに聞こえ、涼しい風がどこかの風鈴の音を運んでくる。そんなのんびりした空気を打ち破ったのは、救急車のけたたましいサイレンだった。音はどんどん大きくなり、道を挟んで向かい側にある祖父母の家でピタリと止まった。私達はあわてて外へ飛び出した。こわくて思わずギュッと目をつぶった。救急車に乗せられて行ったのは祖父の友人で酔って転んで怪我をしたが、大事には至らず病院で手当てをしてもらいすぐに帰宅できたそうだ。

私達は病気や怪我をした時、いつでも医療を受ける事が出来る。緊急時には救急車が駆けつけ無料で病院まで運んでくれ安価な金額で手厚い医療を受けられるようになっている。それは医療保険のお陰であり、それには多くの税金が投入されているのだ。身の回りの公共施設や、そのサービスのほとんどは税金で賄われている。警察、消防、ゴミ収集、公立の学校、病院、図書館、美術館、市役所、上下水道、道路に信号など。又そこで働く人々。そして災害復旧にも税金は使われている。税金によって治安が守られ安全で快適に生活出来、医療や教育などの社会保障サービスを当たり前を受ける事が出来るのだ。私達はい税金を払う事ばかりに気を取られているが、こんなに多くの恩恵を受けているという事を忘れがちだ。

私は心臓病だ。生まれてすぐに「この子は新生児期を乗り越えられるか分からない。」と言われたそうだ。ミルクを飲む力も無く、生後すぐ入院し鼻からチューブを入れ点滴の様に胃にミルクを送り込んでいたと聞いた。まだ小さかった姉は私のためにずっと祖父母に預けられ、母は泣いてばかりだったそうだ。皆が辛かったのだろう。その頃の写真は一枚も無い。そして三ヶ月の時、人工心肺を使った心臓手術を受け、今私は十五才になった。全て人並みとはいかないが年に数回の検査で普通の生活を送ることができる。ミルクも飲めなかった私が、おいしい御飯をもりもり食べられて皆と一緒に学校に通い、笑い合える。私が受けた心臓の手術費は実際には数百万円かかるそうだ。もし税金が無かったら手術は出来なかったと思う。そして、今私はこの世にはいないだろう。私の体には開胸した傷とドレーンの穴の跡が残っており、一生消えない。しかしこれは私が皆に助けられ生かされているという証だと思っている。

私達は税金に守られている。支え、支えられるという人と人との思いやりの連鎖である。思いやりは他人だけでなく自分も幸せにする。私が助けられたように私も又誰かを助けたい。税金への感謝の気持ちを忘れず、税の使われ方をよく知ってしっかりと納税を果たし、社会に貢献できる大人になりたいと思う。

私たちの暮らしを支える税金

旭市立海上中学校 3 年 渡邊 七海

数年前までの私は「税金」と聞いたら「消費税」しか思い浮かばなかったと思う。また、「消費税」といっても、商品を買う時に特に何も考えずに払うだけで、そのお金が何に使われているかなど考えたこともなかった。でも私が小学校五年の時、税金の使い道の一つを見つけることができた。それは「教科書」だ。毎年春休みが終わって進級した時、新しい教科書が配布される。その教科書の裏に名前を書こうとすると、次のような文章が目についた。「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」今までずっと親が買ってくれていたと思っていた私は、とても驚いた。消費税しか知らなかった私は、全国の子ども達に配布される教科書が、全て消費税でつくられているのだろうか、とも思った。

二〇一四年四月一日、消費税が五パーセントから八パーセントに引き上げられた。正直嫌だと思った人の方が多いのではないだろうか。最も身近な税である消費税を引き上げるということは、働いていない高齢者や子どもには負担が大きくなったのではないか、とも思った。さらに、ニュースでは「次は一〇パーセントに引き上げられるでしょう。」とも言っていた。なぜそんなにも引き上げられるのか。今までの五パーセントではなぜ足りないのか、と思い、消費税の使い道について考えてみることにした。

先月私の学校で行われた「租税教室」の資料には「消費税率の引き上げによって得られた財源で、全世代を対象とする社会保障の充実を図る」と書いてあった。では、その「社会保障」とは何なのか。インターネットで調べてみると「社会保障とは、大まかに六五歳以上になると国からもらえる年金、怪我や病気で病院へ行った時の治療費、高齢の人達の世話をするための介護費、私たち子どものための子育て支援金の四つがある」と書いてあった。税金は私達の暮らしに必要な不可欠な存在なのだと改めて理解することができた。

税金はできれば払いたくない、と感じている人は多いと思う。でも想像してほしい。私達が高齢者となって働けなくなっても、どうにかして生活費を賄わなければならなくなった時。重い病気にかかり病院で多額の治療費を払わなければならなくなった時。そのような時に税金という制度によって助けてもらえれば、とても楽な気持ちにならないだろうか。

日本はこれからさらに少子高齢化が進んでいくといわれている。ということは、税金を払う世代、働く世代が減っていくということだと思う。だからこそ、私達子どもが税金の制度をきちんと理解し、将来の日本を支えていく気持ちを持つことが大切だと感じている。自分の暮らしのため、その次、またその次の世代の暮らしのために。

税は人を救う

柏市立南部中学校 3 年 阿部 友哉

平成二十三年三月十一日。

この日のことを、僕は決して忘れない。東日本に大地震と大津波が、襲いかかってきた。そのとき、僕は東北に住んでいた。津波からは免れたが、震度七の地震を経験した。当時八歳だったが、あの時の恐ろしさは今でも心の奥に深く残っている。震災により、街の風景は一変してしまった。そして、誰もが途方に暮れていた。

しかし、震災直後の自衛隊の活動を通して僕達は救われた。懸命に救助活動を行ってくれた。あの時、僕達は沢山の人々に助けられ支えられた。感謝の気持ちでいっぱいだ。

そして今、安心して暮らせるようになったのも、国民一人一人が納めている税金のおかげだということを、改めて感じた。税の重要性を、身にしみて感じた。

僕は、毎年東北を訪れている。年々、活気が戻ってきているように感じる。それは、みんなが復興を願ってきた思いの表れだと思う。

そして、もう一つは「復興特別税」といわれる、復興のための財源のおかげだ。住民税、所得税、法人税に上乗せするという形で、徴収されている。

この税のおかげで、どれほどの人が救われたことだろうか。当時通っていた小学校は、一時避難所となっていた。多くの人々は、仮設住宅を待ち望み、移り住んでいった。そして、小学校には誰もいなくなり、みんな元の生活に戻っていったのだと、八歳だった僕は思っていた。

しかし、六年以上経った今でも、住む家や働く場所を失っている人達が沢山いるという。国は、生活再建を果たすことができるように努力しながら、被災者の生活を支えている。国民は、税金によって守られていることに、気づかされた。とても幸せなことだと思った。

もし税金がなかったら、日本はどうなってしまうだろう。今まで考えたこともなかった。きっと、全て自分達で負担していくことになるのだろう。そうすると、人々は不安を抱え安心して暮らすことができなくなってしまう。今まで当たり前だと思っていたことが、当たり前でなくなってしまうのだろう。

そう考えると、税金はなくてはならないものだとは強く感じた。そして今後、少子高齢化が進み、社会保障制度の中心となっている年金や医療、介護などの費用が増えていくそう。消費税率の引き上げも、得られた財源で社会保障の充実を図ると知り、自分達も今後支えられていく立場になるのだろうと思った。

国民の三大義務の一つである「納税」。

納税することで人を救い、後に自分達が救われるときが必ずくるだろう。互いに助け合うために、税はあるのだと思う。人は一人では生きられないと、震災を通じて強く思った。

安心して暮らしていけることが、どんなに幸せなことか、改めて感じた。僕も大人になったら、納税の義務をしっかりと果たしたい。

震災から学んだ税

太田区立志茂田中学校3年 眞貝 紗羽

私は小学校二年生の時、父の転勤で仙台に住んでいました。そして、東日本大震災で被災しました。六年という月日が経った今でもあの時のことを思い出すと恐怖がよみがえってきます。あの地震と津波で大切な家族や家など、今まで当たり前にあった幸せを一瞬にして失ってしまった人が大勢いました。残った人間は絶望の中でも生きて行くしかありませんでした。

震災からの復興のために国民の税金が使われていると知ったのは中学生になってからです。がれきの撤去や仮設住宅、水道や電気の復旧作業にも税金が使われていました。私自身、震災後は自分が通っていた小学校の体育館でしばらく避難所生活を送っていました。たくさんの他人同士と一緒に生活するのは、思っていた以上に大変なことでした。時間が経つにつれ、大人はみんないら立っていたと母から聞きました。また、インフルエンザがまだ流行っていた時期だったので、体育館の寒い環境や仮設トイレの不衛生さで病気が流行ってしまったそうです。そんな中、子供がまだ小さかった我が家は電気も水も復旧していない自宅へ戻ることに決めたそうです。震災から二週間が過ぎて水、一ヶ月が過ぎて電気が使えるようになった時のことは今でもよく憶えています。その時の私はその水や電気に税金が使われていることなど全く知りませんでした。

震災から六年経った今、毎年三月十一日のニュース特集などで被災地がどれだけ復興してきているのかを目にする機会があります。がれきでいっぱいだった土地がきれいに整備され、新しい家が建ったり、商店街ができたりしています。津波で恐れられた海水浴場にも人が戻ってきたりしています。家族を失った悲しみをいやすことはできないし、全てが元通りになることはもうありません。でも、自分の住む家があったり、通う学校があったり、生活がしやすい環境が整うことで人は前に進むことができるのかもしれません。復興税によって助けられた人がいたのは事実です。

私は買い物をする時に、消費税を払うのがもったいないような気がしたり、税金を取られているというマイナスなイメージばかりをこれまで持っていました。でも、私が義務教育を受けられていること、使っている教科書、中学三年生までは医療費が免除されていることなど、日常生活の中で税金によって支えられていることにも気付きました。現在働いている人が税金を払って国民の生活を支えてくれています。私は将来自分が働いた時に、税金を取られているではなく、払っていると誇れる大人になりたいと思います。被災地の復興や困っている誰かの役に立つように自分の働いたお金が使われているのが明確であってほしいです。そして、未来の役に立つ税金であってほしいと思います。

私を育ててくれた税

豊島区立千登世橋中学校 3年 矢澤 希空

私は今年十五歳。これまで「税金」と言えば、買い物の時に「何故かお店に余分に取りられる八%」という印象しかなかった。そんな私の誕生日には毎年、家族で私が生まれたときの話で盛り上がるのが恒例となっている。

私は一卵性の双子で、瓜二つの妹がいる。当然生まれたときの記憶などあるはずもないが、誕生時の話題が毎年恒例となるのには理由がある。それは私がたった一六〇〇グラムという未熟児で誕生したからだ。

一六〇〇グラムという小さな赤ちゃん、その上その同じ小さな赤ちゃんがもう一人という想像も付かなかった状況に私の両親は不安でいっぱいだったそう。しかし、そんな私もNICU（新生児特定集中治療室）で当時最新鋭の保育器に妹とともに入り、生後一ヶ月で二二〇〇グラムにまで成長させてもらい無事退院することが出来た。その退院の時の話である。退院と聞けばおめでたいことを想像するが、赤ちゃんだったとはいえ、当然高度な医療技術の下で一人前の入院生活を過ごした医療費は発生する。私たち二人の退院の日、父は今まで見たことのない金額が記載された入院診療費請求書を二枚受け取った。一枚は私の、もう一枚は妹のものだ。その金額は一人につき数百万円。その金額に驚いている父に病院の窓口の方は笑顔で言ったそう。「お子様たちは二〇〇〇グラム以下でしたので、未熟児養育医療制度を申請することで入院治療費は全て公費負担となります。ご安心ください。ご退院おめでとうございます。」保育器は一日十万円くらいかかるらしいと噂に聞いていた父は、双子の私たちがそれぞれひと月保育器でお世話になった金額が正直なところとても心配だったそう。しかし、その窓口の方の説明を聞き、改めて退院の喜びを噛みしめたと今となっては笑い話である。

中学三年になり、私は学校で租税教室という授業を受けた。それまで税金というものに対して、一度も深く考えたことなどなかった私は、そのときふっとこの未熟児養育医療制度も税金を財源とした社会保障制度であることに気付いたのだ。今私がこうして元気に中学校生活を送ることが出来ているのは、あのとき医療費を心配することなく未熟児の私の命を繋いでくれた税金のおかげだった。今こうして元気に生きていられること、私は税金に感謝しなければならなかった。

そう考えると、小さく生まれたり、病気を持って生まれてきたり、成長の過程で思いも寄らぬ病気や怪我で支えが必要になる子どもはたくさんいる。将来のこの国を支える子どもたちを今この瞬間も税金が支えているのだ。

私もあと五年で成人の仲間入りをする。ということは、今度は私がそういう子どもたちを支える立場になるということだ。そう考えると、税金というものは取られるものではなく、納めるものであるということがすんなりと受け入れられると私は思うのである。

去年の冬、私の家族は次の春から保育園に入園する妹の話をしていた。元々私の両親は共働きで、母は妹が生まれるまで週五日で働いていた。しかし妹が生まれてからは会社の育休制度を利用し育児に専念するようになった。母は妹が生後六ヶ月で仕事に復帰しようと考え、実際に三つの保育園に申請した。けれど、どれも申請は通らなかった。そしてその半年後にもう一度、申請をしてみると今度は審査を通ることができたのだった。そのような経緯もあり、私は妹が入園できたことを喜んでいて。けれど母がぼつりと漏らした言葉が私に一つの現実的な側面を直視させた。「でも、うちが保育園に入れたってことは、一つは入れない家庭があったってことよね。」それはまさに前回の申請時の私の家の状態だった。母は保育園に入園できなくて随分と歯痒い思いをした。お金がいるのに稼ぎに行けず家の財政は火の車。その時から私は、なぜ入園できない児童は生まれてしまうのかと疑問を持った。そこで調べてみて始めて待機児童の多さや保育士の労働の過酷さ、手当の少なさを知った。そのとき受けた衝撃はとても言い表せないほどだった。妹が入園出来たことだけを喜んでいて自分が恥ずかしかった。

日本の社会保障は国の歳出の三割以上を占め金額にして約三十二兆七百三十億円になる。私には想像もつかない莫大なお金だ。しかしその莫大なお金を以てしても待機児童は増えている。現代の日本は少子化が進んでいるのに。その一因として挙げられるのは女性の社会進出だろう。女性は家を守るのが仕事、という古い陋習が破られた今、女性が社会で活躍する場は多い。また父から聞いた話では、父の幼い頃は保育園に預けられる子供は減多にいなかったらしい。つまり子供の数は減り子供を預ける家庭が増えているのだ。そしてもう一つは保育士の労働水準の低さ、慢性的な保育士不足がある。育児は血の繋がっている親でさえあまりの大変さに病気になってしまうこともある。そんな育児を半日以上も他の大人が代わるのだ。その過酷さは想像を絶する。なのに保育士の給料や手当、預けられる子供に対しての保育士の数はひどく少ない。

このままでは日本は疲弊した人で溢れる悲しい国になってしまう。私は今年の夏この課題に全力で取り組んだ。出した答えは、一人でも多くの人が幸せになるために日本国民全員でお金を出し合う方法、つまり税を納めることだ。この結論を出すまで私は政府が将来税金を十%に増税する方針なのを内心で嫌だな、と思っていた。しかし今はそう思わない。税を引き上げることで結果的に笑顔になる人がいることを知ったからだ。もし税が引き上げられ、そのお金で待機児童や保育士の労働環境の改善など他にも様々な社会問題が解消されれば人々は今よりきっとずっと笑顔になる。税金でみんなが明るく幸せに暮らせる国。

それはなんて素敵な事ではないだろうか？

「税」という存在の重み

大和市立上和田中学校 3年 加藤 夏未

「税金」私はこの言葉を聞いて、今までは「働くようになったら払うもの」「使われ方が不透明」「大人が嫌っている」というイメージが先行してしまっていました。ですが、中学生になって税や保障のことを学んだり、税について興味のあることを調べたりする内に税の重要性、自分の生活の中での必要性を深く知ることができました。

まず、自分の生活を改めて見直すと、衣食住、教育、医療、これらすべてが税によって支えられていて、税無しでは私たちの生活は成り立たない、ということを実感しました。特に、中学生である私は教育が税に支えられていることがありがたいと思ったし、教育の場で使われる書物、施設を大切にしていくと共に、校舎に対して「古い」などとただ不平不満を言うのではなく、どうしたらきれいに、安全に、長く使えるか考えて、工夫していくことが重要だと思いました。

その一方で、税についての制度でこれは良いのか？と思うものがありました。それは「ふるさと納税」というものです。ふるさと納税は働くためや結婚などによって故郷を離れて暮らしている人が、その住んでいる地域ではなく故郷に納税できるという、とても良い納税制度なのですが、最近は納税のお礼である返礼品の競争が加速していて、返礼品で納税する地域を選ぶ人が増えているのです。私はこの現状を見て、ふるさと納税で納税する住民税は地域の活性化や教育、人件費に使われる重みがあるお金なのに、そのような扱いで良いのか？と感じました。そして、ふるさと納税のように目先の利益を優先して、将来や総合的な利益を考えず行動する人には税の重みを知ってほしいと思ったし、納税や制度のあり方を考えるべきだと思いました。

また、税の種類や使われ方を調べていく内に、今の世の中には税に支えられている日々の生活を大切にしない人や、税の存在を「高くて種類が多すぎる」と言っていないがしろにしている人がいるということに向き合っていく難しさを感じました。私も将来自分に直接的に関わってくる、所得税、住民税、相続税などのことを考えるときちんと払えるか不安です。特に相続税などある状況による税は対応が大変だし、親がいなくなっからの対処は本当に難しいことだと思います。ですが、私たちの生活は税によって支えられている、将来、自分たちが税金を払い、そして、税に助けられて生きてゆく、ということを今から意識し、前向きな姿勢でいたいです。

「税金」それは身近なお金ですが、使うのがとても難しいお金です。だからこそ、これからの未来を生きる私たちが今、税に支えられている日々を大切にし、さらに、未来へ向けて税の納め方、使い方をより良くするために考えていくべきだと思いました。そして、「税」という存在の重みを一人一人が自覚することが重要だと思います。

安全はタダではない

横須賀市立坂本中学校 3 年 鈴木 愛花

秋になると私の家の前には、落ち葉のじゅうたんができる。しかし、早朝私が学校の支度をして出掛けようとする道に埋めつくしていた落葉たちはすっかり姿を消している。そのかわり、はきそうじをしてくれている消防士のお兄さんが笑顔であいさつをしてくる。そう、私の家の隣は消防署だ。

消防署からは訓練をしている声が毎日のように聞こえてくる。その声の中には消防隊員を叱咤する声や、仲間を励ます声などが混じりあっていて、その声だけで隊員達がどれほど真剣に訓練に取り組んでいるかが簡単に目に浮かんできた。しかし、その時の私には実際に災害が目の前で起こっている訳ではないのになぜここまで真剣にするのかがピンと来ていなかったのだ。

その日、私が家でくつろいでいると、窓からこげ臭い匂いが一気に入って来た。びっくりして外に出てみると家の目と鼻の先にある老舗の料亭からモクモクと煙が上がっていた。私や集まった人はどうすればいいのか分からずにただ見ていた。ところが消防隊員だけは違った。朝見る時のやさしい顔ではなく、今までに見たこともない様な厳しい表情で火に向かっていった。しかし、聞こえて来たのはいつもの練習と同じ様な声だった。私はこの時の為だったのかと強く感じた。

私は税の作文と聞いて今の話を思い出した。有事の時、市民を守る為に日々鍛錬を怠らないのはきっと消防士だけではないだろう。私たちの生活はそういう人によって支えられている。消防車、救急車、パトカー、そしてこれらに携わるすべての人々が出動するには多額のお金が必要である。それらは税金によってまかなわれている。当たり前だが生活の根本である安全や安心はタダではないのだ。皆さんの中には彼らの必要性を強く感じた事が無い人もいるだろう。しかし私は強く訴えたい。事故や事件、災害において自分がいかに非力か、そしてプロがどれだけ頼りがいのあるものなのかを。

私もあと三年で社会の一員になるんだなあと思わされた事があった。ある日、友達と街を歩いていると選挙の応援に来ている国会議員がいた。テレビでよく見る有名な人だったので足を止めて見ていると彼が近づいて「君も、もうすぐ有権者だね。」と言った。全く予想もつかなかった言葉に私は驚いた。あと三年で有権者になる、そして働き出したら所得税も収めるようになる、自分と社会のつながりを初めて強く感じた瞬間だった。

前に述べた通り、安全はタダではない。そして近い将来その安全の代価として税金を払っていくのは私たちだ。そしてそれらを市民の為に有効活用してくれる人を選んでいくのも私たちだ。全ての中学生がこれを自確し、私たちの生活をよりよいものにする為に将来何をすべきかしっかりとした意見を持つ事、良い世の中を作るのに必要なのはそれだ。

税金のおかげ

山梨市立山梨北中学校 3 年 佐藤 あゆみ

私の兄は足に生まれつき障害をもっている。小さい頃から、国の税金で医療を受けたり、装具や靴を作っている。税金で負担してもらえなかったら、医療が受けられなかったかもしれない。だから、色々な人による税金の支援があったことを忘れてはならないと思った。医療だけではない。税金を通す支援のおかげで、兄は元気に学校に通えている。

兄を支援してもらったように、私も税金を通して困っている人に支援したいと考えた時納めた税金の使い道の中に政府開発援助・ODAというものがあることを耳にした。発展途上国の経済支援のために使われるこの税は貧困や飢餓に苦しみ困っている人たちがいる国を助けるため、お金を貸してあげるだけでなく、ダムや道路、病院を作ったり、病院で使う薬や注射器などを送ったりするという。それはまさに、税金を通して困っている人を支援することに繋がるといえるだろう。

兄を支援してくれたこの恩は、とても大きなものであり、決して返しきることができないだろう。しかし、恩返しの手段の一つに税金があるのではないだろうか。一人の力でたくさんの人にもらった恩は返せない。だからこそ、もらった支援をまた、他に困っている人を支援することで、恩返しになるのではないかと考える。

税について改めて考えた時、真っ先に浮かぶのが、消費税である。消費税が八%になってからレジで支払う金額が予想よりも高くて驚くことはないだろうか。私はたくさんある。でも、その時は「人のためになれる、困っている人たちの力になれる。」と、思うようになった。人は支えあって生きている。それを形にしてくれたものが税金だ。

税金を納め、社会に貢献できるのは大人になってからであり、中学生である私たちが今出来ることは、消費税を納めることだけだと思っていた。しかし、税金について改めて考えてみると、中学生である私たちにもできることがある。それは与えていただいた恩恵に感謝することだ。例えば、中学生である私たちの教育に税が使われている。一人一人に与えられた貴重な税金だ。私はこれからも懸命に学習し、社会に貢献できるようになりたい。私にもできることはないか、そう考えて行動することは、税金を通して人々の支えあいになるのではないだろうか。

税金が地球の今を、未来を支える上で大切な役割であることを心に留めておきたい。やがて、大人になった時、税金を通して社会に貢献できるような人になりたいと思う。この世界に生きている、一人の人間として、誰かのためになることを忘れず、税金を払うというその役割を胸をはって果たせるようになりたい。

税について考えた時、消費税や住民税などが頭に浮かんだ。そして、アメリカも日本と同じような税の仕組みなのだろうかという疑問がわいた。なぜなら、父の転勤が決まり、アメリカでの生活を控えているからだ。

何気なくインターネットで「アメリカ、税金」と検索してみた。すると、アメリカの税金は、州によって大きく違うという記事が目にとまり驚いた。日本は、消費税は全国同じだし、住民税も地域によって大きく違うという話は聞いたことがない。日本は国で決められていることが、アメリカでは、住んでいる州ごとに自由に決めてよい仕組みになっているからだろう。アメリカと言えば、たくさんの移民が住んでいて、人種も様々で、地域による格差が大きい。税金の問題も、その地域格差に大きく影響しているのだろうと思う。さらに調べてみると、教育にかけられる税金にも差があることが分かった。そして、その差が治安の問題とも密接に絡み合っているのだそう。教育にたくさんの税金をかけている州の学校は立派で、設備も整い、必然的に優秀な生徒が集まり、ますます水準が高まる。一方、そうではない州の学校は貧しく、選んで入学する生徒もなく、レベルも上がらないという悪循環に陥っているようだ。州自体の貧富の差がそうさせるのかもしれない。それにより治安の悪化にも繋がるという。

そう考えると、私たち日本人は本当に恵まれていると思う。中学生一人当たり年間百万円近い税金が使われているそう。当たり前に使っている教科書も学校の机も椅子も、税金制度のおかげだということを忘れてはいけない。どの県の子も同じように教科書を手にし、学校で勉強することができる。各県の住民数による学校数の違いはあっても、教育水準に大きな違いはないことも、日本の教育の素晴らしいところだと思う。人が集まる大都市ばかり水準が上がっていくということもない。現に、私達が住む福井県は、学校数の少ない県の一つだけれど、学力、体力共に全国トップクラスに位置している。これは、税によって地域に合った教育がなされている証拠なのかもしれない。

税というと、子供には大きく関わらないようなイメージを持っていたが、税のおかげでこうして机に向かい、涼しい教室で勉強に集中できているのだと思うと、本当にありがたく、とても身近なものに思える。増税の議論に反対する声も聞くが、国民から集められたお金が災害の復興や教育の発展、日々の安全で快適な暮らしのために使われるのであれば、税金を納めることは、たくさんの恩恵を受けている私達にできる最も身近な恩返しなのだと思う。目に見える使い道ばかりではないため、納税に対する不満や不安を抱かれないような工夫も必要だろう。明るい未来のために、安全で住みよい日本を守り続けるために、税金が有効に使われることを願っている。

無料は「当たり前」じゃない

魚津市立東部中学校 3 年 石崎 理来

「では、教科書の裏に名前を書いてください。」

これは、私が中学に入ってから新しい教科書を配られるたびに言われる何回も聞いたことのあるセリフだ。その度に私は当たり前のように名前を書いていた。

しかし私は、ふと名前を書くときに気づいたことがある。それは名前欄の下にあったこの言葉だ。

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、無償で支給されています。大切に使いましょう。」

この言葉を見て、日本の税金によって私たちがお金を払わなくても当たり前のように学習することができるようになっていたのだと分かった。私はこのことを知り、税金に対して、改めてありがたみを感じた。

他にも、国の税金によって私が助けられていることは多くある。その一つの例として、「こども医療費助成制度」というものだ。

今までに何度か、「無料のうちにいってかんとね。」という言葉を目にしたことがある。初めに聞いたときは、なぜ無料なのかよく理解できなかった。しかし、中学三年生になった今、この言葉の意味を理解することができる。なぜ私たちは無料なのか。それは国の税金で賄われているからだ。だが、私の兄が病院へ行こうとすると「お金かかるから家の薬飲んで。」と言われていた。兄は高校生だからこども医療費助成制度の対象にならないのだ。だから、中学生である無料のうちにいっておいちが得だと思ふ気持ちはよく分かる。

しかし、私たちが無料で病院の診察を受けることができるのは、税金が支えてくれているからである。無料だからといって、ささいなことで病院に行っていないか。薬をもらいすぎていないか。全てのことを税で済ませようとする、税によって助けられても、また税で負担しなければならなくなってしまう。それでは税金の無駄遣いとなる。

私たちは、まだ納税者ではなく税を使う立場にいるが、税金を納められない分、少しでも税金への負担を減らすことをするべきではないだろうか。

私たちは一歩一歩、大人へと近づいている。大人になると納税者となり、国のために税金を払うことになる。自分が払った税金で誰かの手助けをしたり、一つでも多くの命が救われると思うと、それはとても嬉しいことだ。そして、税金を払うことをとても誇りに思う。

私は今まで送ってきた生活が当たり前だと思っていたが、そうではなかった。私のために税金を払ってくださる人のおかげでこうして豊かな生活を送れているのだ。だから納税者になったら、今度は私が税で恩返しをして、税で助け合う日本を築き上げられるようにしたい。そうすることで、税金を通して人と人とのつながりを創ることができるはずだ。

拝啓 私を助ける納税者様へ

長久手市立南中学校 1 年 両角 優衣

私は、不思議に思っていた事がある。それは私や弟が医者 of 診察を受け、薬をもらっても、母がお金を払わずに帰ることだ。私は、今までに二回手術を受けた事があるが、子供ながらにお金の心配をした。その時も、母が「大丈夫。医療費は無料だから。」

と言った。私に心配をかけさせない為の嘘だと思っていたが、私の住む市では、「子ども医療費助成制度」がある。健康保険加入者ならば中学三年生までは、入院・通院にかかる保険診療分の自己負担分を全額助成してくれる。では、そのお金はどこからくるのか？それは、税金である。医療用装具を作る際に支払った代金も、申請すれば返金される。もし、この助成制度がなければ、成長に合わせて装具を作り変える事をためらっただろう。どこかの誰かが、納税してくれたからこそ、新調した装具をつけて、友人と徒歩で登校する事ができるのである。徒歩で登校する事は、車イスを利用する事が多い私にとっては、夢のような事である。そんな毎日を送る事ができるのも、税金が影で支える大切な役割を果たしてくれているからだ。

しかし、「税金が高い」「自分のお金は自分の事だけに使いたい。」と思う事は誰にでもあるだろう。脱税するのもその為だろう。しかし、生活していく以上、納税はのがれる事ができない義務である。イヤならば、「義務としての納税」ではなく、「恩恵を受ける為の納税」と考えてみればいいのではないか。毎日の当たり前の様な生活は、税金で成り立っている。しかし、「義務」と言っても私達の大事なお金に違いはない。国や地方自治体は、用途を明白にし、報告する事を怠ってはならない。自分の税金がどの様に使われているのかをきちんと把握する事も必要なのだと思う。

納税の義務が無い私に、母が言った。

「今、お金を払っていない様に見えるかもしれない。でも、自分の代わりに名前も顔も知らない誰かが支払ってくれているという事を忘れないで。たくさんの納税者がいなければ手術費も治療費も全て自分で払わなければいけないのだから。助けて頂いているという事に感謝しなくてはいけない。」

今ではこの意味が良く理解できる。「税金を納める」という時、お互いを助け合う精神を忘れてはならないと思う。今の私にできる事は、名前も顔も知らない納税者の「あなた」へ、感謝する事しかない。そして、納税する年齢に達した時、きちんと納税する事こそが、私を助けてくれた人達への恩返しになると思っている。私が納税した税金で、どこかで助かる命があります様に、と願いながら。

先日、祖父が病院を受診する際に僕が母と一緒に付き添った時のことだ。祖父は幾つかの検査を受けてから診察を済ませ、治療費を支払った。その額は四百七十円。僕はその額に少し驚いた。更に、その後に行った薬局では一ヶ月分の薬を処方してもらったが、支払ったのは二百八十円だった。

僕が病院を受診すると治療費・薬剤費は五百円以内。それは地方自治体の行う子ども医療費助成制度のお陰であることは以前から知っていた。幼い子どもは病気になりやすい。特にアレルギー持ちの僕はこの制度に大変お世話になりこのような社会の仕組みに感謝している。今回、同様に病気になりやすい高齢者についても制度が整っていると知り、日本の充実した社会保障制度に感心した。そして、それらは僕達国民からの税収で賄われている。

人々が古来より集団生活を始め社会を形成してきた理由の一つとして協力して助け合うためというのがある。その協力の形の一つが現在の税金制度だ。しかし、この納税の義務から逃れようとする者も少なからずいるようだ。

一年程前、ニュースで「タックスヘイブンでの脱税」という話を耳にした。タックスヘイブンとは極端に低い税率、又は無税の国のことだ。ニュース内容は、その国に実態の無い会社を作って支払いという形で送金し脱税するというものだ。僕は何よりこの脱税を幾つかの国のトップも行っていたということに驚愕した。国をより豊かに発展させていくべきはずの人達が国民には納税を迫り、一方で脱税をしていることに酷い憤りを覚えた。ただ、日本の政治に関わる人物はいないと報じられ安心した。高額な脱税により税収が減れば増税という可能性も高まり、誠実に働く者にしわ寄せがくるのは許せない。

更に、少子高齢化に伴い、僕達がこれから働いて負担すべき税金は計り知れない。一生懸命働いて得た給料が税金でごっそり持って行かれると思うとやるせない気がする。しかし、自分たちが今まで恩恵を受けたことや、これからも様々な場面でお世話になることを考えると、税金制度を上手に行い、社会保障を充実させることが不可欠であると思う。

誰でも、そのサービスに見合わない高額なお金を支払うことは嫌だ。しかし、支払った金額同等、又はそれ以上のサービスが提供されれば嬉しい。よって、用途が明確で社会がより良くなると様々な立場の人々が納得できるのであれば、税率を上げる法案に賛成する人や進んで納税する人が増えるに違いない。

時代の流れと共に求められる制度やサービスは変化していく。だからこそ、変化に対応し国民の誰もが納得、満足できる税金の利用方法を吟味していく必要がある。税金の恩恵を受ける僕達が今出来ることは、消費税を払うことぐらいだ。しかし、将来的には責任ある社会人として納税をはじめとした義務を果たし、日本社会に貢献できる人になりたい。

誰もが恩恵を受ける税金を知る

富士市立岩松中学校 3 年 山口 留衣

図書館に入り、ぎっしりと収められた棚の中から一冊の本を悩み選ぶことは私の至福の時である。限りある小遣いでの本の購入は、月に一・二冊が限度だが図書館を利用すると無料で本を借りることができる。市販されている本と同じ本が無料で読むことができるのはなぜか。それは図書館が公共施設であり、税金によって維持されていることを小学校の社会科見学で学んだ。

無料で本が借りられること。蛇口をひねると安全で美味しい水が飲めること。電話をかけると緊急車両が駆けつけてくれること。整備された公園や舗装された道。例をあげるときりがない程、公共サービスの恩恵を受けて私達の豊かな日常は成り立っている。公共機関の源は「税金」だ。

税金を納めることは、個人の資産を奪われていくようなイメージがあった。無料で自分の得ることは諸手を挙げて歓迎し、損となる道は、なるべく避けて歩きたいと思ってしまう私の考えは「税金」を知り理解することで大きく変化した。

税の歴史は古く、古代エジプトにまで遡る。日本の本格的な税のしくみは「大化の改新」がはじまりだ。そこから長い年月を経て現在の税システムが構築された。税金には生活に身近な消費税を含め多くの種類がある。税のシステムや種類も、時の流れによって変化する。今後、日本は超高齢化社会へと突入り医療費や介護費用が増大することが予想できる。少子化により納税者は減少し、税収入の減少を担う為、平成三十一年十月には消費税は十パーセントへの増税が予定されている。時代や状況により変化する税金だが、世界中全ての国において共通していることがあると思う。それは「国民の税金は、それぞれの国を支え動かしている」ということだ。税金がなくなれば国は成り立たない。

しかし、好んで納税する人ばかりだろうか。税金がなくなると公共機関は、利益を追求する民間企業が営むことになる。これまで当然のように受けてきたサービスは有料化される。国民が会費の様に納める税金によって、全ての人が平穏で健康的な生活をするができる。小学生ひとりあたり、年間約八十五万円。中学生では約百万円の税金の補助により私達は安心して学ぶことができる。日常生活は税金によって支えられていることを知らなければ、納税が義務感のみに行われ嫌悪感すら抱いてしまっただろう。

四年後、私に選挙権が与えられる。消費税の増税など国民生活に大きな影響を与える税金を管理する代表者は、しっかりと選んで投票したい。あたり前のことが当然のように存在し維持するには税に対する理解が必要だ。税金について学んだ今、与えられることに得を感じるだけでなく、支えることにも喜びを感じる心豊かな納税者に私はなりたいと思う。

“From the People of Japan” モンゴルの様々な施設で出会ったこの言葉は、私の税金に対する印象を大きく変えた。

私は今年の夏、日本が支援する開発途上国の現状を知るため、JICAの海外研修に参加しモンゴルを訪れた。モンゴルというと、多くの日本人は広い草原にゲルがある情景しか思い浮かばない、未知の国だろう。しかし、実際には首都のウランバートル市内は、十階建てくらいの建て物が立ち並び、車の行き交う人口一五〇万人の都市である。ただ、社会サービスが不十分であったり、建て物の不足を補うための建設ラッシュで防火地策は整っていなかったり…。まだまだ発展中の国だ。

そんなモンゴルを一番支援してきたのは日本である。研修中、様々な公共施設を視察した中で、印象に残った場所を二つ挙げる。一つ目は消防署だ。モンゴルは乾燥していて火災が起きやすく、燃え広がるのも速い。そんな現地に必要不可欠である消防車のほとんどは、日本が寄付したものだ。それに加え、日本は技術者を派遣し、現地の人々が乗りこなせるように直接、使い方を教えている。二つ目は、ウランバートル第四火力発電所だ。ここでは市内の電力を約七十%、温水を約六十%を賄っている。冬はマイナス四十度にもなる地ではこれもまた必要不可欠なものである。以前は安定した供給が難しかったが、日本から派遣されたシニアボランティアや、百億円以上の有償資金協力での制御板やタービンの整備により、現在は安定するようになった。

この二つだけでなく、モンゴルに対する日本の支援には共通点がいくつかある。まず、物を寄付するだけでなく人材を派遣して、現地の人に寄りそった支援であること。次に、寄付する物資は日本の製品であること。そして、これらは日本で納められた税金によって成り立っていること。税金がモンゴルの人々の生活を支えていることを知って、日本人であることを誇りに思った。

また、日本が一方的に支援をしているだけではない。日本の製品を寄付することは、日本政府が日本の企業の製品を買うことになる。すると、日本の企業の活性化にも繋がるのだ。そして、現地の人々は日本人に感謝し、現地を訪れた時は温かいもてなしをしてくれる。東日本大震災の時、前述した発電所では全職員の一日分の給料を日本へ届けてくれることもあった。このように、困った時はお互い様であり、日本とモンゴルは素晴らしい関係で結ばれている。きっと、日本が支援する他の国や地域にも同様の関係にあるのだろう。

税金は日本国民だけでなく世界で多くの人々の生活に役立っている。そして、日本と世界を繋ぐ素晴らしいものである。現地で支援をすることは簡単ではない。しかし、納税の義務を果たすことは世界貢献への第一歩となる。だから、私は働くようになったら、税を納められることを誇りに思いたい。

私は、小学校 5 年生の時、府議会や府政への理解を深めるために京都府が開催している「京都府子ども議会」に参加した経験がある。府内から集まった小学生がそれぞれの班ごとに話し合いを重ね、意見をまとめて施策案を議会で発表するというものだ。発表当日は京都府議会の本会場が使われ、京都府知事である山田啓二さんの目の前で案を発表するという、本格的な雰囲気の下で行われた。社会を機能させるためにルールをつくり、予算を決定するという府議会の仕事を模擬体験できる貴重な経験であった。

子ども議員は府内から広く選ばれたので、私のような京都市内に住んでいる生徒もいれば、舞鶴市や京丹後市から来ている小学生もあり、意見はさまざまであった。市内は観光客で溢れているのに、府北部の生徒たちは、「過疎や観光客離れが進んでいるので、丹後ちりめんなど地域産業の P R をもっとしてほしい。」という意見を訴えていた。同じ京都府内といっても抱える問題はさまざまであり、皆が納得できるルールをつくり、それにかかる予算を決めて、大切な税金を使うということの難しさを感じた。

すべての国民が、自分たちの生活をより良いものにするために税金を払い、私たちの代表者である議員が税金の使い道を決める、一見当たり前のようで、誰もが納得できることのように思えるが、私が子ども議会で体験したように、本人が困っていると感じていない事でも、他方では困っている人がいて、社会的な必要性がある場合には税金を使わなければいけないことがあり、それを納得できない人が少なくないというのも理解ができる。

子ども議会では何日もかけて話し合いが行われたので、自分が税金の使い道として必要性が理解できない意見が出された時も、何度も話し合ううちにその人たちの切実さがわかり、問題を共有できるようになった。新聞やニュースを見ても法案や予算で折り合いがつかず問題が解決しなかったり、解決が遅れたりすることがある。私もはじめは丹後ちりめんのことさえもよく知らなかったのに、「不況で着物が売れなくなり、生産者は生活が成り立たず、自殺に追い込まれた人もいる。」と聞き、胸が痛んだ。

私たちの大切な税金を有効に使うために一番大切なことは、他者と思いやる気持ちであり、それは人が生きていくために一番大切な気持ちのはずだ。中学生である私が現在税金を払っているのは買い物をしたときの消費税ぐらいであるが、大人になり社会人として働き始めたら、自分の収入に併って税金を納め、その税金の使い道を決める議員を選ぶ選挙に参加することになる。「他者を思いやる気持ち」を忘れず政策を考えられる議員を選べる社会人になるとともに、自分には関係のないと思われるような税金の使い道にも理解を深められる社会人になろうと思う。

税金パワー ～未来を明るく！～

京都教育大学附属桃山中学校 3年 島田 莉沙

毎年、六月に行われる「琵琶湖市民清掃」に今年も参加した。一通り清掃が終わり、眺めた琵琶湖に改めて魅了された。昔から琵琶湖はこんなにも美しかったのか。父に尋ねてみた。すると、父は首を横に振った。数十年前は、工場排水による赤潮の影響などから、数十センチ底も濁って見えなかったという。それほど汚れていた琵琶湖がなぜこんなにも、美しくなったのか。疑問に思い、調べてみることにした。

すると、「税金」がキーになっていることが分かった。具体的には、県税からの「琵琶湖保全再生等推進費」や「琵琶湖森林づくり県民税」などがある。どちらも、琵琶湖周辺の保全のために使われている。水質や生態系についての調査、環境保全についての説明会など多様な活動が行われている。そして、それらの活動によって、県民の環境への関心が高まり、現在の琵琶湖があるのだ。

小学四年生の時、「やまびこ」という学校行事に参加した。「やまびこ」とは、滋賀県の森林について考えることを目的としている。「琵琶湖森林づくり県民税」によって建設された宿泊施設で活動するのだ。実際に森林へ行き、自然を肌で感じる事ができた。また、小学五年生の時に、「フローティングスクール」に参加した。これは、「うみのこ」という船に乗り、琵琶湖を一周する学校行事だ。滋賀県の小学五年生は、毎年、全員参加することになっている。「うみのこ」では、顕微鏡で、琵琶湖のプランクトンを観察するなどし、琵琶湖についての学習をすることができた。

これらの経験を通して、滋賀県の環境について深く理解することができた。そして、私が、環境保全に関心をもてたのは、「県税」のおかげともいえるだろう。なぜなら、これらには、「県税」が使われているからだ。

私は今まで、税は自分と遠い存在だと考えていた。しかし、今回、「琵琶湖市民清掃」をきっかけに、税について調べていくうち、税を身近なものと感じるようになった。また、今までは、それほど納税について考えたことがなかった。しかし、税金の使われ方を知り、その大切さが分かったことにより、率先して納税できる大人になりたいと考えるようになった。

法律で納税は、「義務」となっているが、「義務」と強制されなくても納税する世の中になってほしい。そして、税金パワーで地域や社会の未来を明るくしていこうではないか。

少しの努力が

大阪市立友渕中学校 3 年 井上 莉奈

私の祖父母は、介護保険制度を利用して家事の代行サービス受けている。私達家族とは一緒に暮らしていないので、このサービスなしでは今の生活を維持することは難しい状況である。お正月に祖父母の家に遊びに行った時に、私のためにお茶を出そうと立ち上がってくれた祖父に私は、

「私がやるから、おじいちゃんは座ってて。」

と声を掛けると祖父は、

「これもリハビリや。税金の無駄使いをしないように、今はヘルパーさんに来てもらうのを一日少なくして頑張ってるんやで。」

と、嬉しそうに言った。私は、なぜ祖父が、嬉しそうに話すのかその時はわからなかった。税金を使ってもこれまで祖父は一生懸命働いてきたのだし老後は快適に暮らしてほしいと思う。しかし、この作文をきっかけに税金について調べると祖父の言った意味が少し理解できた気がする。

今の日本は、高齢化による医療や介護などに使う社会保障費が増加しており、日本の歳出全体の三割以上を占めている。おそらく祖父は、この状況を知っていて税金を無駄使いしないようにと言ったのだろう。

私は一人一人のこのような心がけがとても大切だと思う。なぜなら「高齢社会白書」によると、二〇一六年度時点で二・二人で一人の高齢者を支えていたが、二〇六五年には一・三人にまで減少するからだ。その時私は、六十三歳。そして父や母が介護保険を利用する年代となっている。核家族化が進んでいる中、家族以外の力を借りることは必要不可欠であり、すばらしいシステムであると思う。私達家族もいずれ離れて暮らすことになればこのサービスが続いていると安心だ。そのためには、今から国民一人一人が税金を大切に使うと心がければよいと思う。無料だから、安いからと公共のサービスを利用しがちだが、祖父のように、ほんの少しの努力が税金の節約につながる。そうすれば本当に必要とされる所でその税金が使われるでしょう。祖父はよく、

「いつまでも人の役に立ちたい。」

と言う。きっとその思いが税金の節約につながっているでしょう。だからあの日、嬉しそうな顔で私に話してくれたのだ。

これまでの私は、税金とは強制的に払わされているものだと思っていた。それはテレビでよく「税金の無駄使い」という言葉を耳にするからだ。無駄に使われると知っていて気持ちよく税金を払えるわけがない。祖父のように、税金の無駄使いをしないと心がけて使えるような人が増えると払う方も気持ちよく納められる。そんな一人に私はなりたい。

当たり前のことのできる人に

朝来市立和田山中学校 3 年 中村 怜

先日、兵庫県知事選挙があった。投票日、両親と祖父が投票に出かけて行った。私の祖父は八十七歳。一年ほど前からすっかり体が弱ってしまって、車を運転することはもちろん、今はひとりで歩くこともやっとやっとというところである。鼻から酸素吸入をし、ボンベをいつも携帯している。そんな祖父が選挙に行くといった。なぜ、それでも選挙に行くのかたずねると、「国民だからな」と言った。

祖父は、選挙だけではない。動くことが困難な身体ではあるけれど、出来ることは時間がかかってもなんでもやろうとする。確定申告にも、福祉タクシーを使って出かけていた。病院から帰ってきたら、必ず領収書を保管している。確定申告に必要らしい。もう運転できなくなった車の自動車税も支払いにいていた。

「納税は国民の義務だからな」

祖父は普段デイサービスの施設を利用している。身体の調子をみてもらったり、入浴介助をしてもらったり、他の利用者とおしゃべりしたり、楽しいひと時を過ごさせてもらっている。家には、転倒防止用に柵をつけてもらった。外に出て気分転換ができるようにと電動カートをリースしてもらっている。これらはみんな、介護保険制度によるものである。介護保険の財源は、半分が税金、半分が保険料である。つまり税金と保険料で老後の保障をしてもらえているのだ。介護保険制度のおかげで、高齢者も家族も生き生きとした生活を送れている。私は税金が祖父の幸せに使われていると実感していた。

私は、それは当たり前のことと思っていた。なぜならその税金は、祖父が幸せに暮らしていくためにこれまで祖父自身が支払ってきたものだから。祖父の「幸せ預金」なのだから。今その恩恵を受けることは当然のことと思っていた。

しかし、祖父の姿をみて、考えがかわった。「国民だから」と言って、不自由な身体であっても、選挙に、納税にと出かけていく祖父を見ていると、税金は、自分のためというよりは、国民が幸せに暮らすため、国がもっと発展するためのものなのだと気づかされた。自分さえよければそれでよいということではない。税金を支払うことは損なことではない。自分のため、誰かのため、国のためになっているのだから。

私も祖父のように、立派な、大きな人間になりたい。生きている限りは自分の果たすべき責任を自覚し、社会の一員として、やるべきことを当たり前でできるそんな人間になりたいと思う。

いのちを守る税

桜井市立桜井中学校 1 年 萩原 叶女

私達の住む日本では、日本国憲法により、「教育の義務」「勤労の義務」そして「納税の義務」が定められている。納められた税金で、私達の住む社会は整備され、社会秩序も保たれている。日々当たり前のように生活しているありとあらゆる設備も、税金で整えられていて、今の便利な生活はまさに納税によって支えられている。

私の家では猫を二匹飼っていて、今年の夏でちょうど三年目を迎える。我が家の猫は元は保護猫で、奈良県の動物愛護センターから譲渡して頂いた。当時小学五年生だった私は、センターで両親と共に講習を受け、その時初めて、日本では毎年多くの犬や猫が殺処分されているという現実を知った。環境省の統計資料によると、平成二十七年度は、犬と猫合わせて、計八万二千九百二匹が殺処分されている。税金は人々の役に立つ、便利な生活を支える為に使われるのに、動物を殺す為にも使われているのだ。このような事は、他のどの国でも行われているのかというと、ヨーロッパには、動物を殺す為の施設は無く、例えばドイツをはじめ、ヨーロッパの国々には、「犬税」という、人間でいうところの市町村民税が存在する。各国の犬税は、飼っている犬の頭数分を支払い、散歩中の犬のふんなどで汚れた街の清掃や、ふん専用のゴミ箱の設置などに使われているそうだ。これは犬のみの税金だが、税金を支払う事で、その動物を登録する義務も生まれるので、日本でもペット税として導入すれば、飼い主にも責任感が生まれ、捨てられる命が減るのではないだろうか。

インドのガンジー元首相の言葉に、『その国の偉大さと道徳的な発達の程度は動物の扱い方によって決まる。』とある。これからの日本は、動物を殺す為ではなく、命を守るために、税金を使う国であってほしい。自治体が引き取る犬や猫が、病院や高齢者施設を訪問して人々を癒す存在になったり、災害現場へ赴く救助犬へと育成されたりする日が来てほしい。ペット税の導入で、私達一人ひとりの意識が変われば、動物同伴で公共施設の利用がしやすくなるなど、今よりももっと、人にも動物にも優しい町になれると思う。

私は今中学生で義務教育を受け、将来は動物の命を守るような仕事につき、納税の義務も果たせる大人になりたいと思っている。日本が経済的に豊かなだけでなく、世界に誇れる真に豊かな国になれるよう、これからの日本を担う私達から、税についてより真剣に考えていきたい。

私には、曾祖父と曾祖母がいる。曾祖父は十年ほど前の事故で足が不自由になり、曾祖母が、曾祖父のお世話をしている。でも、最近、曾祖母も足が痛いと言い出した。毎日でも通ってあげたいが、私の家から二人の家までは一時間近くかかる。「どうしたら、二人が楽に過ごせるだろう」と考えていると、お母さんから、「ヘルパーさんと呼ぶことになったらしい」と聞いた。私は、「よかった」とほっとしたが、少し心配にもなった。ヘルパーさんと呼ぶということは、当然、お金がかかる。年金暮らしの二人には、負担が大きいのではないか。しかし、一回でかかった費用を聞いて、安心した。「これだったら、お金のことを気にせず、来てもらえるな」と単純に思った。でも一つ疑問を持った。「どうして、こんなに安く利用できるのだろう？」ということだ。調べてみると、「お年寄りの介護サービスの一部にも税金が使われている」と書かれていた。正直、私は、昔から、税金を払うことの意味をわかっていなかった。また、前に「税金が不正に使われていた」というニュースを見てから、さらに、税金を払うことが正しいことなのかどうかさえ、分からなくなっていた。でも、「ちゃんと、社会のためにも使われているのだ」と知り、「自分が払わなければならない税金をきちんと払おう」と思うことができた。

国民の三大義務の一つである、納税。ただ税を納めることは誰にだってできるが、そうではなく、「社会の役に立ちますように」という気持ちを持って税を納められるようになりたい。本当に小さなことだけど、ひとりひとりのその気持ちが、社会を支える力なると信じたい。そして、その気持ちを忘れることなく、税金を納められる大人になりたいと思う。

街を歩けば、私たちが払う税金を使って建てられた建物や設備がたくさんある。事故を無くす、信号機。安全を守る、警察官。そして、私たちが通う学校。この、日常と化している幸せな暮らしは、すべて私たちの税金によって成り立っていることを忘れてはならない。また、生涯にわたって税金とつきあっていくのだから、理解をより深めていきたいと思う。

誰もが望む、安心して暮らせる町。その理想の実現には、税金は欠かせないものなのだと、よく分かった。私たち国民と税金には切っても切れない縁がある。恩恵を受ける場面では感謝し、今後、自分が働き手になった時には、自分の役目である。納税をしっかりと果たしていきたい。「自分の苦」より、「みんなの喜び」のために行動できる大人になりたいと強く思った。

税の必要性

広島市立広島中等教育校 1 年 浅野 斐音

三年前、広島市で土砂災害が起こり、被災地と呼ばれた安佐南区に私は暮らしている。私は土砂災害直後の悲惨な状況から現在までを目の辺りにしてきた。

土砂災害が起こったときは、山がくずれ、土砂が地面を埋めつくし、避難者が多く、復興までの道のりは果てしなく感じられた。しかし、たくさんの自衛隊員や消防・警察の方々が救助や土砂の撤去を行った。自衛隊員の方は避難している方が少しでも快適に過ごせるようにお風呂を設けた。また、山の上の方に暮らしている方までみんなが安全に安心して暮らせるようにするために、砂防ダムの建設も進んでいる。それらも全て税金でまかなわれている。また、各避難場所には多くの避難者が避難していたが、その一部の食糧も税金でまかなわれていた。安佐南区の土砂災害にはなかったが、東日本大震災では、家が壊れ住む場所がない人達のために仮設住宅も設けられた。

一方、住宅が失われた土地について、広島市は、固定資産税と都市計画税の軽減措置を二年間延長すると決めた。普通、両税は、住宅が建っていないと高くなる。しかし被災地では、再建支援のため被災後二年は住宅が建っていない土地でも税が軽減される。今災害では一六年度末で適用外になるが、市は、被災地で砂防ダムが完成しつつあり、被災者が再建を考え始めているという現状を考慮し、市独自の支援策として延長することにした。措置により、両税の負担は4分の1程度におさえられる。

災害が起こった三年前から今のような生活を送ることができるようになったのに税金は欠かせなかったのではないだろうか。避難していた方も現在は自分の家に住み、暮らすことができている。そして、私達も困ることなく生活を送っている。まだ、安心して暮らすことはできていないかもしれない。雨が降ると、ひんぱんに警報が出される。また、あんなことが起こったらと怖くなることもある。しかし、これからだれもが安心して安全に暮らしていける街をつくりていきたいと思う。税金と共に。

私は今まで税というものが身近なものだという実感がなく、難しいものだというイメージが大きかった。しかし、税というものはとても身近なものであり、私達の生活に必要なもの、そして欠かせないものだということを強く感じた。

無限の命と手をつなぐ

岡山大学教育学部附属中学校 3 年 木村 真実子

小学校に入って、先生にされた質問の中で、私が最も鮮明に覚えているものがある。

「この教科書は、一冊いくらだと思う？」
インクのおいがただようツヤツヤの表紙に、様々な幼い予想が飛びかった。私も考えた。

「せんえん！」

「いちまんえん！」

もちろん答えは「ゼロ」だ。私が驚くと共に、初めて税金という存在を意識した時だった。

今から百年以上前の税は、現在のように私たちの幸福を目指すものではなかったようだ。日露戦争の途中には「非常特別税」という臨時の増税があったという。二度にわたって、各種の消費税を引き上げたり、通行税などの税を新設したりした。そしてそれらの税は、結果的に八万人以上の命を「奪う」ことに使われてしまった。当時の人々は、払えば二度と自分自身の幸福に使われることのない税を納めるたび、どんな気持ちでいたのだろう。

それに対する現在の税を考えたとき、私はそれが無限の命とつなぐことのできる「手」のようなものだと思う。人それぞれに違いはあると思うが、一説では人間一人が一生を通じて知り合える人数は千七百人くらいだと言われている。日本に暮らす人々のうち、七万人に一人と知り合えるかどうかだ。しかし、税金によるつながりはそのような範囲にとどまらない。

私たちが払う税金は、例えば公共事業関係費となり、全国の保育園や幼稚園の整備またはその後の補助金などに使われる。そうすることで私たちに、それらの施設に通う四百万人近い子どもと手をつないでいることになる。あるいは社会保障関係費へと姿を変え、介護給付費、医療の充実という役目をもつ。介護を必要とする高齢者六百万人以上や、国内で医療を必要とする人、結局はすべての人と、私は税金という手でつながっていたのだ。

さらに視点を広げると、税金の手はまた違う場所へもつながっていた。経済協力費として開発途上国の人々と、つまり世界と手をつなぐ。また、私の住む県では「おかやま森づくり県民税」を導入し、苗木の整備、害虫の駆除などに役立てている。森林に生息する多様な生命にまで、私たちの手が届くと知って驚いた。

私たちのもとのびた税金の手がつなぐことのできる命の数、重さを考えたとき、小さな税金の積み重ねはこの上なく大きな役割を持つように感じられる。顔を知らなくても、話したことがなくても、数えきれない命と私は手をつないでいる。誰一人としてこの手を離すことがないように、もっともっと強い結びつきをつくっていくために、私はつながりの一部という役目を果たしていきたい。そうしていつしか、より豊かになった未来の私たちへと、この手を確実につなぎたい。

「幸せ」を実感できる社会を

名西郡神山町神山中学校 3 年 檜本 千晶

「どうして、こんなに安いお金で済んでいるのだろう。」

私は、この春から病院にお世話になっている。診断がおりたときは、今後入院や通院で、どれほどのお金が必要になるのだろうか心配になった。しかし、実際に病院で支払ったお金は、想像よりもはるかに少なかったのだ。

それから数ヶ月して、学校で租税教室が開かれ、税金の種類や制度、使われ方などについて学ぶ機会があった。

私が住んでいる町には「子どもはぐくみ医療費助成制度」がある。これは、私たちの町に住む高校生までの子どもに係る医療費や薬剤費（自己負担分）・入院時の食事代を町が助成してくれる制度だ。私が病院に支払うお金が少なかったのは、このおかげだった。

そこでその他の助成制度について興味を持ち、調べてみると、県にも「小児慢性特定疾病医療費助成」等の制度があった。これも子どもが指定された病気になったときは、助成が受けられるというものだった。

しかし、これらの助成制度には、年齢制限がある。大人になっても引き続き治療が必要な人へ継続した支援をしてほしい。打ち切られると困ると思った。

日本は外国への多額の支援をしていると社会の授業で学んだことがある。このお金を国内で使えば、病気や貧困に苦しむ人たちに支援ができ、日本は一層暮らしやすい社会になるのではないかと考え、そのことを父に言った。

すると父は、「世界には病気や貧困で苦しい生活をしている人がたくさんいて、そんな人たちのために日本は支援している。日本や日本人だけ良ければよいというのはおかしいのではないか。」と話してくれた。

実際毎日のニュースからも、世界には想像もつかない状況で生活している人たちが多くいることがわかる。私はテレビの画面を見ながら、自分の考えの甘さを痛感し、半ば得意げに父に話したことを反省した。あの時の私は自分のことや自分の身近なことだけに目を向けて、広い範囲で物事を感じることができていなかったのだ。

私は今、皆が町や県に納めた税金の恩恵を受けている。そして私が納めている税金で、誰かを助け、誰かの生活を豊かにしている。私は少し前まで日本人だけ、自分だけ良ければよいと思ってしまっていたが、これらの経験から、税金とは支え合いの制度なのだと実感した。自分の今の生活だけが良ければよいと思ってはいけないのだ。今は助けが必要でなくても、怪我や病気ですぐ助けが必要になるかわからない。それに、今私たちが毎日通る道路や、学校も税金によって造られている。今の生活が当然で意識しないと、ありがたさを感じづらいかもしれないが、税金制度は、皆が安心して安全な生活をし、「幸せ」を実感できる豊かな社会を築くために、必要不可欠なものである。これをこの夏、再認識した。

祖父母と税金

松山市立雄新中学校 3年 小澤 涼乃

私は今まで税金というと、身近なものでは消費税くらいしか意識したことがありませんでした。

両親にどんな税金を払っているのか聞いてみると、お給料から所得税や住民税、他に税金ではないけど、介護保険料を払っていると、教えてもらいました。介護保険と聞いて、私は思いあたることがありました。今年の春頃から、私の祖父の認知症が進み、もともと目がほとんど見えていなかったこともあり、祖母が家で一人で介護するのが難しくなってきました。そこで祖父は、初めは週に一、二度デイサービスへ行くようになりました。それからショートステイというものを利用して、週に二日から三日を施設で過ごすようになりました。祖母に聞いてみると「ばあちゃんも睡眠不足で大変だったけど、ショートステイに行ってくれるようになって、楽になったんよ。しかも、じいちゃんの利用料は一割だけでいいから、本当に助かるんよ。」と言っていました。私はどうして一割だけでいいのかなと思い、調べてみました。すると、介護で利用できるサービスは介護度によって決まっていて、利用者は一割の負担で利用できるらしいのです。介護を利用するのは退職した高齢の人が多いので、これは助かると思いました。では残りの九割はどうなっているのでしょうか。調べてみると、四十歳以上の方が支払う介護保険料でまかなっているということがわかりました。「これが親の言っていた給料から支払っている介護保険料なんだな。」と納得がきました。元気な時には、介護保険料を支払って、介護の必要なお年寄りを支え、将来自分が介護を必要とする時には、若い世代の人達が支払う介護保険料で支えてもらう、とてもいい仕組みだと思いました。でも私は、日本は超高齢社会になりつつあると聞いたことがあり、介護保険料だけでまかなえるのかな、と疑問に思いました。そこで更に調べてみるとやはり、四十歳以上の方が負担する保険料だけでは足りず、サービス事業者を支払われる財源は、税金と保険料が五十パーセントずつでまかなわれているということがわかりました。税金でまかなわれている部分は国だけではなく、都道府県と市町村も分担しているそうです。祖父はその後、ショートステイの日数が増え、今は平日のほとんどを施設で過ごしています。家では入れないお風呂にも入れるので「風呂につかるのはやっぱりええなあ。」と喜んでいます。また、家では手すりやスロープ、介護ベッドやセンサーマット、簡易トイレなどもレンタルしています。それらが全て、介護保険を使って安く利用できるのも、祖母もとても助かっているそうです。

今後日本はますます高齢社会になっていくと思います。私たちが将来仕事をして支払う税金や保険料が今、祖父や祖母を支えてくれているように、どこかで誰かを支えていると思いながら税金を納めていきたいと思っています。

「先生、早退します。」

私は、いつものように学校を早退し、長崎大学病院へ行く。そして、いつものように治療をしてもらい、遅い昼食を食べ、いつものように治療費を支払い、波佐見へ帰る。私はまだ「税金」を知らなかった。

何を書けばいいんだろう。中学校最後の夏休み、私たちに税の作文の課題が出された。私は、書く題材が無い、と放置していた。

またか。夏休みのある日、毎月の通院の日が来た。私は母と車で向かった。治療を終え病院内のレストランで昼食をとり、いつものように治療費の支払いを済ませた。その時、母が領収書を見せながら、私に説明してくれた。驚いた。私が初めて、税金が目の前にあるくらい身近だと思った瞬間だった。私は、助成される金額にただただ驚いていた。

私の驚きは、それだけでは終わらない。その後、母から制度を利用していると聞き、母と一緒に調べてみた。

「育成医療」これは、先天性の障がいの内その障がいを取り除かれる見込みがある場合に、必要な医療費の給付を行うことを目的としている制度だ。この制度を利用することで、無理なく支払うことができる自己負担額で、高度な医療を受けることができる、という制度を私は利用していた。それを知り、驚きがやがて感謝の気持ちに変化し、感慨深く感じた。

税金は、身近なものによく言われるが、税金は隠れ上手だ。私には身近すぎて、当たり前すぎて、見つけることが難しかった。今回私はこの作文を書きながら、考えたことが二つある。

一つ目は、税金を見つけるコツだ。所得税とか法人税とか、私たち子どもには、まだよく分からない税金はもちろんある。しかし、税金から考えるのではなく、それが使われている公共施設、公共サービスから考えれば、もっと身近に、簡単に税金を見つけることができると思う。

二つ目は、母の存在だ。この作文は母がいたから出来たものだ。両親。それは一番身近な納税者だと思う。まずは両親から、税金について教えてもらったり、一緒に調べたりすれば、税金に興味を持つことができ、将来、立派な納税者になれると思う。

「先生、早退します。」

私は、税金で建てられた学校を早退し、これもまた税金で建てられた長崎大学病院へ、自動車税がかかる車で向かう。そして、治療をしてもらい、消費税がかかった昼食を食べ、制度により税金で助成させてもらえる治療費を支払い、税金で建設された道路を走行し、波佐見へ帰る。いつでもどこでも税金はそばにいる。そんな身近で大切なものを絶やさぬよう、私は将来、社会のために働き、立派な納税者になる。

税金がなかったら今の僕は存在しない？

大村市立桜が原中学校 3 年 小鶴 崇徳

僕が生まれた時の話です。今から十五年前、母は熊本市に住んでいました。その時僕は母のお腹の中にいました。妊娠七ヶ月半ばに入った時、母は妊娠の継続が難しい状態になり、熊本から福岡県久留米市の病院へ運ばれました。そこで僕は普通より三ヶ月早く生まれました。僕は超低体重出産児だったのです。肺が未熟で生まれたので、産声を上げて空気を取り込む事ができず、蘇生処置が行われた後四十一日間もの間、人工呼吸器を装着していました。また、貧血が酷く六回の輸血を行い、心臓には穴が開いていてその治療も行われました。生まれてから六ヶ月もの間、僕は入院していました。その間、母はずっと母乳を運び続けたそうです。

僕が生まれた日、母は医者に「早く名前をつけてあげてくださいね、早く出生届を出さないと高額な医療費を請求されるので。」と言われたそうです。僕は、九月二十七日に生まれたのですが、その日から月末までの四日間の医療費が六十万円以上だったそうです。四日間でこの金額なので、その後の六ヶ月間の医療費がどんなに高額だったかが想像できます。それは、子供医療助成と高額療養費という税金の制度によって賄われ、負担したのは数千円だったそうです。子供医療助成というのは、子供の名前を決めて、出生届を出して、両親の戸籍に入り、健康保険に加入する事で助成を受ける事ができるという制度です。その後も乳児期、幼児期と予防接種を受けたり、病気で病院にかかったりした時にこの助成を受けてきました。市町村によって受けられる年齢が違いますが、有難い制度です。高額療養費というのは、月ごとにかかった医療費が、一定以上になった場合に一部を国から支給してもらう制度です。

もし、この助成を受ける事ができなかったら、どうなったでしょうか。両親は借金してでも治療を受けさせた事でしょう。そしたら、今の様な生活は送れていなかったかも知れません。平和な家庭が壊れていた可能性もあります。税金のおかげで今の僕が存在するといっても過言ではありません。

それは、僕だけではありません。例えば、癌などの重い病気や難病を抱えた人たち、脳や五感、四肢などに障害を持って生まれた人たちがいます。もしも医療制度がなかったら、このような人たちが今よりもずっと辛い生活を送ったり、生まれてすぐに死んでしまったりするのかも知れません。今は健康で元気に生活している全ての人々が、いつ病気になるのかわかりません。この社会に生きる全ての人達の為に税金はあるのだと思います。社会生活にはなくてはならないものです。僕も社会人になった時にはこの事を考えて、気持ち良く社会の為に納税したいと思います。

届くと信じて

みやき町立三根中学校3年 寺田 一葉

「地震です、地震です…！！」

けたたましく鳴る緊急地震速報に私は叩き起こされた。一瞬身動きがとれなかったが、慌てて頭から布団を被った。二〇一六年四月一六日午前一時二五分、二日前の余震で既に大きな被害を出していたというのに、追い打ちをかけるように襲った本震。私の家では食器がいくつか割れる程度ですんだけど、テレビに映る被災地、熊本は悲惨な状態だった。

家ごと何もかも失ってしまったら、どうなるのだろう。考えてみても想像がつかない。いや、想像するのが恐かった。でも、自分も大きな揺れを体験し、いところが熊本に住んでいたこともあり、今迄よりもその現実を突きつけられた。過去にテレビの画面を通して見てきた災害は受け入れるのが辛く、遠く離れた映画のように感じながらどこか自分を守っていたかもしれないが、そうはいかなかった。

私が税金の必要性を今迄以上に強く感じたのはそれからだった。もちろん、今迄も税金を必要ないものだと思っていたわけではない。しかし、時折ニュースで目にするのは、政治家が税金を私的利用して、報道陣に問い詰められている様子…。正直、税金を喜んで納める気にはならない。でもこの熊本地震を通して、考え方を変えることができた。

熊本地震から一年と数ヶ月。少しずつ復興は進んでいる。こんな時こそ、税金がなければ生活を戻すのはほぼ不可能だ。災害時には、被災した都道府県が国からの補助として特別交付税を受け取れるという。こういった制度は、被災地の負担を少しでも軽減する上でとても大切だと思う。何かあった時には、やっぱり国全体で助け合うべきだと感じた。

連日報道される被災地の様子、その中で感動した場面がある。地震発生から六時間後、生後八ヶ月の赤ちゃんが救出されたというニュースだった。潰された家に取り残された赤ちゃんは、余震が続киいつ家が崩れてもおかしくない中で、自衛隊の賢明な救出作業によって助け出されたのだ。各所で、自分達の危険を冒しても一つでも多くの命を救いたいという一心で活動する姿に、本当に感動した。

自衛隊や消防は税金で食っている、と快く思わない人も中にはいるようだけど、それはきっと違う。税金は私達国民の＜想い＞なのではないだろうか。いくら私達が困っている人を助けたくても、出来ることには限りがある。だから税金という形で想いを届けて、それを受け取った自衛隊や消防の人達が、いざという時命がけで動いてくれる。災害時に限らず、税金を通して私達は助け合い、生きている。実は、とても素晴らしいことなんだ。

私は今はまだ社会に支えてもらっている立場だけど、義務教育も終われば数年で成人する。税金を納めるのは大変だと思うけど、それまで支えてもらった感謝と、いつか自分の＜想い＞が誰かの助けになることを信じて、きちんと社会に貢献できる大人になりたい。

ノイバイ国際空港—ベトナムの首都ハノイの空の玄関口として、毎年多くの人々を迎え入れるこの空港の第二ターミナルは、二〇一五年、日本のODA、政府開発援助によって完成した。現地の日本人観光ツアーガイドの方は、見送りの際、ツアー客にこう話す。「この空港は両国の親善友好の証なのです。」と。

中学生の私にとって「税」といえば、租や年貢など、重い負担に苦しむ民衆といった歴史の授業での暗いイメージ、大人も子どもも買い物時に溜息の出る消費税で、お世辞にも、いい印象とはいえない物だった。しかし、学習を深めるとその印象は大きく変わってきた。

空梅雨と多くの人が思っていた今年の七月初旬。九州北部には昼夜、雷を伴った大量の雨が降り注いだ。翌朝報道を見て驚いた。大分・福岡両県の一部地域では町が川の氾濫で崩壊、家も近くの住人の方も流され深刻な事態となっていた。それから一か月後、私は家族の用事で偶然、そこを通過することがあった。が、実際に自分の目で見た被災地は、未だ流木が折り重なり、土砂が積もっていて、映像だけでは分からない悲惨な状況が広がっていた。そして同時に「今後どうやって町は復興していくのだろうか？」と疑問が芽生えた。

今から五年前、故郷でも同じ様に大雨で大洪水となり、多くの犠牲を払った。しかし、現在では殆どその被害は直っている。一体なぜだろうと考えたら、税の学習がその答えをくれた。それは、国民一人一人が分担した税で日本という国が成り立っているということだった。ケガをした所を税という処方箋が手当てをしてくれるのだ。納得がいった。「故郷のように、ここも税の力で必ず復活する！」そう思うと税に感謝の気持ちが浮かんできた。

さて、私達は中一の頃から、岩手県大船渡中の人と防災教育の一環で手紙による交流を始めた。学年の先生が福島へ復興ボランティアに行き、大船渡中の先生と顔見知りになったことがそのきっかけだ。手紙には高台に避難した事、ご家族を失った人がいた事、「恋し浜」が壊滅した事、仮設住宅が立ち並んでいた事など、私達の質問に対する震災直後の様子が詳しく綴られていた。昨春の大地震の際には、お見舞いの手紙も届けてくれた。遠くて中々行けない町をインターネットで検索してみた。震災直後の画像と見比べてみても、随分と街並みが復興したことが分かった。これが「復興特別税」に拠る支援だと分かると、益々、次世代の担税者である自分達の使命感が湧いてきた。互いに知らない土地さえ、税で強く結ばれているのだ。ベトナムのガイドさんも「日本のODAで両国の心の距離も縮まっているのです。」最後にそう結んでいた。

故郷の完全復活を告げる来春開設予定の新文化会館「グランツ竹田。」ドイツ語で「光」を意味するその名付け親は学校のクラスメイトだ。その名の通り、税は、町の明るい未来を照らす道標なのだと今は思う。

豊かな暮らしを支える税

志布志市立有明中学校 1 年 川畑 太一郎

夏休み、広々とした田んぼで稲刈りをする様子を横目に、離れた野球練習場に向かう。いつも使っている学校のグラウンドは全面補修工事中で使えないからだ。

炎天のグラウンドではいつも十人くらいの人たちが工事をしている。ブルドーザーやローラー、名前の知らない多くの重機が校庭を行き交い、トラックが何台も土を運び込む。ちょっと雨が降ると野球のグラウンドはすぐにベースのある内野四カ所は魚が泳ぐほどの水たまりになる。ゴロを処理しようとする水がはねて目を直撃するし、滑り込もうものなら泥だらけだ。ファウルゾーンは草だらけで、打ち込まれたボール探しをするのは、一年生の仕事だ。これが、水はけの良い土に、草むらはフェンスになる。だから早く中学校のグラウンドで練習したい。これらにかかる工費は一千万円を超えるそう。これはすべて税金でまかなわれている。

ありがたいことだと思いながらペダルを踏んでいて、気がついた。七十年前は、目の前の稲刈りの光景はなかったのだ。僕の住む土地は近くを流れる菱田川より四十～五十メートルも高いところにあるシラス台地だ。だからかつては稲作ができず、サツマイモやそば、粟などしかつくることができなかった。それを豊かな土地に変えたのは、人生を賭け、台地を切り開いた野井倉甚兵衛の働きがあったからだ。十七歳の甚兵衛は、十三キロ上流から水を引いて荒れ地を広い田に作り替えようと決意を示す。しかし、難工事と労力、資金不足から、工事開始から八年経ったが、三ヘクタールの水田ができただけだった。そこで、彼は国や県に粘り強く働きかける。一時戦争で工事は中止されるが、その後、「国営開拓事業」として農林省によって工事が引き継がれる。昭和二十八年、三十四のトンネルができ、五百二十ヘクタールの水田ができた。野井倉開田にかかった費用は当時で約四億六千万円、現在のお金に換算すると二十二億円にもなるという。これもすべて税金である。

学校のグラウンド整備にしろ、開田事業にしろ、多額の資金を必要とする事業は、個人や少人数の集まりだけではとうていできない。僕たちの一人あたりの教育費も年間百万円を超えるという。そのため、みんなで税金を納め、負担を分担している。税金は、豊かな暮らしを送るためになくてはならないものだ。もし、税金がなかったら、学校も救急車も警察も有料になる。ゴミも放置されたままになるかもしれない。

稲刈りとグラウンド工事を見ながら、税金のありがたさに感謝した。将来僕も働き出したら、いろいろな税が増えるだろうが、しっかり納めたい。すべての人のために、少しでも力になりたいからだ。グラウンド整備が終わったら、納税してくださる方々に感謝する気持ちをもって練習したい。

温かい眼差しに見守られて

那覇市立那覇中学校 3年 喜納 徳子

私が初めて税金という言葉を意識したのは小学校一年生の時です。体育館での入学式を終え、一年二組の教室に入ると自分の名前が書いてある机に袋が置いてありました。そしてその中には憧れの教科書が入っていました。私は三人兄妹の末っ子で、兄達が毎朝ランドセルに教科書を入れて学校へ行くのを羨ましく思っていたのです。私もやっとお兄ちゃん達と同じ小学生になったととても嬉しかったことを覚えています。家に帰って早速、母と一緒に憧れの教科書をそっと開いてみました。かわいい絵が沢山で、平仮名や片仮名、計算、植物の事、学校生活の事、自分が急に大きく賢くなったような気がしました。私は母に、「学校っていいね。本がただで貰えるんだね。」と言いました。すると母は教科書の裏表紙に書かれた文を見せてくれました。そこには私が読めるようにふり仮名つきで、「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、国民の税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」と書かれてありました。母は皆が少しずつ納めた税金によって私達は安心して学校に通えるのだと説明してくれました。母は「だからこれはただではないよ。未来の日本を背負う子ども達への投資だよ。子ども達はきっと日本の未来を良くしてくれるだろうと信じて皆で支えているんだよ。しっかり勉強して立派な大人になって今度は支える側になれるように頑張ってね。」と言いました。その時私は、私の将来を楽しみにしている沢山の人が私を見守ってくれているようで心が温かくなりました。そして、教科書を大切にしよう、しっかり勉強しようと思いました。

それ以来、四月になり新しい教科書が配られる度に、私は胸いっぱい真新しい教科書のインクの匂いを吸い込みます。新しい教科書に名前を書くのは少し緊張するけれど、また一つ学年が上がった誇らしさを感じながら一つ一つ丁寧に名前を書いていきます。そして裏表紙の「この教科書は～」の文字を確認します。小学校の高学年の頃からふり仮名はついていませんが、この文はいつも変わらずここにあります。これを見ると私は今でも自分が沢山の温かい眼差しに見守られているのだという安心感を覚えます。

今年の四月、私は中学三年生になり義務教育最後の年になりました。もうすぐ「この教科書は～」の文ともお別れです。学校の授業でも税について学び、教科書だけではなく多くの公共サービスが税によって支えられていることも知っています。

税金は一方的に払うものではありません。一人一人が互いを支え合うものだとして理解し、自分も社会を支える一員だという自覚をもつことが大切だと思います。私は温かい眼差しに見守られていた気持ちを忘れず、これからもしっかりと勉強して、社会を支え合う一員になりたいです。

社会保障

札幌市立陵陽中学校 1 年 山田 準平

僕の兄は脳に障害をもって産まれてきました。そして僕が小学 2 年生の時自分で呼吸も出来なくなり完全にねたきりになってしまいました。人工呼吸器を付けて 4 年間入院をし、今は家で一緒に暮らしています。入院中は気がつかなかったけど、重い障害を持った兄と暮らす、という事は想像もつかない位、大変な事だと思いました。例えば、24 時間、人工呼吸器をつけてねたきりの兄を、ねがえりをさせたり、痰の吸引をしたりして、僕達家族の生活が一変して、自由もなくなります。夜だって、目がはなせないのでゆっくりねむれなくなります。僕はそんな生活は絶対に無理だと思いました。だから兄の事は大好きだけど一緒に暮らすことは無理だと思いました。でも今、また一緒に暮らす事が出来るようになったのは、社会保障制度という制度のおかげです。この制度で、ヘルパーさんが来てくれる様になりました。在宅用の人工呼吸器や訪問看護、訪問診療も受け、兄が安心して家で暮らせる様になりました。また、車イスや介護用ベッドで、様々な医療用品も用意する事が出来、僕達家族がほとんど普通に生活が出来る様になりました。それからの費用は全て国の税金のおかげだと知りました。僕達を支えてくれる人達の費用も税金でまかなわれている。そのおかげで兄はねたきりであっても人間らしい生活が出来ている。国の支出の中で最も多いのが社会保障費であると、今回、税の作文を書くのに調べていて知りました。医療、年金、福祉、介護、生活保護、とどれでも誰もが人間らしく生きていける為に必要なものである。そのために税金が一番多く使われているという事を知りました。国民が一人一人、支え合っているという事に対し、それが少子高齢化で、バランスが崩れてしまうという問題を、これからどう考えていかなければならないのか。とても大きな問題を抱えている。中学生の僕が大人になったら、どんな風になるのか、考えるのも怖いです。だけど、これは本当に深刻な問題だと思いました。

僕はいつか年を取って支えられる人間になるまでは、沢山働いて、出来るだけ長く、支える人間でいたいと思いました。そして僕が納めた税金が兄の様な人の為に使われる事を願います。

私たちの生活と税

秋田市立桜中学校 3 年 工藤 舞子

私は今、中学校三年生です。卒業後のこと、将来のことを考える機会も増えました。私の将来の夢、それは、学校の先生になることです。公立の学校の先生は県からの税金で給料になっています。また、私たちが当たり前のように使っている教科書や机、いす、そして校舎などほとんどのものが、市の税金や国の税金でまかなわれています。そのことを知り、税金について調べてみました。

調べてみたところ、私たちの生活のあらゆる場面で税金が使われていることが分かりました。警察や消防、ごみの処理、上下水道などなくてはならないもののばかりです。

もし、これらすべてを民間の事業として行う場合、格差も生じ、平和で安全安心な社会を継続することは困難になってきます。

ごみ処理が民間の有料サービスとなれば、お金を払えない人、また、お金があっても払いたくない人は、ごみを捨てられず町中にごみがあふれてしまいます。今でもよく話題になるごみ屋敷がもっと増えてしまうことでしょう。

警察の仕事が民間の仕事となれば、公平な取り締まりができないことが考えられます。事故がおきた時にも、救助ができなくなってしまいます。私たちが安心して暮らせる世の中は、今の警察が公共の仕事だからなのだと思います。

消防の仕事も同じです。火事になった時、お金がある人だけが火を消してもらえて、お金を払えない人が消してもらえなかったら、大変なことになってしまいます。

私の将来の夢である学校の先生の仕事も大切な税金の使い道の一つだと思います。公立の小中学校で、全ての子どもが当然のように学校に通い、同じ教育を受けられることは、本当に素晴らしいことだと思います。世界の中には、学校に通うことすらできない子どもたちもいるのです。

このように、税金とは遠いイメージをもたれがちですが、私たちの生活そのものを支えるものであり、なくてはならない存在なのです。現在の日本は、少子高齢化が進み、私たち若い世代の負担が大きくなることも知りました。一人一人がしっかりと納税の義務をはたしていくことは、とても大切なことです。それと同時に税金が何に使われているのか、正しく使われているか、ということにも関心をもっていかなければならないと思います。税金が正しく納められ正しく使われることが私たちの生活を支えるもととなっているのです。

今回調べた内容は、誰もが向き合って考えなければならないことだと思います。もし私が将来学校の先生になって給料をもらうときがきたら、税金なんだと感謝する心を忘れずに生活していきたいです。そして、国民として、しっかり税金を負担していくことの大切さを子供たちにも伝えていきたいです。

「アニメをつくる仕事がしたい。」
父に将来の夢を話しました。すると、
「今のだらしない生活をしているお前では無理だろう。やりたいことをやっていい自由はある。好きなことを考える権利もある。けれど、やるべきことをやっていないければ、人から認められるものはつukれない。」
と言われたのです。私は、ハッとしました。自分のダメさに気づかされました。自分で自分自身の将来を危ういものにしていたのです。その時から、夢の実現のために、やるべきことをやろうと心がけるようになりました。

授業で税金のことを学んだ時に、父のこの言葉を思い出しました。日本の社会には、やりたいことをやっていい自由があります。人々には、好きなことを考える権利もあります。けれど、「税金を納入する。」というやるべきことを国民がやらなければ、社会は成り立たなくなるでしょう。自分たちで将来の社会生活を危ういものにしてしまうのです。

では、あなたは、将来の社会生活がどのようなになってほしいと思いますか。そのために税金をどう使えばいいと思いますか。もし、そう聞かれたら、私はまず、「社会が平和であってほしい」と思います。そして、「平和のために税金を使ってほしい」と答えます。外国から弾道ミサイルが日本列島をとびこしていくなどという信じられないようなことが突然現実となりました。一過性のものなのか私にはまだわかりませんが、日本は平和だという認識が少しずつ崩れていくような不安があります。このような情勢の中、今年だけでなく、来年の防衛費も過去最高になると聞きました。しかし、防衛という名のもとで戦争をしていくのではなく、平和への道を歩むために、対策が練られ、税金が使われていくことを願います。

そして、もう一つ。「子どもが自由に将来を選ぶことができる社会であってほしい。」と思います。今、私の手元に一枚の写真があります。部屋の中に八つのベッドが病院のように並んでいます。ベッドにはそれぞれ赤いランドセルがかけてあります。私は、どこか外国の病室の写真だと思いました。しかし、それは、県内の児童養護施設の写真だったのです。個人のプライバシーを守るものは一枚のカーテンです。こういった施設で暮らしている子どもたちには、父が言ってくれたようなやりたいことをやっていい自由があるのでしょうか。税金が、このような環境で暮らす子どもたちに「自由に将来を選ぶ」可能性を保障してくれているといいなと思います。

平和で、子どもが自由に将来を選ぶことができる社会の実現のために、「納税」というやるべきことをやろう、そう多くの方々に思っています。私も、この思いを未来に繋いでいくために、夢を実現させ、しっかりとした納税者になりたいと思います。

人は何か大きな出来事を体験して、初めて大切なものの存在に気付くのではないだろうか。毎日の生活の中であたりまえに感じていたこと、そして、なくては成り立たないものの存在に僕は初めて気付くことになった。

僕は救急車で運ばれた。学校でアレルギー反応が出たからだ。自分がアレルギー体質であるという自覚はなかったが、症状が出た。今までにない不調から体全体が重く、苦しく感じた。その時、とっさの判断で先生方が救急車を要請してくださった。車中、そして病院ではたくさんの方々が治療にあたってくださり、僕はすぐに回復することができた。

「元気になって本当によかった。たくさんの方々に感謝しなくちゃね。」心配そうな顔をした両親が病院に来て言った言葉の意味を僕は考えた。

人はいつどこで体調が悪くなったり、けがをしたりするか分からない。自然災害や事故をニュースで見ない日はないくらい日常的に起こっている。僕もそうだった。不安や心配事は身のまわりにいつも存在しているのだ。しかし、僕たちは毎日普通の生活をしていくことができる。それはなぜだったのか。どんな時でも駆けつけて救助ができるという態勢が整っているからではないだろうか。誰もが安心して暮らせる社会が築かれているからではないだろうか。

僕は自分自身が経験するまでは特に意識することはなかった。しかし、今はこの社会の仕組みの存在に気付き、たくさんの人々に感謝の気持ちをもつことができた。救急、消防、警察をはじめ、この安心安全な社会の仕組みを支えているのは税金だ。そしてその税金を納めているのは一生懸命働いている方々だ。僕はたくさんの方々に支えられていることがよく分かった。

誰かの納めた税金が他の誰かを助ける。それが何度も何度も繰り返され、安心安全な社会を築く。この社会は税金を通した支え合いにより成り立っているのだ。

僕は中学三年生で、今年で義務教育が終わる。教育も税金によってまかなわれている。たくさんの事を教えていただいた授業、教科書、校舎、机、すべての環境。これまで僕はたくさんの方々に支えられてきた。義務教育の九年間、一人の人間を育てるために一体何人の方の汗水流した努力の結晶である税金が充てられてきたのだろう。

中学三年生である今の僕にできることは、税金によって成り立つ安心安全な社会に感謝し、与えていただいた学習できるチャンスを生かして一生懸命努力することだと思う。そして、いつかこの支え合いの輪の一員となり、社会の役に立てる人間になりたいと思った。これまでたくさんの方々が築き上げてきた助け合いの輪に気付けたことで僕の意識は変わった。次の世代もまた次の世代もこの制度を守り、受け継いでいきたいと心から思った。

今度は僕たちだ

宇都宮市立陽南中学校 3 年 曾根 健司

今年の三月、テレビのニュースで埼玉県の新酒鑑評会の話題を放送していた。それは、関東信越国税局の人が審査員となり、新酒のできばえを評価しているというものだった。僕は、なぜ酒の発表会に税務署の人が参加するんだろうと不思議に思った。母に理由を聞いてみると、

「お酒の価格には、税金が含まれているからじゃないのかな。今は廃止されたけど、昔は砂糖にも税金がかかっていたんだよ。」

と教えてくれた。僕は消費税以外にもさまざまな税金があるんだと驚いた。もう少し税金について詳しく知りたいと思い、和光市にある租税史料室へ行ってみた。

租税史料室は、稲作が始まった時代からの日本の税の歴史を紹介しており、特に江戸時代以降の税に関する資料がたくさん展示されていた。その中で、酒税は江戸時代からあったことや、明治時代には地租に次いで大きな役割を担っている税だったということを知った。酒税に限らず、税はいつの時代も人々の豊かな暮らしを支えるために重要なものなんだということを改めて理解することができた。また、今は消費税もある。消費税は国民全体で幅広く税を集めることができるので、私たちの暮らしを安定させるのにふさわしいということが分かった。僕が納めた消費税もどこかの誰かの役に立っている。人の役に立ててうれしいと思った。

税金については、これから税率 10% への引き上げが決まっている。これに対し、ほとんどの国民が複雑な気持ちだと思う。少子高齢社会を迎え、税金の役割がさらに重要になっている。そのことは頭では分かっているが負担が増えるから不安なのだ。だから、上昇した 2% を社会保障などに上手に使ってもらいたいと思う。年金や介護にかかる費用や待機児童を減らすための子育て支援に有効に使えば国民も気持ちよく税金を納めることができるだろう。僕の祖母は埼玉で一人暮らししているが、足腰が弱ってきて、今度、介護保険やデイサービスを利用することになるかもしれないと父から聞いた。僕の家のように遠距離介護をしている家庭も多いだろう。少子高齢社会の今、介護が必要になったとき、家庭だけではなく、社会全体で介護を支える仕組みを整えておくことが必要だと思う。それを支えるのは国民が納める税金である。笑顔で安心して暮らせる社会のために、少しずつみんなで負担をする必要がある。

僕は来年、義務教育を終える。教育も環境も、今まで僕は大人の方々が納めてくれた税金に支えられて生きてきた。今度は僕が高齢者や小さな子供たちを支える番が近づいてきた。大人になったらしっかり税金を納めるだけでなく、一緒に働く仲間にも税金を納める重要性を話していきたいと思う。

納税者としての誇り

群馬大学教育学部附属中学校 3年 鈴木 快風

「税金」「納税」「義務」この言葉に、何となくマイナスイメージを持ってしまう人も多いのではないのでしょうか。

それは多分、自分が受けている税の恩恵を知るよりも先に、歴史的な身分制度や、租庸調、厳しい年貢の取り立て、一揆や打ちこわしなどについて学んでしまうために、「税金＝苦しいもの」というイメージが強くなってしまったものだと思います。

中学三年生となった今、私にも納税の必要性は理解できるようになりました。空調設備の整った校舎、無償の教科書、教えて下さる先生。幼いころ通った児童館や、公園、図書館。通学路のガードレールや点字ブロック。横断歩道で歩行者を気遣ってくださる警察官の方。そのすべてが、国民の納める税金があるからこそ受けられる恩恵です。

しかし、あまりに当たり前過ぎる日常で、税金の使い道として意識は希薄です。大人も同じなのではないのでしょうか。

私は小学二年生から、バスケットボールをやっています。放課後や週末は、ほぼ学校の体育館で過ごしてきました。大きな体育館を自主練習のために借りたこともあります。無料又は、ほんのわずかな使用料で思い切り練習することができます。心から感謝です。

また、プレー中の捻挫や肉離れ、骨折の治療も当然のように無料で受けることができました。幼いころ患った喘息も、今は完治と言ってもよいくらいになりました。中学生まで無料で医療サービスを受けられる制度に、母は、とても感謝しているそうです。

私たちは、自分にとって、今必要としていることが税金でまかなわれていると知ったときに、初めて税金のありがたさや、納税の必要性を身に染みて感じるのだと思います。

先日、元気だった祖母が突然倒れ、入院してしまいました。残された祖父の食事の世話や掃除・洗濯・薬の管理など、父と母と叔母が交代でやっていましたが、仕事を抱えながら祖父の家に通うことは、なかなか大変そうでした。そんな家族を助けてくれたのは、介護保険を利用したサービスでした。週に二日間、デイサービスに通い始めた祖父でしたが、みんなの心配をよそに、新しい友だちとの交流や、大好きなカラオケを歌える時間を心待ちにするようになりました。デイでの出来事を話す祖父はとても楽しそうでした。

納税は国民の義務です。それは、搾取されるものではなく、公的なサービスを受けるための会費とも言えます。日本という豊かな国に生きる我々は、気付かぬうちに、その恩恵にあずかり、そのサービスを利用しているのです。納めた税金が、今すぐ自分に返ることはなくても、巡り巡ってこの国に住む誰かの幸せのために使われ、日本全体を豊かな国へと推し進めてくれると信じ、誇りをもって納税する大人になりたいです。

これは私が家で写真を整理していた時のことです。私と母は私が小さい頃の写真を見て私が生まれた時の話になりました。

「私、とっても小さかったんだね。」

「そうだね。生まれるまで本当に大変でね、いろいろな困難もあったんだよ、でもあきらめないで頑張ったから、こんなにかわいい子が生まれたんだよ。」

私の母は特別な体質で、お腹の中で赤ちゃんが育たず、何度も流産をしてしまったそうです。それでも赤ちゃんが欲しかった両親はかかりつけの病院で、ある国立の大学病院を紹介されました。この紹介された大学病院ではまだ研究途中である、新しい治療法があったそうです。大学病院での研究には研究費用として税金からの支援があるそうです。つまり税金によって研究された治療法だと言うことができると思います。母はその治療を受け、治療が成功しその結果私は生まれてくることができました。治療の研究に税金が投じられ、研究されなければ生まれることのできなかった命であると言っても過言ではありません。本当にありがたいことです。

このような医療の研究は多くされていて、そこには税金が投じられています。そして生まれてくることのできなかった命が生まれてきたり、救うことのできなかった命を救うことができるようになりました。つまり私たちが支払っている税金が私たちに幸せをもたらしてくれています。このような研究は医療に限らず科学のいろいろな分野でも行われていて、日々進歩をとげています。

ところが一方で、このような研究費用に投じる税金を削減しようとする動きが過去にあったそうです。事業支分により、スーパーコンピューターの研究に使われる費用としての税金を見直そうと国で話し合われたそうです。限られた財源の中から様々な費用を捻出するのは難しいのでしょうか。私は、日々の生活を良い方向へ変えてくれる研究はもっと進めるべきだと思うし、研究にかかる費用を減らさないで、さらに発展させてほしいと思います。研究費用への税金からの十分な支えがあることで大きな研究ができると思うからです。

最近では S T A P 細胞ができたとかできなかったとかということが話題になりましたが、そのような夢の研究がさらに進むことで人類のあこがれ「不老不死」の薬が本当にできるかもしれないし、様々な医療に活用され役立っていくだろうと思います。

税金を上手く活用していくことで、私たちの暮らしの未来を明るく輝かせ、笑顔のあふれる社会がつくられていくと思います。

写真の中の小さかった私は、中学二年生になりました。生み、育ててくれた両親と、様々な場面で支えになってくれた税金に感謝の気持ちでいっぱいです。

夢に向かって

加須市立加須平成中学校 2 年 泉田 奈々

中学に入学して半年程たった頃、私に新たな夢が生まれた。それは、社会科の教師になること。思い込んだら一直線の私は、住まいの近くにある史跡や博物館などを巡るようになった。まずは自分の身近な歴史に詳しくならないと。休日に運転手をしてくれているのは母。私の夢の良き理解者だ。

ある日、車を運転していた母が言った言葉にハッとした。

「中学校の先生は公務員だね。公務員のお給料って税金なんだよ。お母さんが納めた税金も奈々のお給料になる時がくるのかな。」

それってかなり重要な問題。

「私が将来、公務員になって税金をいただく立場になったら…。」

なんてことは、一度も考えたことがなかった。これは大変な責任だと感じた。国民一人一人から納められた税金で私は生活していくことになる。改めて、教師になるという夢を認識した。

私は今、何不自由なく学ぶことができ、病気になった時は無料で治療が受けられる。いざという時には、警察や消防がかけつけてくれる。また、道路や橋などを安心して通ることができる。これらは全て税金のおかげ。そう、私たちは税の恩恵を一身に受けて暮らしている、とても幸せな世代なのだ。このことを当たり前だと思ってはいけない。

そして私の将来の仕事場は、税金で成り立つ学校という公共施設。勉強を教えるただの教師ではいけない。恵まれた環境で学べるということへのありがたさやその仕組み、納税の重要性和義務。私は将来受け持つ生徒たちに、しっかりと教えてあげることができるのだろうか。これは気を引きしめて今を学んでいかないと。私たちが税金に対してきちんとした正しい知識を持っていなければ、次の世代に税金により関心を持ってもらうことはできないはずだ。

今の生活は、将来の日本を担う私たちへの期待と希望がこめられた投資だ。私たちが社会に出るころには、今とはまた違った社会情勢になっているのだろう。問題になっている高齢化社会のもますます加速がかかり、税制も変化せざるをえないはずだ。厳しい現実がまっている。しかし、今、しっかりと学び、考え、覚悟を持って将来の日本を担う一人として生きていきたい。そして納税が私たちの暮らしを支えているということを忘れずに、日々努力していこうと思う。私自身の、教師になるという夢に向かって。

いつの間にか支えられていた税

糸魚川市立糸魚川中学校 3 年 両川 彩葉

今年の八月、私は市の派遣事業に参加した。派遣先は香港。四泊五日という長旅なゆえ、そこにかかる費用は莫大な額だった。私の家は小さいころから貧乏でとても裕福とはいえなかった。中学生になり、改めてそう思ったことで、私はこの事業に参加したいと母に伝えることができなかった。明細を見ると、この事業に掛かる費用は全部で十七万七千六百十円。とてもじゃないが、こんな額は払えない。しかしある時、よく詳細を読んでみると、参加者負担金が四万二千二百円になっていた。およそ十三万六千円が市の補助によってまかなわれていたのだ。私は母にこの事を相談し、最終的には承諾を得ることができた。正直驚いた。それまであまり税に関心がなかったので考えもしなかったが、私たちは税金によってたくさん支えられていたのだ。私たち中学生が払っている税金は消費税ぐらいだが、そのお金がこんな風に色んな人を支えていると思うと、とても嬉しくなった。その後私は派遣事業に参加できることが決まった。

しかし、まだ問題があった。市が直接費用を負担してくれるわけではないもの。それは旅行に持っていく荷物だ。服やキャリーバッグ、薬から洗面用具まで。女の子だからこそ尚更、そろえなくてはいけないものがたくさんあった。全て計算してみると、およそ4万円は下らなかつただろう。更にお土産代、要するにお小遣いとして私は母から1万円をもらった。旅行費の負担金も考えると実質負担金はおよそ九万円。やはり莫大な金額になってしまった。しかしここでも、税金に助けられることになる。私には一人の妹がいる。小学二年生だ。妹と私には4ヶ月に一度、児童手当というものが支払われる。二、四、六月に第一子、第二子にはそれぞれ4万円、計八万円が下りるのだ。高校生になるまでの子供が対象なのだがこの八万円が丁度六月に支払われたばかりだった。妹の分も使ってしまうことになってしまったが、このおかげで実質負担金は一万円にまで下がった。この一連の出来事で私は、税金というものがいかに身近なもので、知らない間にどれだけ支えられているかを知ることができた。今日、私が払ったたった八%の消費税はどこかで誰かの役に立つのだろうか。そう考えると、単純に嬉しかった。無事こうして帰国できたことも、今すれ違ったあの人のおかげかもしれない。そういう風に税金やお金の大切さをかみしめて毎日を過ごしたいと、今の私はつくづくそう思っている。あなたの税金で私は支えられた。私の税金であなたを支えることができた。そこに子供も大人も、男も女も関係ない。

「たくさんたくさん、ありがとう。」

「たくさんたくさん、どういたしまして。」

税金はそういう思いのリレーだと私は思う。

税から受けた恩恵

松本市立松島中学校 3 年 小川 清香

数年前、消費税が八％に増税された。そして、数年後には十％に引き上げられるという話も出ている。私は初めてこの話を耳にしたとき、「何か買うとき、値段が高くなってしまう。嫌だなあ。」と感じ、消費税増税をあまり快く思わなかった。しかし、自分の身が税金によって支えられていることを知って、税金のことに興味を持った。

私は先天性心臓疾患・ファロー四徴症の症状を持っている。一歳の時に手術を受けた。その時に自立支援医療（育成医療）というものを利用した。これは、今ある疾患を放置すると将来障害が残ると認められる子が、手術等の確実な効果が期待できる治療を行う場合に、公費でその治療費の一部を負担する制度である。この制度によって、手術の際の自己負担額は医療費の一割となった。また、現在は小児慢性特定疾患治療研究事業というものによって、医療費の一部を公費で負担してもらっている。さらに、心臓カテーテル検査の時の入院費も、自己負担は毎月払う定額だけで済んだ。

私はこのことを知ってとても驚いた。自分のこんなに身近なところで税金が使われているなんて初めて知ったし、私自身、そして家族も税金によって助けられていたなんて思ってもみなかった。税金は、本当に身近で私たちの生活を支えてくれているのだということを実感した。

このような制度は社会保障に含まれている。社会保障は現在の日本の支出トップである。日本では少子高齢化が進んでいて、今後さらに社会保障の重要度が増していくと考えられる。だがその費用を負担する働き手、つまり若者は減少傾向にある。

こういう現状を考えてみると、消費税増税は避けることができないかもしれないと考えるようになった。今、私のような境遇におかれている人はたくさんいるし、これから高齢者も増えていくと考えられる。だからこそ、皆で協力し合っていくべきだ。一人一人の小さな積み重ねが大きな成果を呼ぶ。

消費税増税に対して、以前の私のように嫌な印象を持っている人は多いと思う。多分それは、税金がどのように使われているか、どのように私たちの生活に影響しているかを知らないからだと思う。税金がどのように私たちの生活を助けてくれているかがわかれば、「税金を払いたくない」なんて思うことはできないはずだ。

今の日本には助け合うことが求められている。私たちが使っている教科書も税金によって無償で支給されている。税金によって私たちの生活がよりよくなっていることを忘れてはならない。私はたくさんの人の助けによって今、ここに生きている。そのことを心に留めて、生きていることに感謝しながら、一人でも多くの人に恩返しをすることができるよう、頑張っていきたい。

私は、中学生になった時からお小遣い制になった。それまでは、ほしいものがあればその都度母に言って買ってもらっていた。自分で限られたお金を管理するようになってからは、消費税は厄介な存在になった。8%でも大きいのに、それが近い将来10%にまでなるといふ。私が大人になって働くようになれば、所得税や住民税もかかってくる。税金は、もっと安くできないのだろうか。

そんな私の考えが一変したのは、去年の秋だ。大好きな大阪の祖父が、せきずい梗塞になり下半身不随となってしまった。祖母は突然のことに混乱し、莫大な入院費がかかるのではないかと不安がっていた。だが、ふたを開けてみると、高齢であり、かつ障害者手帳を取得した祖父は、国から多くの補償を受けることができた。入院費だけではない。お見舞いに行く祖母の交通費も安くなり、NHKの放送受信料も免除になった。そのほか数々の補償は、私たちが支払っている税金で賄われていることを知った。今年の正月、私は祖父に会いに行き、リハビリの様子を見学することができた。そこでは、足の感覚のない祖父でも、ロボットスーツハルという機械を使って立つことができていた。このロボットスーツの研究開発費用にも税金が使われているという。税金は、足が不自由になってしまった祖父に最先端のリハビリを受けさせることを可能にし、今後の生活の不安を払しょくすることで祖母を安心させた。税金は、どんな人でもできる限り支障なく暮らせるように、さらに住みよい社会となるように、さまざまところで使われているのだ。

これから先、高齢者の人口が増えることによって、ますます多額の税金が必要となるだろう。消費税増税は、何度か先送りされているが、それを手放して喜ぶだけではいけないと思った。増税の先送りには、もちろん相応の理由が伴っているのだろうが、負担を未来に押し付けてはいけない。アメリカの先住民インディアンは、自分達の行いのために子孫に負債を背負わせてはならないと、七世代先の子孫のことまで考えて自然とともに暮らしていたという。私は、初めてインディアンの思想に触れた時、素晴らしい民族だと感動した。今の日本は、多額の負債を抱え借金大国となっている。これから少子高齢化社会を迎えるにあたって、消費税やその他の税金が上がっていくのは避けられないだろう。増税はもちろんいやだ。だが、私の両親をはじめ、祖父母が私をかわいがってくれているように、私もきっと自分の子供や孫をかわいがり、彼らが幸せに暮らせることを望むだろう。税金が高いのは喜ばしいことではないが、今の自分たちの都合だけを考えるのではなく、これから先の子孫が住みやすい社会になっていることを念頭に、インディアンの思想で皆が税金を考えていければと思った。

「税金＝安心な暮らし」

南房総市立富山中学校 3 年 太田 優羽

税について、今まで私はそれほど深く考えた事はなかった。税金なんて大人の世界の事で、まだ働いてもない学生の自分にはあまり関係のない事のように思っていたからだ。

ところが、税金には私たちが安心して暮らしていくために欠かせない重要で大事な役割があると知り、今まで無関心だった自分が恥ずかしく思えた。

例えば私たちが当たり前のように通っている学校。日本国憲法の国民の三大義務の一つである「教育の義務」によって、中学生までは平等に義務教育を受けることが出来る。教科書や机、椅子などの備品はもちろん、体育館や学校内に必要なあらゆる備品等は“教育費”として税金が使われている。一人当たりの年間教育費におよそ百万円以上も税金が使われている事に驚いた。もしも税金がなければ親の負担が大き過ぎて学校へ通えない子供たちで溢れてしまう。私たちの学校は数年前から大掛かりな工事により、幼保小中一貫校として新しい校舎に生まれ変わった。そこにも多くの税金が関わっている。

私は中学生になってから成長痛に悩まされ、一年生の頃から長期に渡って足の治療に通う事が多かった。つい最近も足の怪我で病院へ通った。今までは怪我をしたり具合が悪くなったら病院へ行くのは当然と思っていた。でも、そこにも税金は使われていた。税金がなければ医療費が全て自己負担になってしまうのだ。そうすると、簡単には病院へ行けない。病院へ行くための交通手段である親の車も、自動車税を払っているから車に乗れるし、交通機関にも信号や道路、あらゆる所に税金が使われている。安全に通れるために道路を舗装したり、工事をする。震災で崩壊してしまったさまざまな場所も、復興のために多くの税金が使われている。私たちの身の回りを改めて見回してみると、本当に色々な場所で税金が役立てられているのだと気づいた。

今までは、買い物をする時も、消費税が面倒くさいと思っていた。百円ショップだって百円なのに八%の消費税がかかり、百八円になってしまう。でも、そんな消費税も私たちが安心して生活をするために必要な税金の一部であると思うと、自分も納税者の一人だと自覚するようになった。三大義務の一つ「納税の義務」の意味がよく分かった。

自分が大人になったら働いて、所得税を払う時が来る。「勤労の義務」だ。今よりもっと多くの税金を納める事になるけれど、そのお金は自分の手元から無くなるのではなく、たくさんの人々の役に立ち、何より自分自身の生活にも役立つ大切なお金になる。

少子高齢化が進めば一人一人の納税の負担も大きくなっていくだろう。消費税も八%から十%になる日も近い。でも、それよりも税金が無くなる事を考えるとその方が恐ろしいと思った。税金は安心な暮らしそのものだ。

税による助け合い

江戸川区立西葛西中学校 3年 春山 梨沙

先日、祖母を亡くした。七五歳だった。私は、いつも優しく穏やかな祖母が大好きだった。そんな祖母の死は、人の死はこんなにも悲しいのだと思い知らされるものだった。

それから月日が経ったある日、母との会話で、「後期高齢者医療制度」という制度を、そして私の祖母もこの制度のお世話になっていたことを知った。母によると、七五歳以上になると、医療費が安くなるのよ、とのことだった。

祖母がお世話になったこの制度に興味を抱いた私は、少し調べてみた。すると、この制度は、七五歳以上の方の医療費が、本人の自己負担のほか、若い世代の方々の社会保険料や、公費によって負担されるという制度だということが分かった。患者本人の自己負担額は一割（場合によっては三割のこともある）で済むとのことだ。この公費というのは、国や公共団体の費用のことで、税金で構成されているという。公費で五割を負担しているため、七五歳以上の方の医療費の半分は税金で賄われているということになるのだ。

では、もしこの制度がなかったらどうなるだろうか。

貯えがない方や子どものいない方などは、病院に行くお金なんてないという人もいるだろう。そうすると、体調が悪くても病院に行かない、行きたくても行けない、という状況が生まれてしまう。

もし自分がそのような立場に置かれたらと思うと、この制度はとても大切な制度であることが想像できる。

ほかにも、実に様々なことが税金によって保障されている。国民の生活は税金があつてこそ、保障されているものではないだろうか。

しかし、消費税増税など、税金を納めることに対して否定的な考えが多いのが、日本の現状だ。

確かに、せつかく自分が働いて得たお金を国に納めるというのはちょっと…と思う気持ちも分かるが、税金を納めることに対して否定的な人々も、今直接的な見返りが感じられなくても、自らの納めた税金がほかの誰かを助け、自らもどこかで助けられているのだという実感を得られれば、そのような考えも薄まるのではないだろうか。実際、私は今回の作文を書くにあたって、税金について学んだことで、納税に対してのマイナスなイメージがなくなった。

なんとなく義務だからではなく、せつかなら、納得した上で納税したいものだ。

税金を使う道は多種多様だが、それらはどれも、私たち国民の生活を保障するためのものである。中学生である今の私は、消費税を納めることしかできないが、大人になったら、一人の国民として税金に感謝し、きちんと納税の義務を果たしていこうと思う。

税金の行方

小平市立上水中学校 3 年 荒川 航希

租税教室が行われるまで僕は、税についてそれほど考えることはなかったが、租税教室を通して税について考えるようになった。

先日、僕は税理士の方々を招き、税について学びました。その中で最も驚いた点がありました。それは税金との関わりです。中学生の僕は色々な場面で税金と関わっています。僕達が健康で文化的な生活を送るために国や都道府県、市区町村は様々な活動や事業を行っています。起床・朝食、登校、授業、夕食、就寝など色々な場面で税金は使われています。就寝の時、何に税金が使われているの？と思う人が多くいると思いますが、それは、警察や消防の夜間の見回り、僕達が日々安全に暮らすために行われています。それらに、必要な費用を賄っているのは税金なのです。

なぜ税金が必要なのだと思いますか？現在の社会では、僕達が生活するうえで必要なモノやサービスは民間企業が提供する仕組みになっていて、それらを僕達が消費しています。企業はあくまでも利益を目的にモノやサービスを提供しているので、利益が見込めないモノやサービスは提供されないことになります。

しかし、企業が提供しなくても社会にとって必要なモノやサービスがあります。例として道路で考えてみると、道路がなければ、移動や輸送がままならず、僕達の生活は困ってしまいます。一方で道路を造るには多額の資金が必要となります。そこで政府が税金という元手を使って提供しているのです。

また、僕達が家族とともに、収入をもとにして消費生活を送っている単位が家計なのです。つまり、経済活動をしている主体は3つあり、それは「家計」「企業」「政府」というわけです。

今、日本では少子高齢化が進んでいますが、この問題の一つは、社会保障の費用が増えていくことであり、もう一つは、その費用を負担する働き手が減っていくことです。老後の安定した生活や健康で文化的な社会を実現するためには、大きな費用を必要とします。その財源の中心は税金です。政府からどれだけ公共サービスを受け、その費用をどう負担するべきか、考えるべきだと僕は思う。

今回、この租税教室を通して、僕達が豊かで安心した暮らしが出来るように、様々な公共サービスが行われていて、これらの公共サービスを行うために必要な費用は、国民が納めている税金によって賄われ、税金が僕達の暮らしの中でどのような役割を果たしているのかを知り、税についての知識が増えたと思う。

税は「ちから」なり

武蔵野市立第二中学校 3年 岸田 彩花

私には科学者になるという夢がある。税金はその夢へと一歩踏み出すきっかけを私に与えてくれた。

小学生のころ私は理科が好きではあったが、実験をする機会はあまりなかった。そんな私に小学六年のとき、一つの転機が訪れた。市が開催しているサイエンス教室に参加できることになったのだ。ここでは、毎回面白い実験を行うことができた。葉脈標本作り、人工イクラ作り、花火作りなど、様々な実験を通して科学の面白さを学ぶことができた。この機会があったおかげで科学に対しての興味がさらに沸き、科学に関する図鑑や本を読むようになった。

また中学生では、次世代科学者育成プログラムに参加することができた。さらに高度な実験を行いながら、科学的思考力やより多くのことを学ばせてもらった。そして、その経験を活かしながら自由研究を行い、科学のコンテストに応募するまでに成長できた。結果は本選出場には至らなかったが、自ら研究を行う良い機会となり、将来大学院まで行き科学について極めたいと思う目標が持てた。そして今、科学者になって社会貢献するという夢を叶える為、頑張って受験勉強をしている。

私の夢を一押ししてくれたこれらのプログラムには、実は税金が使われている。その為それぞれのプログラムに無料や低額で参加でき、とても有難かった。また私が通う中学校の授業料が無料なのも税金のおかげである。他にも私が風邪を引いて行く病院代が無料なのも税金のおかげである。このように税金は身近なところで私たちを支えてくれている。もし、税金がなかったら私は夢を目指すどころか、まともに教育や医療などを受けられなかったのかもしれない。

もちろん、税金は他の困っている人も支えてくれている。社会保障制度によって困っている多くの人が助けられているが、この制度もまた税金によって支えられているのだ。税金のことをよく表しているのが「税」という漢字である。読みの一つに「ちから」というものがあり、民の力という意味からそのように読まれている。確かに税金は民の力によって成り立っている。私はその他に人を助ける「ちから」、自分を助けてくれる「ちから」という意味も含めたい。なぜなら税金は相互扶助の「ちから」をもっているからだ。私たちの生活を豊かにし、困っている人を助け、子どもに多くの夢を与えている。一方私たちは納税することで、人の生活を助け自分の生活の豊かさを陰から支えることができる。税金はまさに相互扶助の精神でできている。

日本の未来に「ちから」をつなぐために、これからの世の中を築いていく私たち学生が、税金を納めるという責任の重大さを知ることが大切である。そしてこの「ちから」を絶やさないように私も税金を納めていき、自分が受けてきた恩恵を誰かに返していきたい。

税金の使い道

横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校 3年 池田 結衣子

税金はどのように使われているのか？ふと疑問に思った。私は税金のことを全然知らなかったので税の作文を書くにあたって、税のことを調べてみた。すると、ある税が私の目をひいた。それは、「観光税」である。

私は神奈川県の大磯市に住んでいる。大磯といえば、「古都」として有名な観光地である。去年は約二千人万人もの人が、訪れた。観光客が増えるのは、自分の住んでいる所が、ほめられているようで、なんだかうれしくなる。一方で、困ることもある。それは、観光客で道路が渋滞していたり、バスの中に人が詰めこまれている状態になることがあることである。グローバル化に伴い、年々、日本に来る観光客は増えている傾向にある。そのため、大磯だけでなく、他の観光地でも同じようなことが起こっていると思う。調べてみると、大阪や、東京などの観光都市では、「観光税」というものを実施していることがわかった。

「観光税」とは、ホテルや旅館などといった宿泊、駐車場の利用、別荘の所有などにおいて、課税し、観光推進に加え、市民の負担を軽減するのに使われる税のことである。東京都や大阪府では、宿泊税、太宰府市では、歴史と文化の環境税、熱海市では、別荘所有税、富士河口湖町などでは、遊漁税を実施している。大阪府は宿泊税の使いみちとして、旅行者の受入環境の整備、大阪の魅力向上、国内外へのプロモーション推進といった事業に取り組んでいる。大磯と同じ古都で、観光都市の京都でも、「宿泊税」などの「観光税」の導入を検討している。この税の使いみちとして、市バスの混雑や、道路渋滞、ごみ放置や、騒音などの観光都市ならではの問題に使われる予定だそうだ。大磯市はどうか？私の周りでも、バスや電車が混んでいると困るといった声をよく聞く。大磯市は、観光による交通渋滞に対する策として、大磯ロードプライシングということを検討している。それは、大磯市が、観光などで道路を利用する人に、税金を課そうとするものだ。大磯市や京都府などは、観光が盛んな都市なので、観光に関わることに税金を課し、その税金を観光で生じる問題に使うとしていることは、良い考えだと思う。

このように、それぞれの都市で、その都市に合った税を課すことで、それぞれの抱えている問題を解決しようとしている。しかし、どこでも、例にあげたような観光都市ではないと思う。それぞれの地域で、その特性を生かして、税金を課せていく工夫をすることで、もっと良いまちづくりができるのではないかと、思う。そして、私たち、一人一人が税金について知り、きちんと払っていくことが重要だと感じた。

「入湯税」は何故払う？

鎌倉市立玉縄中学校 3 年 影浦 響子

塾の夏期講習で税について習ったとき、酒税やたばこ税などと一緒に聞き慣れない単語が出てきた。入湯税。温泉などに入浴した際に課せられる税金だという。家でお風呂に入るときには税金がかからないのに、外で温泉に入ると税金がかかるというのはいったいどういうことなのだろう。そう疑問を抱いた私は、この税作文をきっかけに入湯税について調べてみることにした。

入湯税とは、温泉を利用した人がその温泉施設を通して、一人当たり一日一五〇円前後を目安に市町村に納める税金のことだという。一日に一五〇円と聴いて、私は少し腰がひけてしまった。温泉の入浴料というと、大体一回千円程度だと思うので、そのうち一割以上を入湯税が占めていることになる。いつも高いと思っている消費税でさえ八パーセントだというのに。

しかし、入湯税の使われ方を知るとそれにも納得がいった。私は旅行に行くと、いつもたくさんのパンフレットをもらってきてしまう。綺麗なカラー写真について目目を引かれてしまうのだ。そして何より駅や観光地などで無料で配布されているので手に取りやすい。これらのパンフレットは、観光の振興という名目で入湯税を使用して作られているという。それだけではない。源泉を保護する施設や、観光地の消防機関などにも入湯税は利用されているという。入湯税は消費税などとは異なり、あらかじめ使用用途が決まっている「目的税」と呼ばれる種類の税金である。入湯税の使用用途は法律で「環境衛生施設、鉱泉源の保護管理施設及び消防施設、その他消防活動に必要な施設の整備並びに観光の振興（観光施設の整備を含む。）に要する費用」に利用されることが定められている。つまり、入湯税はさらによりよい観光地を作るために活用されていたのである。

初めは、どうしてこんなに高い税金を取るのだろうと不服に思った入湯税も、活用されている場面を知るとそれに納得できたし、なによりも身近に入湯税の恩恵を感じることができた。これは入湯税だけではなく、他の税金についても言えることだと思う。だから、私はもっと税金の使われ方について知りたいと思ったし、税金を払うのが嫌だ、どうして税金を払わなくてはいけないんだと納税に不満を抱いている人にも税金の使い道を知ってほしいと思った。そうすれば、多くの人が気持ち良く税を納めることができると思ったから。

「税金と私達の未来」

大月市立猿橋中学校 3 年 知見 帆乃佳

日本は今、千六十二兆円もの借金を抱えているそうです。そして、オギャーと生まれたばかりの赤ちゃんにもおよそ七百五十万円もの借金が課せられているということをみなさんは知っていましたか？私はこの裕福な日本に生まれて幸せに育ったのでこのような事実を知らずにいました。この多大な借金を一人あたり返済していくために国がどんな政策を立てているのか調べてみました。国民の三大義務の中に納税の義務があります。私達国民は国の費用を分担する責任を負っています。その義務を果たすために、所得税や自動車税などを収めています。私が一番身近に感じる税は消費税です。物を買うときに発生し、働いていない私達でも収めなければいけない税金です。近年、この消費税が八%から十%に引き上げられることに対して国会では討論がされていますが、私自身の考えとしては、小さなことから少しずつ負担を軽減できるし、確実に収めることができるので賛成です。

また、収められた税金がどのように使われているのか国が提示することも重要だと考えます。税金の使い道がもっと明確になれば国民が税金を収める義務を正しく認識することができるからです。また、日本は高齢化が進み医療費や年金などを私達の世代が担っていかなければなりません。ですから、増税も認めませんが、国の支出の仕分けを入念にすることで、国民一人一人の労働意欲も湧き、生活が潤うと思います。

三年後の東京オリンピックに向けてロゴマークや国立競技場の建設に注目が寄せられています。同時に東京都の税金問題についても目が向けられています。現在オリンピックにあたって私たち以上の税金を納めることが東京都民には求められているそうです。徴収した税金はおそらく選手村の設立・運営、会場のスタッフ、警備の人員など使う用途は様々ですが、私は、国で開催するオリンピックであるため東京都民だけでなく、全ての人が携わるべきなのではないかと考えます。そうすることで自分達が自らの手によって納めた税金で国際化が図れるという大きな利点が生まれると思います。国民一人一人がなぜ税金を収めるのかということを理解し、納得した上で納めることが大切だと考えました。そうでなければ今の豊かな日本を保つことができなくなり、国が破綻することに繋がると思います。なので、私は納税の義務を守れる大人になりたいです。

小学校、中学校と通い、ついに義務教育を受ける日数も残すところ8か月を切った。これまで自分はそのことが当然かのように学習に取り組み、部活動にも取り組んできた。そして、十五歳以下は何かあっても無料で医療機関を受診できる制度が整っている。こうした、言われてみれば「常識的」となっている環境も、実は税金によって支えられているのだ。僕にとって最も身近な税といえば、実際に納めたことがある消費税だと思う。しかしその消費税にいたっても、僕の中には曖昧な知識しかない。そのこともあり、社会の中でとても重要な役割を占める「税」について興味をいだき、調べてみようと思った。

そこで分かったのは、国の支出における割合は社会保障費が最も多いということだ。昨今、わが国では深刻な少子高齢化による社会保障費の増額とそれを負担する働き手の減少が問題となっている。その対策として、社会保障と税の一体改革が進められている。消費税増税はその根幹だ。税率が現状のままでは老後の高齢者の生活や健康を保障することはできない。僕はそれを知り、率直に言って唖然とした。近年に入り、さらなる高齢化へ拍車がかかっている事実が脳裏をよぎったからである。このままいけば、それに連なり税率もさらに上がっていくと思った。しかし、わが国の少子高齢化の進度を考えると、その対策は喫緊の課題だ。本来の目的である社会保障の安定化を目指すためには避けては通れない道なのだと僕は理解した。一方で、増税により物値が上がり個人消費が落ちこむことで、かえって税収が減ってしまうのではないかという懸念の声もある。固く結ばれてしまった財布のひもが再びゆるまることはあるだろうか。政府は5兆円規模の経済対策や軽減税率の導入を表明している。僕はそれに期待したいと思う。

税は国の政策と行く末に大きな関わりを持っている。なぜなら、重要な政策には多くの税金が充てられるからである。今回、社会保障と税について考えてみて、そのことがよく分かった。そして、今、僕は中学生である。消費税しか納めたことがない。しかし、社会人になれば、納めなければならない税も当然増えると思う。そこで、自分たちの納めた税により社会が潤い、生活が豊かになっていくことを考えた時、初めて税の大切さを理解した。「納税」という国民の立派な義務を果たしていかなければならないと感じた。それが「常識的」となっている環境を未来へと引き渡し、安定した社会を創造する第一歩になるのだと思う。子育てがしやすい環境となれば少子高齢化にも歯止めがかかるだろう。「常識的」の環境が提供されていた恩恵を忘れず、責任ある納税者になりたい。

「採血の残りの血液で、もう一つ検査項目を追加していいですか。自費で四千五百円くらいかかりますが。」

「分かりました。よろしくお願いします。」

夏休みのある日、診察室で主治医の先生と母との会話を耳にしながら、自費ってどういうことだろうと私は考えていた。

私は幼稚園の頃に病気をして、長い間入院をしていた。その後も経過観察のため、毎年夏休みに病院を訪れる。血液検査をして、主治医の先生と顔を合わせ、元気であることを伝えると大抵診察も終わるのに、今年は自費での検査項目が追加になった。診察室を出た後、会計をしに行くと、いつもは請求のない画面に、四千八百六十円という数字が並んでいた。母に聞くと、病気をしたことでかかったお金のことを、初めて教えてくれた。

私たち子どもは、自治体が医療費の一部または全額を助成してくれる制度があるそうだ。私が住んでいる碧南市も、中学三年生までの間は、入院、通院ともに助成の対象になるという。そしてその助成は税金でまかなわれているということ、私はその時初めて理解したように思う。入院は数カ月に及んだため、もし全て自費だった場合、一カ月当たり二、三百万かかっていたと、全国健康保険協会から送られてきた用紙を後日、見せてもらった。私は驚きと共に、この日本という国に生まれたことを幸せに思った。貧しい国では医療が確立しておらず、命を落としてしまうことがあると、テレビで見たことがある。そして、治療を受けるお金がないため、生きることをあきらめなければならない人が、同じ地球上にいるということに心が痛んだ。私は、税金という、直接目には見えない制度に助けられ、今という未来を生きていることができる。

税金というと、私にとってあまり良いイメージはなかった。私たちが一番身近なものは消費税だと思うが、表示されている価格にプラスしてお金を支払うことに少し損をしたような気持ちがあるからだろうか。しかし、私が小さい頃から母は、冗談とも本気ともつかない言い方で、

「税金の払える大人になりなさい。」

と言っていた。将来の夢よりも、税金を払える大人になることの方が大切なのかと疑問に思うこともあったが、今ならそれが分かるような気がする。支払った税金が、どのような形で、どんな風に役に立っているのか、私たちはあまり知ることがない。しかし、今の私は税金という医療保障に助けられ、未来を夢見ることができる。そしてその夢見る未来を必ず手にし、母の言う税金の払える大人になりたいと思う。それが次の未来へとつながり、私の恩返しになると考えているからである。

国債について知ったこと、思ったこと

一宮市立北部中学校 2 年 伴野 仁紀

先日、本棚から何年か前の「国と財政の消費税の役割」というパンフレットが出てきました。僕はパラパラとそのパンフレットを見ました。中には「消費税のうち約九割は年金、医療、介護、子育てなどの社会保障に使われている」という事や、国の収入と支出の総額や、その内訳などがグラフ等を使って説明が誰にでも分かりやすいように書いてありました。

その中でも僕は、支出総額の約二十四パーセントも占める「国債費」という項目が気になりました。

国債とは「国庫債券」を略したもので、日本国家が日本国民にしている借金のことです。個人向けには発行額全体のわずか一パーセント程度しか売られておらず、残りのほとんどは銀行や生命保険、損害保険などの金融機関が買って保有しているそうです。そもそもなぜ国債が必要なのでしょう？

インターネットで調べてみると、「増税をすると国民の不満が起こり、すぐに事が進まない、そこで、将来返すことを約束に国債を発行すれば、今すぐにもお金や労働力を使うことができたり、大きなプロジェクトができるメリットがある」ということや、「将来国債を返済する時には税金を使い、足りなければ国民は増税に賛成せざるを得ず、ある意味『税金の前借りをしている』ということである」という内容が書かれていました。

ギリシャが金融危機になった時の借金額は約三十八兆円だったそうです。それに比べ日本の借金は千兆円を超えています。一人当たりになると八百万円を超えるそうです。とても返せる額とは思えません。この借金額がいかに危険で、このままではいけないということは僕にだってすぐに理解できます。増税するといっても、消費税が上がれば買い渋りは当然予想されますし、他の問題も出てきたりして、計画通りに税収が入ってこないかもしれません。

確かに今現在、僕たちは医療や教育など、様々な面で助成や手当てなどの恩恵を受け、本当にありがたく助かっています。また国民全体も国や県、市からの十分な恩恵を受け、不自由なく生活をする事ができています。しかしそれは国債という借金などから成り立っていて、この恩恵はこのままでは続かないのです。

生活の充実も大切ですが将来のことを考え、みんなが多少の不自由があっても少しだけ我慢をし協力して、国債を増やすのではなく減らすことに全力を注いだら外国からも尊敬の目で見られるでしょうし、私たち自身も日本人としての自信と誇りをもつことができるのではないのでしょうか。

目先の物理的な幸せも大切ですが未来を考え、借金を減らす努力が今は必要だ、今だからこそやらなければいけないと僕は考えます。

大切な税

大垣市立興文中学校 3 年 渡部 真

「税金」と聞かれて、まず思いつくのは消費税。その他に所得税、酒税、タバコ税、ゴルフ税、住民税、相続税、贈与税、法人税などテレビ等から耳にした事がある。僕達の身の周りの生活は、たくさんの税金で成り立っている。僕がすべてを理解するのはとても難しい事であるが、税金のおかげで世の中が成り立っていて僕達の生活が守られている、と教えられてきた。僕が知っている事を具体的に述べてみる。

誰も税金を納めなかったら、犯罪が起きても警察官がいなくて町の治安が悪くなる。火事が起きても消してくれる消防さえいなければ消防車もない。義務教育がなくなり、学校にいけない子がでてくる。生活ゴミの回収が行われなくなり、町中がゴミであふれ、病気の人々が増えたり、水道から水が出なくなったり、修理されていない道路では事故が増えたり、少し思い浮かべただけでも恐ろしい光景だ。そして最近思う事は、税金を納めないそんな社会では、人の心もすさんでいき、自分勝手な人間が増え、皆で協力する事の大切さを忘れてしまうのではないか。税金制度は、常に誰かに助けられて、そして自分も誰かを助ける。「支え合う」という生きていく上でとても重要な制度であると思える。

僕はまだ税金の使い道等についてよく理解していない。納める税金といっても消費税だけだし、それも親のお金で払っている。しかし、よく考えてみると僕自身もあと数年ほどすると社会人になり、所得税や住民税などたくさんの種類の税金の納税者になる。払った税金がどこにどのように使われていくかについて強い関心をもって見守り、正しく使われているのかを知る。積極的に税金に対する知識を持つように努め、自分の考えをしっかりと持たなければならないと思う。

いく種類もの税金の中で、酒税・タバコ税に注目してみた。お酒やタバコなどは、生活に絶対的に必要なものでなく嗜好品だ。なぜお酒とタバコに税金がかかるのかを考えてみた。多くの人を買ってしまう物で国に税金が入りやすくなるから。それとも体に害があるから税を多めに設定しているのではないか。今では嗜好品に対して税金がかけられるのは当たり前となったようだが、個人で楽しむためのものに税金がかかるなら近い将来、ゲームやおもちゃ、マンガにも税金がかかるかもしれないと思った。

税について、いろいろと考えるのが楽しくなってきた。消費税も近い将来また引き上げられそう。今まで働いて税金を納めてきてくれた祖父母や父母の世代に続いて、これからは僕達が大切な役割を果たさなければならない。世の中の皆の幸せのために、社会を支える一人の人間として大切な税金をきちんと納めようと思う。

暮らしを支える税金

高島市立高島中学校 3 年 八田 くるみ

私は、今まで税金についてあまり関心がありませんでした。それは、税金が身近なものに感じられなかったからです。そこで、税金について調べてみることにしました。

税金には、最も身近で大人も子供も関係なく消費に対して課税される消費税。所得に対して課税される所得税。遺産を相続した際に課税される相続税など、身近なものから、そうでないものまで、種類はとても多く、税金はあらゆるものにかけているイメージで、将来こんなに税金を納めなければならないのかと、憂うつになりました。しかし、その税金の使い道は、学校では教科書代や机・イスなどの備品、また最近では各教室にエアコンがついたり、トイレが新しくなったりもしました。これらは全て税金でまかなわれていて、私たちは、税金のおかげで学校で快適に勉強ができています。

そしてこの夏、税金の必要性を実感した出来事がありました。それは、私が病院へ行った時のことです。親知らずの抜歯手術を受けるための事前検査をしました。採血、レントゲン、心電図、CT検査など今までしたことのない検査をたくさん受け、帰りに会計で支払いをしようとする、

「お支払いはありません。」

と言われ、とても驚きました。私の住む高島市は、中学校卒業までの医療費が無料で、市の予算、つまり市民の納める税金によって子供の医療費がまかなわれているのです。

そして、私は入院し抜歯手術を受けました。全身麻酔で手術を行い、終わってからは痛みが激しく、我慢できない時は痛み止めの点滴を何度も入れてもらいました。顔もパンパンに腫れ別人のようになり、人生で最もつらい一週間でした。その後、退院手続きをして支払いをしようとする、入院費、全身麻酔や手術、点滴の金額は請求されず、支払ったのは入院中の食事代だけでした。もし、税金がなかったら、私の両親は多額の入院費、手術代などを支払わなければならないのではないでしょうか。この時私は、心の底から、私たちの生活が税金によって守られていること、支えられていることのありがたさを感じました。

この出来事を通して、私たちにとって税金はとても身近なもので、暮らしをより豊かなものにする上でなくてはならないものだと思えました。

高島市で中学生以下の医療費が無料なのは、これからの未来を担っていく私達への期待が込められているからだと思います。私達は、税金の使われ方にもっと関心を持ち、税によってたくさんの恩恵を受けていることに感謝しなければなりません。そして、日本の未来を担う納税者になることが責務であると思います。私は将来、今まで受けてきたたくさんの恩恵を返せるよう、社会に貢献できる大人になりたいです。

「税金」という言葉を聞いて、やはり一番始めに思い浮かべるのは「消費税」である。調べてみると、消費税率を更に上げ、社会保障給付費に充てるという。新聞や報道で「社会保障」という言葉をよく見聞きするが、消費税をはじめとする税金がどのように使われているのか。来年度の社会保障給付費の予算は、今年度に比べて六三〇〇億円増加の見込みである。社会保障給付費の主な内訳は、年金、医療、福祉となっており、社会保障給付費を支える「税金」は、現代の日本を支える重要な役割を担っているようだ。

すっかり税に興味を持った私は、今度は母に尋ねてみた。すると母は、「あの日」のことについて話し始めた。

それはちょうど三年前。私が小学六年生の時の話だ。私の祖父は「骨髄性異形性症候群」という難病を患っていた。苦しむ祖父の姿を私はただ見守ることしかできなかったのである。結局私は何もできないまま、祖父は無情にも天国へと旅立ってしまったのだ。

さて、ここから本題である。一人で上手く生活できない高齢者には、ヘルパーの方が家に来て生活をサポートしてくれる「介護保険」という制度がある。実はその一部が、日本の皆さんが納めてくれた税金で賄われていたのだ。祖父もこのサポートを受けていたが、まさか一部に税金が充てられているなんて思いもしなかった。

又、祖父の家は少しでも生活しやすくなるために、と手すりをつけたり、入浴用補助いすという福祉用具を置いたりしていた。実はこれらも、九割が税金で賄われていたのだ。

私はこれを聞いて悲しくも嬉しくなった。祖父の闘病生活は、日本全国の皆さんが支えてくれていたということ。そして、祖父に何もしてあげられなかったと思っていた私だが、「納税」という形で、ほんのわずかながら協力できていた、ということが知れたからだ。もちろん、祖父を亡くした悲しみは消えない。しかし、税金は私たちの生活だけでなく、心まで豊かにしてくれる素晴らしいものだと感じた。

だが最近、税金を納めない人がいたり、国のトップとして活躍している人が、税金を私的に使っていたりという、税金を軽視しているニュースをよく耳にする。これは一国民として情けない行為であり、又、国民を裏切る行為でもあると思う。こんな風にならないよう、社会のためにしっかりと税金を納められる人になれるよう努力しよう、と強く思う今日この頃だ。

あの日から三年たった今年の夏。中学三年生になってようやく知った、税金の大切さと尊さ。このことを出来るだけ多くの人に伝えたいと思う。そうすることが、三年前、祖父のことを支えてくれた皆さん、そして今、天国で私の事を見守ってくれているであろう祖父への「恩返し」になると思うから……。

農泊体験を通して

大阪市立今津中学校 3 年 大宮 胡桃

私は修学旅行で大分の安心院に行き漁村の家に泊めていただいた。お世話になったお宅のご主人のじっちゃんと漁にでたり、奥さんのみよちゃんにエビのむき方を教えてもらったりと大阪ではできないような体験をした。近所のお宅のビワを取りに行ったり、もらったキュウリでご飯をつくったりと村の人たちが支え合っている様子も伺えた。特に感動したのは食事のおいしさと、船の上で食べたマテ貝や獲れたてのイカは最高だった。安心院の農家民宿のキャッチフレーズ「1 回泊まれば遠い親戚、10 回泊まれば本当の親戚」のとおり私はじっちゃんとみよちゃんを親戚のように思い、安心院が大好きになった。

このような自分が好きな町、応援したい市町村に納税できる「ふるさと納税」というものがある。納税したお金は、町づくりや災害時の支援に役立てられたり、また納税者自身が使い道を選べる。納税者は町の応援ができる上、さらにその土地ならではのお礼品がもらえるという。ふるさと納税は、「納税」という言葉がついているが、法律上は寄附金として取り扱われるため、寄附した金額が控除されるそうなので実質 2 千円でその土地の食材や民芸品が届くなんてとってもお得だと思った。しかし考えていたら疑問が出てきた。自分の住んでいる町の人全員がふるさと納税をしたら住んでいる町の税金はどうなるのか。応援されたくてもお礼となる特産品がない町はどうすればいいのか。調べると他にも問題があることがわかった。たくさんの人に納税してもらいたいと他の町と競い合い、お礼品がどんどん豪華になっていく。収入よりもお礼品を作るのにかかるお金が高くなり赤字になる。そして、お礼品を作るお金がないので、納税されたお金を使う。これでは町の活性化のための税の意味がなく本末転倒である。ではどうすればいいのか。私はこう考えた。

納税したらその町で農泊できるチケットがもらえる。民家に泊まりいろいろな体験ができる。納税されたお金で町の環境を整え受け入れやすいようにする。納税者は納税した町に来て自然を体験し、町が気に入れば定期的に旅行に来たり、もしかすると移り住んでくれるかもしれない。そうすれば町の活性化や過疎化の減少にも繋がる。特産品がなくてもその町のよいところをアピールでき、実力で納税者を呼べるのではないかな。

都会には都会の便利さがあり、地方には守るべき自然や生活がある。お互いに足りないものを補いあい、相互に支え合うのが税金の在り方だと思う。

ふるさと納税

泉佐野市立佐野中学校 3 年 金廣 ひかり

昨年、我が家に長野県から 30 キロ入りのおいしいお米が無料で届いて母は大喜びしていた。最近テレビでも話題になっている「ふるさと納税」を利用しているみたいだ。

「ふるさと納税」とは、自分が頑張っって欲しいと思う都道府県や市町村に寄付することで、お礼に特産品がもらえ、寄付した金額分の住民税や所得税の控除を受けることができる。自分で考え、選び納めることができる唯一の税金だ。

母は本当に縁もない長野県を応援しているのか？お米が欲しく、得をしたかっただけではないか？私は、疑問に思う所があった。

頑張っって欲しいと思う自治体を応援する趣旨で始まった「ふるさと納税」だが、豪華な特産品をゲットするための制度になってしまっているといけないと思う。

今年の七月、大雨により九州北部の各地で多くの被害が出た。普段おだやかな川が水であふれかえり、土砂崩れにより流れ出した大量の流木が、川をせき止め、またたくまに堤防をのりこえ、人々の家までも、のみこんだ。また、死者・行方不明者多数、一瞬で大切な人、物を失なって悲しんでいる人の様子をニュースの映像で見た。

遠くなればなれた所にいる私に、被災した方々の為にできることは何だろうかと思っていた。

そんな時、インターネットで、ふるさと納税でできる災害支援サイトを見つけた。パソコンの画面には大きく、「あなたの寄付が被災地の力に」と書かれ、特産品をもらわず、支援したい市町村に、ボタン一つで寄付できる簡単な仕組みだった。すでに寄付金は一億を越えていた。「被害に遭われた方々が少しでも早く元の生活に戻られますようお祈りいたします。」という寄付した方の応援メッセージもそえられていた。世の中には、心の優しい人がたくさんいると感じた。

今年も母は「ふるさと納税」を利用する。私はまだ学生だから、働いて税金を納めるのは両親だ。少しでもお得なお礼品をもらいたいと思うのは、自然な考えだと思う。だけど、私は母に、九州の被災地に寄付してみてはどうかと提案した。

自らが税金の使い道を選べることは、社会を動かす大きな力になると思う。最終的にどこに寄付するかを決めるのは母である。

「ふるさと納税」は、始めて私と母が税金について話し合うきっかけをくれた制度である。

税金を通して考えたこれからの生き方

三木市立緑が丘中学校 3 年 佐武 真之介

僕の中学校では防災訓練の後、校長先生からのお話がありました。そこで「自助」、「共助」について話されました。自助とは、自分で自分を守ることです。共助とは、地域の人、家族でコミュニケーションをとり助け合うことです。さらにもう一つ「公助」という言葉があります。公助とは、行政による救助、支援のことです。

今から 6 年前、東日本大震災が起きました。津波の被害により約四〇万戸が破壊されました。そこで、政府は仮設住宅、救援物資の支援など行いました。いわゆる公助です。それらをするにはお金がかかります。そのお金の正体は税金です。しかし、消費税、所得税、住民税などから集めたお金だけでは今まで消費していた額以上が必要なため賄えないと思いました。

父に聞くと「給料の中から復興特別税を納めてて、仮設住宅や震災の処理など復興に必要な財源を税金として納めるものがある」と教えてくれました。

働いている人が数年間納め、既に震災から 6 年経っています。そこで、今の状況を調べてみると、いまだに何万人もの人が避難しているという現状に目を疑いました。また、テレビなどの情報を伝えるメディアの復興状態を伝える機会もめっきりと減り、僕も忘れていました。おそらく忘れてるのは僕だけではないと思います。

震災後に祖母とご飯を作って被災地に送ったことがあります。そんなことをした僕でも忘れてるからです。その時にも祖母に復興特別税金の話を聞きました。「あのような税金制度に、こうした積極的な支援をすれば、いつか恩返しされる」と教えてくれました。

この税金制度は被害を受けた町が元に戻るまで支えるもので、共に助け合い生きてこうという思いを感じ、改めて人は支えられているんだと教えてくれたような気がしました。「誰かの助けになりたい」と強く思っても人の思いは薄れたり遠ざかったりします。だからこそ「税金」という支援が必要だと強く感じました。税金は様々な場面で納めさせられます。その税金は復興するため、人を助けるためのゆるぎない土台になり、持続可能な社会を作る確かな財源なのです。

税金は幅広く使われ、これからも社会の基盤となると思います。消費税一〇%も公助や福祉などに活用されれば、安いものです。

この「復興特別税金」を知り、支えあう大切さを改めて感じ、個々がこういう大切さを主体的に考え、行動できるようになれば、このような税金を使った公助だけで満足せず、自ら支援しようという考えが芽生え、その循環が持続するのだろうと感じました。

なので、大人になったとき、積極的に行動できる人になりたいです。

「税の意義」

たつの市立龍野西中学校 3 年 神頭 勇真

人はなぜ働くのか。昼夜懸命に働く両親の姿を見て僕は育った。社会科で勤労の義務・納税の義務を学んだ。そして受験に追われる毎日が、どんな生業を得て生涯税を納めなくてはならないのか、働く手段を得るための受験勉強にほかならないことに、今思い至った。なぜなら、僕が現役世代として社会に出る頃日本は人類史上未曾有の少子高齢社会に突入しているからだ。

増税しなければ困るのは国民なので、僕は増税そのものに反対はない。健康保険も年金も一般のひとが加入しているから、最大の受益者は国民であるという恩恵に俗したいという理由だ。二〇一四年消費税率が八%に引き上げられた。追って二〇一五年十%への再引き上げは見送られたが、将来的に二十五%まで上げる必要があるとされる。現行制度を維持するために、手近なところから可能な限りの増税案が次から次へと実施され、繰り出されている。年金支給年齢の引き上げ、受給額の減額、医療介護保険の自己負担率の引き上げ、医療保険の適用範囲の見直し、自由診療の拡張など、国民を人質にとった増税は社会保障維持のための根本的な解決策になるには、焼け石に水、という印象だ。

国民の爪になけなしの灯をともしようにして徴収された税金が、投機の対象として運営されてきた。市場の失敗による損失は甚大で、戦争や内乱状態に寄る被害額にも匹敵する国費が一瞬にして消えた。箱モノ、無用の長物と呼ばれる設備投資とその維持費は、財政に追い討ちを懸けている。日本が旧態然と運用してきた税制度は、日本の実情にそぐわず、時代遅れのものとなって非効率なばかりに破たんしかかっている。僕等の先行きは暗い。

二〇二〇年東京オリンピックが開催される。これまで数々の経済成長、ベビーブームを呼んできた団塊の世代が七十歳を超えて、その年は本格的に医療介護保険を使い始める年に当たる。一九六四年、前回の東京オリンピックの時には、彼らは今の僕と同じ十代の若者だった。僕は、父と父より上の世代を生きた日本人を誇らしく、心から感謝している。税はあらゆる世代間、世代格差、社会格差の隔たりを充足し、隔たりのアンバランスを是正するよう機能しなくてはならない。ここまで支えてきた世代に、僕は次の社会を生きる世代として現実の問題を直視したい。税制について想うとき、日本の未来に生きる僕の将来について考えることにほかならない。

最近、私の家の近くにある駅が新しくリニューアルしました。その駅には私もよく行き利用しています。家族と出かける時や、友達と遊ぶ時は電車も使います。電車を待つ間には駅前広場で休けいしたり、遊んだりと日常に駅は欠かせないものとなりました。

そんな中、近所の駅は大きく変身したのです。長い期間の工事を終えて、今はすっかり町になれたように感じます。工事をしている様子を見ていると日に日に便利できれいになっているように見えました。最初は何をモチーフにしたのか全然分からなかったけど、その駅前広場がリニューアルしたときの名前を聞いてすぐに分かりました。その名前は……「コフフン」です。私も初めは少し言いにくいなと思ったけれど今ではすごく親しみやすい名前になっています。そして、何をモチーフにしたかと言うと、名前の通り古墳です。奈良県にはたくさんの古墳があり、昔、奈良に都があった事もあり、歴史のある建物も多いからだと思います。そのコフフンには今、小さい子が遊べる遊具や勉強スペース、野外ステージなどがあります。他にも、カフェや屋内広場、トランポリンもあり、すごく便利になりました。コフフンはそういう遊具などの下はしばふになっていて、歩くところはこけてもあまり痛くないやわらかいコンクリートになっています。私の妹と弟も、まだ一才だけど散歩に行くときすごく喜んでいて見ている母や私もうれしくなります。こんな風にコフフンが新しくなったことで笑顔が増えて、より生活しやすくなったと思います。その理由の一つには税金があった事も大きいと思います。このコフフンを作るのに、十四億円程のたくさんのお金が使われたと聞きました。私には想像も出来ないくらいのお金です。コフフンを作るためのこのたくさんのお金のうち、ほとんどが税金だと知りました。これにはいろいろな意見や考えがあると思うけど、私はコフフンが出来て、駅が新しくなって、すごくうれしいです。新しくなった事で、もっと町が元気になったみたいですごく安心して生活出来ます。だから、他の県から旅行に来る人や外国人にも親しくなれる町になってほしいです。

そのためにも、税金があったから町が良くなったという事を忘れずに、私が大人になって税金を納められるようになったら、その税金は誰かのために使ってほしいです。今回、私がうれしいなあと感じたように、他の人にも同じ気持ちになってほしいので、将来私もきちんと仕事について、しっかり税金を納めたいです。だから、今使っている教科書などの身の回りの物を大切にして、感謝の気持ちを持って毎日生活しようと思います。

「前へーならえ！」

この言葉を聞くと、あなたはおそらく両腕を前に出すだろう。私は、思わず腰に手をあててしまう。そう、私は保育園に入園して以来十四年間、ずっと列の先頭に並んできた。

極端に背の低い私に、周りの人はこう声をかけてくれる。

「高校生になったらグンと伸びるよ。」

「男の子はこれからよ。」

だが、私の場合、こうはならないのだ。成長ホルモンの分泌が上手くできず、身長が伸びにくい疾患をかかえているからだ。

この疾患の治療として、成長ホルモンを補って身長を伸ばす薬を、毎日注射して四年半が過ぎた。この薬は、一日分たった一・二グラムで、一万円を超える高額なものだ。小児科では、何本かの薬を処方してくれるので、明細書には驚くべき額が記載されている。だが私には、「魔法の青い紙」がある。私がその紙を窓口で出すと、これまた驚くべきほど、支払い額は下がる。

青い紙の正体は、「小児慢性特定疾病医療受給者証」だ。これによって、国の税金による医療費の助成をしてもらえる。私が知っていたことは、これくらいだった。だがこの作文を書くことをきっかけに、この制度や税についてもっと知りたいと思った。まず、助成の条件についてだ。和歌山市在住の十八歳未満の児童であり、また疾病ごとに定められている認定基準に該当していなければならない、というものだ。また、平成二十七年からは、負担してもらっている額の半分以上を、国民の消費税から、もう半分以上を地方税から出してもらうことに決まった。それから、税といえば私が思いつくのは、消費税くらいだが、実際は違う。車や土地、その市に住むことにさえ税金を払わなければならない。そのうちの消費税を使わせてもらい、私は治療を受けられている。

そのことへの感謝を、常に心の中に持っていなければならない。私はこれまで、何度か注射を打ち忘れたことがあった。その時母はいつも言っていた。

「誰のおかげで治療を続けられてんのか、よく考えろ。感謝の気持ちが足らぬと違うか。」と。その通りだと思う。

消費税引き上げなどで、税の世界が大きく動いている今、この作文をきっかけに税の様々なことに興味を持てたことは、すごく良い経験だったと思う。これを活かして、これからもっと税について考え、いざ大人になり、税を払う立場になった時、子供の頃の感謝を忘れず、責任を持って税金について考え、払える大人に私はなりたい。

税と社会保障

米子市立福米中学校 3 年 井上 亜美

私たちは社会保障という制度に守られて生きています。社会保障とは、私たちが健康で人間らしく暮らせるように、医療、介護、福祉、年金、生活保護などを受けられる、様々な行政サービスのことです。国が私たちの納める税金で使っている主なものが、この社会保障で全体の三分の一にあたります。そのお陰で私たちは、病気になれば少ない負担で病院にかかれるし、高齢になっても必要な介護を受けたり、病気などの理由で収入がない人には生活保護が支給されるのです。このような制度は、私たちの納めている税金によって成り立っていると言っても過言ではないと私は思いました。

しかし、近年は少子高齢化の急速な進行に伴う納税額の減少が問題になっていることを知っていますか。少子高齢化とは、出生率が低下する一方、平均寿命が延び、高齢者が増えることですが、なぜその事が税と関わって問題になるのでしょうか。

調べてみると、社会保障の費用を負担する働き手が減っていくこと、高齢化によりその費用が増えていくことが分かりました。つまり、企業の労働力も弱まり、企業が国に納める税金が減ります。その結果、国としての税収不足になります。一方、高齢化は進むので、サービスの需要は増えていきます。だから、このまま少子高齢化による税収不足が続いていくと、私たちは十分な社会保障を受けられなくなるかもしれません。

その解決策として、私たちの身近な消費税の増税が考えられています。増税、と聞くと私たち消費者の支出が増えるようであまり良い印象を持ちませんが、税金は私たちみんなの未来をより安全で安心できる社会にしてくれるためのいわば貯金です。だから、私はこのままでは国のあらゆる制度が存続できない可能性もあるので仕方がないことだと思います。しかし、増税だけでなくその他の対策などについても、きちんと話し合い、考える必要があるのではないかと感じました。

私には社会保障を受けて生活している祖父母がいます。お陰で病気にかかっても少ない負担できちんと診てもらっており、薬も出してもらっています。まだ先ですが、やがて私の両親、そして私自身も社会保障を受ける時が来ると思います。その時、私たちは今、祖父母が受けているように、またはよりよい社会保障を受けることができるのでしょうか。私は、そのような社会であってほしいです。

今後の日本の社会のかたちを創っていくのは私たちです。だから、誰もが幸せに暮らしていけるよりよい社会を実現していくために、一人一人が税に関心を持ち、これからの税のあり方、納め方について考えていく必要があります。そして、今よりもっと豊かな社会を実現していくべきだと思います。それが、私たち若い世代の課題ではないでしょうか。

今、世界の 75%以上の国々が消費税制度を導入している。日本は現在 8%の消費税率であるが、世界では 15~25%の国がほとんどである。そのため、日本は社会保障の面で外国に比べ負担率が高く、将来を不安に思う国民が多いのではないだろうか。

先日、母が話してくれた。僕には 95 歳になる曾祖母がいて母が面倒をみている。曾祖母は 50 年以上田舎に一人で暮らしていた。元気だったが、高齢なので岡山の町中にある施設にデイケアに行き、運動や食事、入浴、病院受診などをお願いした。家までの送迎代、介助代、食事代、入浴代など週 3 回で一か月 20 万円ほどかかっていたはずだが、2 万円程度しか請求はなく、残りは介護保険で負担をしてもらっていたようだ。しかし昨年、曾祖母が突然立ち上がることができなくなり、介助が必要になったため施設に入らざるを得なくなった。すぐには老人ホームの空きがなく、急きょ民間の介護付き有料老人ホームに入居させてもらった。そこは、ホームの敷金をはじめ介護用品代、オムツ代、オムツ交換代、見回り代など何かしてもらう度にお金がかかり、自分で体を動かせない曾祖母は一か月 30 万円以上のお金が必要になった。その生活が半年ほど続き、ようやく特別養護老人ホームに入居させてもらえることになる。築一年の綺麗な建物、個室も広く、いつも介護士の方がそばにいて安心して暮らせることができ、そのうえ年金を使えばほぼ支払いが可能らしい。母は本当にありがたいと言っている。曾祖母一人の年金、医療費、介護費すべての生活費を合わせると一年間で 250 万円以上を国の社会保障費から給付してもらっていることになる。日本の社会保障給付金は現在 100 兆円強であり、そのうち約 40%を消費税などの税金に頼っているそう。曾祖母は年間 100 万円以上の税金を使っている計算になる。

もちろん、国民が税金を納めていることで教育、医療、道路、水道、警察、消防など様々な面で生活が安く利用でき、豊かに暮らせていることは知っていたが、まさかこのような高額な税金の給付をしてもらっている人が僕の身近にいたとは本当に驚いた。日本には曾祖母のような高齢者がいったいどれだけいるのだろうか。これから高齢化が進み、社会保障給付費が増大してくることは分かっている。僕の両親が高齢者になった時、今のような保障を受けることができるのだろうか。僕たちが納める年金や税金で支えることができるのだろうか。と心配になってきた。

僕はこの母の話を聞くまで、税金とは色んな物にかかって払わされるお金という認識だった。しかし、調べるうちに、税金を納めることで自分だけでなく必要としている人の役に立てていると思うと納税に対するイメージも良くなってきた。僕は将来、親たちの世代の高齢者を支えていけるよう、しっかり税金を納めることができる人になりたいと思う。

「なくてはならない税金」

徳島県立川島中学校 3 年 濱口 明日香

「もしもこの世の中に税金がなかったら？」

私は小学生のとき、こんな内容のビデオを見ました。税金のない世界では、火事になって消防車を呼ぶにも、道路を通行するのにも、警察で事件や事故の相談をするにも全てお金を払わなくてはなりません。私たちの命を助けてくれる病院に行くのにも、医療費や薬代がとても高くて、ちょっとしたケガや風邪では行けません。税金のない世界に住んでいる人たちは、何をするのにもお金がかかり、安全で快適な生活が送れていませんでした。

それに比べて、税金がある世界に住んでいる私たちの生活はとても充実しています。いつでも何かあればすぐに救急車や消防車が無料で駆け付けてくれ、道路が無料で通行でき、警察が事件や事故から守ってくれます。学校で何気なく使っている机や椅子や、教科書も税金によってまかなわれています。

私が小学生の時、エレクトーンの練習で、腱鞘炎になったとき、病院でレントゲンを撮ってもらったり、湿布をしてもらったりしたけれど医療費は全て無料でした。ここにも税金が使われていました。

改めて考えてみると、税金は無いと、とても困る存在です。特に私たちに関わりのある学校は、ほとんどの物が税金によりまかなわれていると言っても過言ではありません。国税庁のデータでは、私たちが、公立小学校を入学してから中学校卒業までの九年間の義務教育と、高校三年間で、一人当たり一千百三十八万八千円もの教育費を税金で負担してもらっています。それなのに、「学校に行って勉強するのは当たり前だ」としか思っていなかった自分自身に憤りを覚えます。大切さを忘れて、当たり前のように学校での設備や学用品を使っている私たちの姿に、大変な思いをして毎日働き、税金を納めている人々はがっかりしてしまうと思います。

また、ニュースで納税が義務づけられているのにも関わらずそれを支払わない人や、一生懸命働いてお金をたくさん稼いでも、その分税金をたくさん納めなければいけない累進課税により、働く意欲を失ってしまう人がいるという問題があることも知りました。

私たちが今できることは、人々が大変な思いをして稼いだ税金であることを理解して、感謝の気持ちを忘れずに、勉強に取り組み、未来を創造できる人になることだと思います。「こんな子たちのためなら税金を払ってもいいよ。」と、税金を納めてくれている人たちに思ってもらえるように、私たちが努力することが不可欠だと思います。税金を払う人々と、その税金の恩恵を受ける人々の間に信頼関係ができてこそ、納める人が、誰かのために心から使ってもらえたらと思い納める税金へと変わっていくはずです。納税により築かれた住みやすい社会にするための一員となれるよう、今を頑張りたいと思います。

繋がっていく「夢」と「税金」

福岡市立長丘中学校 3 年 山口 紅羽

私は保育園の頃から英語を習っていて、英語が大好きです。小さい頃、英語で書かれているグリム童話やイソップ童話、アンデルセン童話などの絵本の内容を理解するのがとても面白くて、次から次に手に取って読んでいました。そのたくさんの童話は、市の図書館から借りていました。図書館には英語の絵本の他にも、外国の雑誌、英字新聞など、海外の書籍が数え切れない程置いてあり、そこは幼い私にとってとてもワクワクする空間でした。そしてそういう本を読んでいくうちに、いつしか翻訳や通訳の仕事に就くことが私の夢になっていました。

しかし「どうして図書館にはこんなにたくさんの本があるのだろう？」と疑問に思い、両親に聞いてみたところ、図書館の本には税金が使われているということを知りました。建物や机、椅子などの設備も税金で賄われていて、そのおかげでたくさんの本やDVDなどを無料で借りられたり、きれいな涼しい場所です。

改めて考えてみると、図書館だけでなく図書室の本も、無償で配られる教科書や古くなった校舎の建て替えや冷房の設置なども、私達の学校生活において税金が使われているものはたくさんあります。美味しくて栄養のある給食を安く食べられるのも税金のおかげです。調べてみたところ、私達中学生一人当たりの教育にかかる税金は一年間で百万円近くにもなるそうです。その税金のおかげで、私達は快適な学校生活の中で勉強や運動に励むことができます。

私が英語の本を読んで英語に携わる仕事に就きたいと思ったように、例えば理科の授業を受けて「科学者になりたい」と思う子や、体育の授業を受けて「オリンピックに出たい」と思う子、いい先生に出会って「学校の先生になりたい」と思う子だっているでしょう。私達の教育のための税金は、つまりは私達の「夢」へと繋がる税金でもあるのです。

大人が払ってくれている税金が、私達が歩んでいく道をサポートしてくれているという有り難みを忘れないで、これからも夢を叶える努力をしていきたいと思います。そして、大人になったら今度は私達が納税をする番です。納税の義務と一緒に、子供達の夢が見つかるよう・叶うようにサポートする役目も引き継がれていくのだと思います。

税金は教育だけでなく、福祉や社会保障、公的サービス、科学技術発展のための費用などにも使われていて、生活全ての礎になっています。「誰かが払えばいいや」「自分は払いたくない」という気持ちを持ってしまうと、自分達の生活が成り立たなくなり、ガタガタと崩れてしまいます。しっかりと納税の義務を果たし、幸せで明るい日本を作り、子供達の未来を支えていきたいです。

私たちの税金

北九州市立緑丘中学校 3 年 山本 愛弓

「ゴミを出しとってね。」

遅刻しそうになって慌てて家を出ようとする、母が背中から叫んだ。

「時間がないからムリ！」と言うと、

「ゴミ置場に置くだけだから時間はかからないでしょ。」と母は言う。

何で私なん？あとで誰かが出せばいいのに。私はブツブツ一人言を言いながら、母と口論する時間も惜しいので、ゴミ袋を持って大急ぎで家を出た。

それにしても、毎日毎日どうしてこんなにゴミが出るんだろうか。週二回のゴミ収集の日には必ずゴミ袋が一杯になる。二、三日もすれば、家の中の何ヶ所かに置いてある空のゴミ箱が、いつの間にかいろんなゴミでまたあふれているのだ。

私はゴミをうらめしく思って、北九州市のゴミについて調べてみた。一年間のゴミの処理量が驚くことに五十万トン近くあった。そのうち、家庭から排出されるゴミの量は半分くらいで、これを一人一日あたりのゴミの量になおすと約七百グラムになることが分かった。この値は全国平均に比べて高い数値らしい。

しかし、そのことよりも私がもっと驚いたことがある。それは家庭のゴミを処理するのに約百億円もの経費がかかり、一部は有料化(ゴミ袋)したものの、その経費の大部分が北九州市に入る税金から出されているということだった。つまり、市は良い生活環境を作り、市民が健康で快適に生活できるように守ってくれているのだ。

私は今まで「税金」のことなど一度も考えたことがなかった。ただコンビニなどで買物をしたら八パーセントの消費税がつくことは知っていた。しかし、その消費税がどのように使われているのか考えたこともなかった。だからゴミ処理に税金があてられることを知って、驚くとともに考えさせられた。

市民が納めた「税金」は、最初は一人一人の小さな力だけれども、百人千人一万人と手をつなぎ力を合わせていくと信じられないくらい大きな力になる。そして、その力はいろいろなものに形を変えて私たちのもとに帰って来て生活をうるおしてくれるのだ。

学校でもらったパンフレットを見て、つくづく税金のありがたみが分かった。そして、国民の三大義務の一つに「納税の義務」が定められていることに納得できた。

私は中学校で陸上部に所属していた。その中のリレーは一人一人の力も大切だが、バトンを次の走者に正確に無駄なく渡して力を合わせる事が最も重要である。税金もこれと同じで私たち市民が正しく納税し、そのバトンを受けとった市が住民の声にまじめに耳を傾け計画実行する。そしてそのバトンを受けとった私たち住民が感謝を忘れず社会に貢献する。そうすれば、今以上にすばらしい未来が待っていると私は思う。

未来を豊かにするために

佐賀県立武雄青陵中学校 3 年 原 慶志

「税金は、どのようなところに使われているの？」僕がそう聞かれたらどう答えるだろうか。そう考えていると、ふと、去年僕が体験したことを思い出した。

二〇一六年、七月末。僕は韓国にいた。同国で行われた七泊八日の英語体験キャンプに参加するためだ。同じ学校から僕を含め四人の中学生が参加し、一週間という長いようで短い時間を異国の地で過ごした。特に僕の場合は海外に行くのが初めてであったため、全てが「初めて」だった。日本語ではない異国の言葉（韓国語）が飛び交っている街なみや、あらゆるものが辛い韓国での食事。見たものや聞いたもの、口にしたものなど、沢山のものが貴重な経験として今でも記憶に残っている。また、キャンプ自体も魅力的だった。韓国人のクラスメイトに囲まれていたら自然と話せるようになり、はじめて外国人の友達ができた。そんな友達と受ける一日に十コマあるアクティビティーは活気にあふれたものばかりで、英語で分からないところがあっても気にならないぐらいだった。案ずるより産むがやすしとはよく言ったものだ、何事も体験しないと分からないことがあるのだと思えた体験となった。

このように貴重な体験ができたキャンプとなったわけだが、もしこれがすべての費用を自己負担しなければいけなかったら僕は参加していなかったかもしれない。なぜ、僕が迷いなく純粋に参加したいと思えたのか、その理由は、県から補助金が出る、自分の家で負担する金額が安くてすむということが分かったからだ。そして、県から出る補助金は、税金によってまかなわれているのだった。このような機会があって初めて知った。税金は、公立の小学校や中学校を運営している以外にも、このような形で僕たち学生の成長を応援する使われ方をしていたのだ。そう分かった時、僕たちに期待されていることを嬉しく思ったのと同時にあらためてその重さに身が引き締まる思いがした。たくさんの人のお金の一部を使って貴重な体験をさせてもらったのだからそれを無駄にせずこれからの生活に生かしていこうと決心した。

税金は、どのようなところに使われているのか。そうたずねられたら僕はこう答えるだろう。「税金は未来を豊かにするために考えられて使われていると思う」と。僕たちはたくさんの人にお世話になりながら色々なことを学んでいる。普段実感できる機会は少ないが、税金なくしては、僕たちは学校にすら行けないだろう。僕は、今のうちにたくさんのことを吸収し、お世話になった自分のふるさとに恩返しができるような大人になりたいと思う。みんなで助け合って社会をつくっていけるように。

税金から生まれる笑顔

南島原市立加津佐中学校 3年 小柳 はなこ

みなさんは学校に行けてあたりまえだと思っていませんか。私は最初そう思っていましたがある経験をしてから考え方が一瞬で変わりました。

ある経験とは、母の母国フィリピンに行ったことです。今年の二月から四月までの二ヶ月間、母方の祖父が亡くなったので行きました。何度も行ったことがあります物心ついてから行くことは初めてでした。そのためどんな国だろうと少しワクワクしていました。しかしフィリピンで過ごして行く中でふと思いました。あれ、子供が平日外で何かをしている。私はふと思いました。しかしその時は小さな疑問だったためふと思うだけでした。ある日屋台で家族とご飯を食べていると、ペットボトルを拾っている子供達がいきました。私は気になって母に尋ねてみました。

「あの子たち何やってるの」

母は

「ペットボトルを拾ってそれを売り生活費にしているんだよ。」
と教えてくれました。私はこのことを知り、色々な感情がわいてきました。

現在お金がなく家族のために働いている子供が発展途上国にはたくさんいます。私たちのように、学校に行けることも、部活ができることも三食食事ができることもあたりまえになっています。しかし、周りを見てみると世界中には学校に行けない子供達がたくさんいます。何故、学校に行けない子供がたくさんいるのか日本と発展途上国の違いは何なのか考えてみると税金という答えにつながりました。私達は、日本の税金で小・中校と学校に行けています。しかし、世界中の発展途上国で、この制度が整ってないところが多いので満足な教育を受けることができないのです。その他にも病気になっても満足に治療が受けられないことも現状です。

私は改めて税金のありがたみや大切さを感じました。私が今幸せに暮らしているのは、父や母、家族のおかげでもあります。でも、何かあったら助けてくれる消防士さん警察官のみなさんがいるからだと思います。フィリピンに行った経験は本当に大切です。私には夢があります。それはキャビンアテンダントになることです。その夢を叶え世界をつなげられるようにしたいです。そして、税金の大切さを伝え、世界中の子供が笑顔になり、世界中が平和になってほしいです。日本もフィリピンも良い所を共有して一人でも学校に行ける子がふえてほしいです。それが世界中へと広がっていくことによりたくさんの子供が笑顔と希望にあふれると思います。

将来の夢

山鹿市立鹿北中学校 3 年 島北 大都

「消費税がなかったらなあ。」

買い物中、たまにそう思う時があります。もしその通りになれば支払う額が少なくて済むのに。でも最近はあまりそう思わなくなりました。なぜなら、ある出来事が起こり、それをきっかけに税について考えたからです。

平成二十八年四月十四日、熊本地震が起きました。この大災害によって熊本城やたくさんの建物が崩れ、多くの尊い命が失われました。僕の町はほとんど被害がありませんでしたが、テレビを通して熊本の悲惨な状況が伝わってきました。その中には被災地に手を差しのべる自衛隊の方々、全国から送られてくる大量の食料も映っていました。その後、自衛隊という組織は税金でできている事、あの食料の中には税金で買われた物もある事を初めて知りました。これらは被災された方々にとって命をつなぐ最後の頼みの綱です。この地震から税金の重要性を改めて感じました。

しかし、税を払いたくないと思わなくなった理由はこれだけではありません。

僕は免疫不全という病気で、白血病の治療後でもあります。今は三週間に一度、免疫を補充する療法を受けており、その点滴一本一本がとても高価だという事は前から気付いていました。そして、その一回一回に多額のお金がかかっている事を領収書を見せられて知りました。さらに僕は難聴児なので人工内耳をつけています。人工内耳とは聴力を補ってくれる精密機械です。それも高価な物です。全てにお金がかかってしまい、家族に申し訳ないといつも思っていました。そんなある日、

「ほんと皆さんに感謝せなんね。」

と母が言いました。始めは何の事か分からなかったけど、説明を聞いて本当に驚きました。まさかあのお金の大半が税金で支払われているなんて思いもしなかったからです。今ここで普通に生活できるのは皆さんの大切な税金のおかげです。また、このような世の中の仕組みが完成するまでに様々な苦労や取り組みがあったことも考え、感謝の気持ちでいっぱいになりました。そして何かして恩返ししたいと強く思い、自分の将来像を決めました。

「社会に役立てるような人になりたい。」

僕の夢はまだ決めていません。でも自分の力を最大限に発揮して地域に、熊本に、世の中に人一倍貢献できる人になりたいです。

今、僕は皆さんの税金でまかなわれている教科書、僕のために補助していただいている人工内耳関連の機械を存分に使い、学校を休まないように、しっかり授業を受けています。

税金を納めている方々に感謝しつつ、現在僕も払っている消費税をはじめ、これから大人になったら払わなければならないであろう決められた税金をきちんと納めていこうと思います。そして、その税金によってもたらされた一日一日に感謝しながら、勉強に励んでいきます。

助け合う日本に生まれて

宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校3年 江藤 彩也子

中学二年の秋。私は社会保障のありがたさを痛感することになった。国の指定難病といわれる病気にかかったのだ。何度も病院に通い、診察し、薬などを使って治療する。正直、医療費が家計を苦しくするのではないかと心配であった。

しかし今は、そのような不安はかなり減った。私はある一冊の手帳を受け取った。国の指定難病にかかっているということを証明し、国から補助金が出るのだ。ある一定の金額以上の医療費は払わなくてもよいという、母はもちろん、私も安心するようなものだった。それと同時に、「私は様々な人から助けられている」という感謝の気持ちがふつふつと湧いてきた。

社会保障が充実している日本だから安心して治療を受けることができる。他の国には医療保障がない国もある。重い病気にかかっても、「金銭的に厳しい」といって病院に行くことすら許されない人もいるという話を聞き日本の税によって支えられている制度は本当に「有り難い」ことだと思った。

又、私には自閉症と知的障がいをもつ高校生の姉がいる。姉にも「療育手帳」というのが発行されており、有料道路の通行料が半額になったり、学用品や生活用品が割引されたりと様々な手当を受けている。放課後デイサービスの使用料も、明細を見ると多くを国が負担してくれていることが分かる。姉はデイサービスに行くことが大好きなので、たくさん行かせてあげられるのは母としても嬉しいようだ。

日本国民の義務とされている納税。名前も顔も何も知らない数多くの人が支えてくれて受けられる、国からの援助。そう考えると、何だかとても不思議な気分になってくる。日本に生まれ、このような社会保障があるのが当たり前の中に生きてきたので、自分たちがどのような援助を受けているのか、それは知らない人が納めた税によって支えられているのだということを深く考えたことはなかった。

今、増税について様々な議論が起こっている。ただ単に「品物の値段が高くなるから」という理由で増税に反対する、という考えだった私も今では様々な観点から税を見つめなおしている。

「現代の私たち」だけではなく、「後世の子孫たち」が生きやすい社会をつくるには。どうすればよいか。そして、今受けている援助を無駄にしないためにも治療に一生懸命取り組みたいと思う。

税金が支える教育。教育が変える未来。

沖縄市立美東中学校 3 年 大城 楓

私が通う中学校は、創立七十年を越える歴史のある学校です。そのため、校舎も古く、七十年とはいきませんが、数十年間使われてきました。そしてついに、今年から校舎の改築工事が始まりました。プールは取り壊され、グラウンドはおよそ半分が使えません。不便なことも多いですが、みんな新校舎を楽しみに待っています。

そんなある日、ふと一冊の本を手に取りました。それは「武器より一冊の本をください」という本です。この本はマララ・ユスフザイさんの「勉強がしたい。」という思いが切実に描かれていました。私は本を読んで、こんなにも「勉強がしたい」と願っている人たちがいることに強い衝撃を受けました。私たちは個人の意思に関係なく、小学・中学と必ず教育を受けなければなりません。しかも、その教育に必要なお金は、日本に住んでいる約一億三千人万人もの国民が全員で「税金」として負担しています。日本国民全員が、私たちに教育を受けさせてくれているのです。こんなにも素敵なことがあるのでしょうか。しかし、私たちはこんなにも恵まれていることをあまり実感していません。私もあの本を読むまでは、教育を受けさせてもらっていることに何のありがたみも感じていませんでした。

私たちの学校の校舎改築は、もちろん老朽化が大きな要因です。ですが、私は使い方がもっと良ければ、まだ使えたのではないかと考えます。年間数回割れる窓ガラス、木の壁に開いた穴、ラクガキされた机。こういうことが起こるのは、一人一人の意識の問題ではないでしょうか。

私自身、あの本を読むまでは、教育が受けられる喜びやありがたみを理解していませんでした。ですが、そんなことはあってはならないと思います。私たちは国民全員から「税金」という形で支えてもらっています。そのことを忘れずに、これからは勉強をがんばっていきたいと思います。

そして、夢を叶え、一社会人として税金を納め、次は私が子どもたちを支えていけるようになりたいです。

「一人の子ども、一人の教師、一冊の本、そして一本のペン、それで世界を変えられます。教育こそがただ一つの解決策です。」

これは、マララ・ユスフザイさんの言葉です。教育で世界がより豊かに、平和になることができます。私はそんな世界を望んでいます。だから、「税金」という形で微力ながらも貢献していきたいです。

現代、そして未来を作る税金

札幌市立月寒中学校3年 田中 みいあ

「税金は高い、私たちの税金はどこへ？」

そんな声をテレビや大人の方が言っているのをよく耳にする。私は今まで税金についてよく知らず、あまりいいイメージを持つことができなかった。

ある日学校で行われた租税教室で、税の種類や使い道を知った。そこで知ったことを家族や祖父母に話した際、車いすで生活を送る祖母が「昔よりバリアフリー化が進んで生活がしやすくなった。これも税金のおかげなんだよ」と、話してくれた。

それから色々調べていく中でもしも税金制度がなければ、当たり前を受けている授業も受けられなくなり、きれいな街にもごみがあふれてしまう。夜の街が暗くなって治安が悪くなり、私たちの生活へ悪影響が出るのではないか。そう思ったとき、「税金」が生活を送る上でどれだけ必要不可欠なものかを知ることができた。それと同時に、いいイメージを持てなかった税金が生活をプラスにするととてもありがたいものだと思った。

「だれもがもっと過ごしやすい世の中になればいいな」と思うことがある。それを実現させるために私が今できることは、二つあると考える。

一つは、税金について多くのことを知って自分が納税者になったときに無知で困らないようにすることだ。例えば、車いすに乗る祖母はもちろん、すべての人々が豊かで暮らしやすい世の中をつくるのに「社会保障」という税金が使われていることを最近まで知らなかった。奥が深い税金について学び、たくさんの知識をつけるべきだ。

もう一つは、教育をしっかりと受けるということだ。学校の建設費や教科書など、学校生活において必要なものは税金で賄われている。日本の子供は、一人ひとりが勉強をする機会を与えられているということなので、感謝したい。この機会を無駄にせず、勉強などをしっかりと行うことが今の私にできる最大のことだと思う。

「税金は高い」という人は少なからずいると思う。中には納めるべき税金を納めない人もいる。それを改善するために、私が学校で受けた租税教室のようなものをいたるところで定期的を開いてみてはどうか。

「税金は払わされているのではなく、明るい未来を作るための投資である」と、今回作文を書くために調べたことや租税教室を通して思うことができた。

税金は私たちが生活していくための、「会費」のようなものだと言われた。まさにその通りだと思う。

今の日本の税金が昔より生活しやすくしているように、未来がもっと豊かになるよう、大人になったら立派な納税者になりたい。そして、明るい未来を作る一員として、納税で未来への投資をしていきたい。

姉の姿から学んだこと

横手市立平鹿中学校 1 年 佐藤 凜

私には二歳上の姉がいる。その姉は、中学校入学を機に剣道部に入った。小学校時代はブラスバンド部に所属し、運動とは無縁だった姉の挑戦に当時の私は驚かされた。毎日汗だくになって帰ってくる姉。時には腕に大きなあざを作ってきた時もあった。姉の挑戦に驚かされたのは、姉が脊柱側湾症という骨の病を抱えていたことも大きい。脊柱側湾症とは、体を支える脊柱が湾曲する病だ。剣道は竹刀を振るだけでなく、相手と体をぶつけることもある。姉にとって、不安定な上体を支えながら稽古をすることには、たくさんの苦しさがあったはずだ。しかし、家での姉は、そんな苦しさを口に出さなかった。いつも笑顔で優しい姉。挑戦を続ける姉は、いつしか私のあこがれの存在に変わっていった。

今年の春、私も姉の後を追って、剣道部に入部した。練習は、想像以上に厳しいものだった。私は姉と四ヶ月間練習を共にした。家での優しい姉の姿とは違う、真剣でひたむきな姿。私の知らなかった姉の姿を見て、益々姉の偉大さに気づいた。七月の全県総体、姉の集大成の試合を見た。試合が終わり涙を流す姉を見て、私の胸は熱くなった。

姉は、この夏、脊柱湾症の手術をした。この時期に手術をした理由は、部活動の仲間に迷惑をかけないように、引退まで先延ばしにしてきたからだ。手術は、長時間かかった。そこから二週間の入院生活。家に帰ってきた姉は、曲がっていた骨がまっすぐになり、二センチ身長が伸びていた。帰ってきた姉の懐かしい明るい笑顔に、私は安心した。

ところで、この姉の大手術と入院には多額のお金が必要だったはずだ。しかし、実際に我が家での負担は、ほとんどなく、姉の手術費や入院費は、国が負担してくれているそう。こうした社会保障が可能なのは、税金のおかげだと父が教えてくれた。父の話を聞いて、私は小学校で税金について学んだことを思い出した。税金は、私たちの暮らしの安全や、平等に教育を受けるために使われているということだった。私は、今回の姉の手術費などのお金は、一体どの税が使われているのかと興味をもち、改めて調べてみた。すると、私にとって身近な税である消費税が使われているということだった。年間の消費税の総額は、二一兆円。そこから高齢者の年金、医療介護や子育てを支援するために分配される。二一兆円という金額は、想像もつかないほど膨大な額だが、それだけたくさんの税金が、多くの人たちを笑顔にしているということを姉の手術を通して、実感することができた。

税を納めるということは、自分や、自分にとって大切な人、そして出会ったことのない誰かや、その誰かの大切な人を守る素敵なシステムだと思う。税を通しての幸せの共有。つながりの中から生まれるたくさんの幸せ。この幸せに感謝しながら、姉のように挑戦し続ける一日一日を過ごしていきたい。

ふるさと納税の本来の在り方

守谷市立愛宕中学校 3年 地引 仁太

ここ数年よくふるさと納税という言葉を目にするようになった。この仕組みは日本ならではの素晴らしいものだと思う。テレビ番組ではおすすめのお礼品などの情報がよく紹介されている。そのためふるさと納税といえば、お得な買い物ツールという印象が強い。しかし私はその伝え方は本来のふるさと納税の目的とは違うのではないかと思う。もともとふるさと納税が導入された目的は自分の故郷や応援したい自治体への貢献をという想いからだ。この想いを曖昧にさせないためにも納税されたお金がどのように活用されているかがもっと伝えられるべきではないだろうか。

私の家でもふるさと納税を活用し、各地方の特産品などをお礼品として受け取り、生活に役立てている。各自治体ではそれぞれの特産品や地元企業の商品を送るなど、できるだけ喜ばれるものをと知恵を絞っているし、その地方の宣伝をすることもできていると思う。私が住む市でもふるさと納税による収入が昨年、飛躍的に増したらしく、一市民として嬉しいことだと思った。

ところが、最近ではふるさと納税をする人が増えたために東京などの都市部では税収が減って困ると言って、お礼品の内容などを制限させようとする動きがあるようだ。しかし、ふるさと納税の本来の目的は都市部に集中する税収を地方に分散することだったはず。それにも関わらず、その目的が果たされ、都市部の税収が減り始めるとそれを制限しようとするのは何かおかしいと感じた。

「東京には、地方のようにお礼品に適した物がない。」と言う人をテレビで見かけた。確かに、農産物や海産物は地方より少なくても、都市部には地方にないものがたくさんある。私には言い訳のように感じられた。人口が多く、他の事業から十分な税収を得られる都市部とは違って、ふるさと納税の収入は地方の自治体にとって、貴重なものであり、知恵と努力のたまものである。そうして税収を得るためのツールを地方から取り上げてしまうのではなく、都市部にも何かできることがあると思う。

また、地方には高齢化による過疎化から税収が十分でない自治体が多く存在している。最近では自然災害に見舞われた自治体も多い。それらの地方への応援のためにふるさと納税を行っている人も多くいるはずだ。したがって、この問題は地方の視点から考えていくべきだと私は思う。だからこそ、特産品の情報だけでなく、得られた税収がどんなことに活用されたかがわかるような情報も是非積極的に発信して欲しい。

これらのことを踏まえ、ふるさと納税をする側も安易な買い物感覚ではなく、有効的な納税を心掛けるべきであるし、またそれが自分の住む自治体の税収に影響することであるということもしっかり考えなければいけない。

苦しむ人々を救うために

成田市立大栄中学校 3 年 大木 惟吏杏

「政府開発援助・ODA」

日本政府が実施しているこの活動を知っているだろうか。

学校で行われた租税教室を通し、税に興味を持った私は、税金の歳出について調べていた。国税庁のホームページを見ていた時、冒頭に書いた活動を見つけた。

「政府開発援助・ODA」とは、開発途上国の経済・社会の発展や福祉の向上を支援するために、先進工業国の政府が行う、資金や技術面での援助のことである。日本の「政府開発援助・ODA」の重要課題は大きく四つに分けられている。貧困削減・持続的成長・地球規模の問題への取組・平和の構築である。

税金の歳出といえば、社会保障や教育費などのイメージが強かったが、我が国のためだけでなく、世界中の国々のためにも税金が使われているということに驚きを感じた。

義務教育を受けている私たち中学生は、税金で作られているものに囲まれて生活している。教科書や教室の机、校舎の建設や生徒の教育費も全て税金で賄われている。私たちが学校に通うことができるのは、税金のおかげである。

だが、世界には、学校に通う事ができない子や、幼少時に学校に通うことができず、大人になっても基本的な識字能力を持っていない人が多くいる。さらには、飢餓や紛争、自然災害などで深刻な状況になっている国が多くある。日本はそのような問題で苦しんでいる開発途上国の人々を救うために「政府開発援助・ODA」は、資金援助だけではなく、小学校建設を含む教育援助、医療サービスなどのさまざまな取組を行っている。このような活動をするために、私たちが納めている税金の一部が使われているのだ。

日本では考えられないような事態で苦しむ世界の人々。こうした国々を救うためには、国際社会が協力し、支え合うことが大切であると私は考えている。貧困や紛争、飢餓などの問題を改善する第一歩となるのが税金ではないだろうか。私たちが納めた税金が世界中の人々を救うことができるのだ。

日本国憲法第三十条

「国民は、法律の定めるところにより、納税の義務を負ふ。」

納税の義務は、国民の三大義務の一つとされている。義務だから仕方なく税金を納めるのではなく、納めた税金が我が国の人々を、世界中のさまざまな問題をかかえている国の人々を救うことができるのだと理解してほしい。

私は税について調べていくうちに、関心がなかった頃と比べて、税への見方が変わった。関心がなかった頃は、税に良いイメージを持っていなかったが、それは税のことをよく知らなかったからだ気づいた。税のことを少しでも理解する人が増え、誰もが積極的に納税する日がくることを願っている。

私は今まで税についてあまり深く考えたことがありませんでした。考えたことがないというより、ほとんど知らなかったというのが本音です。税といえば、消費税をとっさに思い浮かべるぐらいで、あとはたまにニュースで酒税やたばこ税が値上がりしたとか、身近なものでは自動車税や所得税などを耳にするぐらいで、テレビを観ていても、大人が「税金が高い」とか「税金を取られて…」等、税に対してマイナスイメージを与えるような発言が多いと感じていました。しかし、この作文がきっかけで、私は税金がどのように使われ、なぜ支払わなければならないのかということを知りました。

国民の三大義務の中に「納税の義務」というものがあります。私達が納めた税金は、国民が安全で健康で豊かな生活を送ることが出来るように役立てられています。もしも税金がなかったら、いざという時に助けを求められる警察もいないし、火事や災害が起きても消火や救助活動をしてもらえません。道路や橋が壊れても直してもらえないし、信号が設置されなければ事故が多発します。また私達の生活に欠かせない水も、整備がされなければきれいなおいしい水を飲むことも出来ません。病院では莫大な医療費がかかり、学校で十分な教育を受けることも不可能です。そう考えると私達が生きていく上で、今まで当たり前のように公共サービスを受けたり、何不自由ない生活が成り立っているのは税金のおかげであり、そのほとんどが税金によって守られているということなのです。

税金のない世の中はとても不便で恐ろしく、犯罪が増え、常に命の危険にさらされることになります。そして街中はごみであふれ、不衛生な環境から病気になる人も大勢出てきます。考えただけでも恐ろしくなります。

私は税を知ることで、世間でのマイナスのイメージより、逆にプラスのイメージを持ちました。そして税金という制度にむしろ感謝するべきだと思いました。税金を正しく納めることで、国民一人一人がちゃんと恩恵を受けており、安心して暮らせるのも税金のおかげだと知ったからです。

私の家の近くには一本の細い川が流れていました。雨が降り続くと決まって川の水があふれ、道路は一面、海のようになっていました。現在は川の拡幅工事が行われ、以前のような被害はなくなりました。これも一人一人が納めている税金があるからこそ、工事が実現し、住民の不安も軽減されたのだと今までと違った視点で見れるようになりました。

自分にとってあまり関係がないと思っていた税金は、実はとても身近なものであり、誰もが税金という制度にもっと理解を深め、自覚するべきだと思いました。そして大切なこの国の発展と平和な社会を維持するために、税金を納め、税金に支えられ、皆で社会を支え合っていく必要があると強く感じました。

税金でつながる私たち

学校法人廣池学園麗澤瑞浪中学校 3年 齋木 祐舞

「税金さえなければな。」

私が、最初に税金に対して思ったことです。税金がなければほしいものをも
う少し安く買えるのに。私はそう何度も感じました。

私は、税金というものは、「迷惑な負担」のように感じていました。ところが、
そんな考えが、大きく変わった出来事がありました。

去年の冬、祖母が脳動脈瘤で入院しました。大きな病院で、何度もいろいろ
な検査をし、手術をしました。本当は、足の股関節の手術をするために検査を
受けていたのですが、その際に脳動脈瘤が見つかり、早急に手術することにな
ったのです。祖母は、いつ破裂してもおかしくないと言われ、不安にお
びえながら、何度も、名古屋の病院を行き来していたそうです。手術が無事終
わり、私はお見舞いに父母とでかけて行きました。大きな病院でした。たくさ
んの器具が祖母のベッドのまわりにありました。そしてさらに、その半年後、
股関節の手術をして一ヶ月近く祖母は入院しました。私は、二度目の手術の後、
祖母の体のことと同時に別のことが心配になってきました。

祖母は、祖父と二人で生活しています。もう、仕事をしていないので「年金
生活」です。こんな大きな病院で、二度の手術です。

「手術代や治療費が高額になるにちがいない。おじいちゃんおばあちゃん、大
丈夫かなあ。」退院してきた祖母に、こんなこと尋ねていいものか迷いましたが、
やはり、気がかりだったので聞いてみました。

「お蔭様でね。年寄りには治療費の負担が一部ですむのよ。こんなに大きな病
気をして、助けていただけるのはありがたいことだよ。」

確かに、祖母の手術だけに限らず、私自身も、この夏、体調を崩し、病院で
検査をしました。その時、母は、支払いをしませんでした。私の治療費も国に
援助して頂いているのです。すべて、多くの人が働いて、様々な形で納めてい
る税金のおかげです。今、祖母も私も健康で生きることができています。それ
は、税金という形で、支えて頂いて生きていることなのだと、痛感しました。
私の買い物で支払う消費税も、誰かの助けになり、また、私も助けて頂いてい
ることを知りました。税金はお金を納めるだけの行為ではなく、お互いを支え
合う手段なのだと感じました。

それ以来、私は消費税に対する考えが変わりました。

今、私は、買い物をして消費税を払うときに、

「このお金は、必ず誰かの役に立つ。私も、この消費税で、ほかの人につな
がっている。」

そう考えてちょっとうれしくなります。

「社会を守る武器、それが税金」

大阪市立宮原中学校 3年 目良 舞子

私が中学二年生の職場体験の時に、介護施設に行かせて頂き、七十代八十代の利用者さんとふれあう機会を得ました。また、二年前に亡くなった曾祖母が、デイサービスに週二回通いながら母の実家で祖母や叔母・母が介護をしている姿をよく見ていたこともあり、介護と税の関わりについて興味を持ち、調べてみようと思いました。

職場体験で私は、車椅子に乗っているお年寄りの方の介助や、お風呂の掃除、食事の配膳、お年寄りの方と一緒に体操したり、お年寄りの方の相談相手になったり、髪を乾かすなど、様々な仕事をさせて頂きました。その中で、高齢のため体が不自由になって、車椅子での移動が欠かせなくなってしまった方の思いや、家族と会える時間も少なくなって寂しい思いをする方など、年齢を重ねていくうちに、私達の生活と掛け離れていくような人たちの悲しさや辛さを感じることができました。

日本の医療技術は日々進化を遂げ、生活のリズムや食生活の改善により、日本人の平均寿命が年々高くなり将来的にも高齢者人口は増える一方のようです。そのため、いつかは自分ひとりで生活できなくなってしまう時があるでしょう。私達に必要な不可欠な社会というものを築きあげてくれた人たちに対して、豊かな老後生活が送られるように、みんなで守っていくことが、私達にとって最も大切な事だと私は思いました。そのために、私達を支えている最強の武器が「税金」です。

自宅で介護するにしても、やはりお金はかかります。ベッドやトイレのレンタル、車椅子など、また、病気になれば訪問医に来て診てもらわなくてはなりません。また、デイサービスなどの公共施設を利用するのにも、お金がかかります。母から聞いた話によると、これらのお金は、国の税金（公費）と施設利用者の介護保険半分ずつで賄われています。身内だけでなく、自然災害や事件、ゴミ処理など、様々なところで莫大なお金が必要になります。このようなところで、税金は私達を支えてくれているんだなと感じました。

みんなで守る、支える、それがこの世の社会だと思います。新しく来た世代が、古くからの世代を守り、それらをずっと受け継いでいくというのが税という存在であり、それが仕事なのだなと思いました。

今回、作文を通して私は、税の大切さに気づくことができました。いつか私も、未来の子どもたちやお年寄りの方々のために、これからの社会を守る武器（税金）を支えられる大人になりたいと、強く思いました。

市民の安全と税金の使いみち

広島市立安西中学校 3 年 原島 捺歩

私の家は、平成 26 年 8 月 20 日に豪雨による土砂災害で死者 77 人負傷者 44 人、そして多くの建物被害を出した広島県広島市安佐南区の近くにある。あの時の恐怖は今でも忘れられない。今迄に経験した事のない体験だった。

絶え間なく鳴り響く地雷のような雷の音と、電気もつけていないのに夜を昼間と勘違いさせる程の鋭い雷の光がすごく怖かった。私の家がある場所は土砂災害特別警戒区域である。外は避難する事さえも恐怖にさせる程の雷と雨の嵐だった為、どうしようかと両親は悩んでいる様だったが、結局避難は諦め、その夜は三人一緒に静かに寝た。私が気付いた時には朝になっていた。外はヘリコプターが飛ぶ音が鳴り響いている。その後テレビで私の住む近くで大規模土砂災害が起こった事を知った。そして、私の友達の家も車も被害にあったことも知った。数日後、私は母達と一緒に現地へボランティアに参加した。そこで私は災害の本当の恐ろしさを目の当たりにした。

広島は、テレビでもよく報道されていたように、真砂土が広く覆う県である。そしてこの真砂土は土石流や崖崩れなどの土砂災害を起こしやすい。広島市周辺にはどうしても人口が集中している為、山を切り開いて斜面の直下や谷の出口付近まで家が建っている。私の家も団地だ。周りも団地だらけだ。三年前の土砂災害でも実際は 170 か所土砂崩れがあったらしい。ここで私は疑問になるのだ。どうして広島の地形や地質がわかっているはずなのに防災対策として砂防ダムなどを作っていなかったのだろうか。災害が起きた後になって国や地方が沢山の税金を復旧や復興支援に使うより、市民の安心と生活を守る為に、防災対策に税金を使うべきではないかと思うのだ。

砂防ダムや堤防を作ることは、沢山のお金が必要になるというのは何となくわかる。でもきっと、三年前のような怖い体験をした人達ならば尚更だが、税金を立派な砂防ダムなどに惜しみなく使うことに対して市民は喜ぶのではないだろうか。新しい道や新しい施設もいいが、これらは市民が不安なく安全に生活できて、そして命があって初めて必要なものであるから、まずは市民の意見のもと、自然災害に対しての税金の使い方を見直していくべきではないだろうか。きっと砂防ダムを作る為の税金を別に少しずつ集めるとしても市民の反対はあまりないのではないかと思う。

これからの社会は少子高齢化の為、税金をいかに上手に使っていく事が大事になってくる。私達一般市民は、お金がない時はぜい沢品は買わず、本当に必要な物だけを買って生活する。これと同じように社会も、小さな国と国民の生活や命を守る為に、国民が本当に必要にしている事は何かということに対して、今まで以上に低い目線で耳を傾けてほしい。

雨の度に恐怖になる被災者の為にも、人間の幸せに生きる権利の為にも。

豊かな未来のために

いの町立伊野南中学校 3 年 井上 彩香

一〇五円だったものが一〇八円になった、そのたった三円の差でも当時小学生だった私には大きかった。「税金って本当に大切なものなかな。」そう考えたこともあった。

しかし、その考えは一枚のポスターによって覆えされた。「救急車はタクシーではありません。」そう書かれたポスターを、私は目にした。救急車にも税金が使われている、そのことを知ったのもこのとき。人の命を救う、なくてはならないものにも国民が国に払っている税金が使われていると知り、税金の重要性を感じた。「救急車」と聞くと私の祖父のことを思い出す。私の祖父も四年前救急車で病院に搬送された。翌日には息を引き取ってしまったが、救急車がもし税金ではなくてお金を払わなければいけなかったり、早く来ることができなかったりしていたらどうなっていたことかと思う。一秒でも長く一緒に生きたい、それが私たち家族の祈りだった。だから私の祖父の命をつないでくれた救急車、そして税金には感謝しかない。しかし、私たちのように祈るような思いで救急車の到着を待っている人がいる一方で、「どうせ税金なんだから家まで送ってよ。」「虫歯が痛むから来てほしい。」そんな軽い気持ちで 119 番通報する人がいるそう。その事実をポスターによって知ったとき、衝撃とともにショックが襲ってきた。そして今では憤りすら感じる。その人たちは自分の大切な人が救急車を必要としているときにそんな軽い気持ちの通報で救急車が遅れて来たとすれば、どう思うだろうか。「しょうがない。」と思うだろうか。いや、今の私のように憤りを感じるだろう。税金は納税者だからといって自分勝手に使っているものでは決してない。国民の義務として国民が必死に働いて納めている税金を無駄遣いしていいわけがないのだ。

三年後に迫った東京オリンピック。ここでも想像もつかないような金額の税金が使われる。開催が決まったときからとても楽しみにしているオリンピックだが、税金の無駄遣いはしてほしくない。税金の無駄遣いをしていると、国民の税についての関心が薄れたり、身近にある税のありがたみに気付けなかったりする人も出てくると思う。今までの私のように税金に対してマイナスなイメージを持つ人が増えてしまうのではないだろうか。税金の重要性を知ってもらうためにも税金は慎重に扱ってほしいと思う。そして、税の大切さを未来へ伝え、つなげていく使命は今、私たちにある。私たちの命や健康を守り、豊かな生活の土台となる税金。そんな縁の下での力持ちについてまずは私たちが正しい知識を得ることが豊かな未来を創る第一歩になると私は思う。

私が住む島原半島には雲仙国立公園があり、日本初の世界ジオパークに認定された。

私の父は雲仙温泉で観光業を営みながら、雲仙や島原半島の歴史・文化などを紹介する観光ガイドの仕事も行っている。私も父に連れられて三才でガイドデビューをした。自分には、当時の記憶や思い出はほとんどないが、私はお客様と一緒に手を繋いで歩き、島原弁で会話したり、蟬の抜け殻を見つけ手に取って、お客様を驚かせたり楽しませたりしていたらしい。

このような生活環境も影響し、私は小学生の頃から観光業に大変興味を持っている。蕎麦打ち体験が出来る、しょうゆソフトクリームが食べたい、冬の花火大会がある、などと聞くと、そのイベントに参加している。

私はイベントの費用はすべて、主催者の皆さんが準備して運営されているものだと思っていた。しかし、スタッフの方から、「このイベントは自己資金以外に国と地元自治体から税金をいただいて運営しています。大切に有効活用しないね。あなたのお父さん、お母さんが払った税金も入っているから。」と聞かされ驚いた。まさか自分たちが楽しませてもらっている地域のイベントに税金が活用されているとは知らなかった。

私が聞いたイベントは、「二十一世紀街づくり助成金」という制度が利用されていた。調べていくと環境保全や地域活性化の目的で入湯税、宿泊税など観光税なるものがいくつもあった。

私は将来、島原半島らしい食材を活かし、島原ならではの料理を創作したい。料理を堪能していただき、ゲストをおもてなしすることができる料理人になることが夢である。

他にも、地元を元気にするためには、観光振興を目的とした仕組みづくりや組織が必要だと考えている。

地元の環境保全や生活環境維持、地域活性化等を推進する組織を立ち上げ、組織として、私自身もしっかり収益をあげ、税金をきちんと納めようと思う。その税金が地域活性化や安心安全な暮らしの一助になるように。

今回、税金はさまざまな形で活用されていることを学んだ。納税の大切さや必要さを知ることができた。「税金は国民を支えるものだ」と思う人は大勢いる。しかし地域のイベントや町おこしにも活用されていることは、あまり知られていない。

私も夢を実現し、地元を元気にするために近い将来、このような制度を活用させていただくかも知れない。そして、このような制度もあることをもっとたくさんの人たちに知ってもらい、活用して多くの地域が元気になり身も心も豊かな国になるといいなと思う。

最後に自分も税金を義務という立場からではなく、自主的に気持ちよく納税できる大人になりたい。それが私たちの暮らす地域の未来の子供たちの笑顔に変わるのだから。

ぼくの命税金にあり

鹿児島県立楠隼中学校 2 年 伊藤 瑠星

皆さんは税金に助けられたと感じたことはありますか？僕はこの世に誕生した日から税金に助けられています。

平成十六年二月十六日。二卵性双生児として二千二百七十八グラムで生まれました。低体重、呼吸障害、低血糖という症状があったため、母の胸に抱かれることなく、NICUに運ばれました。小さな手には点滴の針が刺され、保育器の中で二週間過ごしました。双子の兄も同じ状態でした。その後あらゆる検査を受けて、ようやく無事に母の胸に抱かれることになりました。退院の日、病院に支払った医療費は百万円を超えていたそうです。しかし、子ども医療費助成制度と高額医療制度のおかげで大半が戻ってきたと聞きました。

ではもし、そのような制度がなかったらどうでしょうか。母は安心して僕達を産むことができたでしょうか。僕は手厚い医療を受ける事ができたでしょうか。高額な医療費がかかるのであれば、出産二ヶ月前から管理入院はしていなかったし、低体重児が受ける聴力検査や眼底検査などは省いていたかもしれない。耳が聴こえているだろうか。目は見えているのだろうか。と不安な日々を過ごしていたかもしれない。と母から聞きました。だから今、元気に生きている僕がいるのは、税金のおかげなのです。

今日、日本の税金の使い道で一番に上げられるのは、社会保障関係費です。僕たちの生活を守るためのもので、医療・年金・介護・生活保護などに関わるものです。おかげで、病院に行くこともできるし、病気で働けなくても最低限の生活保障もしてもらえます。また、老後も年金をもらえるおかげで安心して長生きができます。つまり、税金は命をつなぐ糧とも言えると思います。

ただ日本は少子高齢化社会へと突き進んでいます。故に社会保障制度をもっと充実させていかないとはいけません。そのために僕にとって一番身近な税金である消費税が、八パーセントから十パーセントになる予定だそうです。そのことを聞いた時は愕然としました。僕の少ないお小遣いでは、一円も貴重です。だから、消費税の存在を疎ましく思いました。しかし、税金の勉強をする上で、自分が税金によって助けられたということを知り、税金を納めることで恩返しをしたいと思います。僕が支払った税金で一人でも多くの人を支えることができたら報われます。

これから、税金に支えられ、税金を支え、税金と僕たちは共存していることをしっかり理解し、税金のバトンをつないでいきたいと思っています。

私たちの暮らしを豊かにする税金

沖縄県立与勝緑が丘中学校 3年 山田 朋海

甲状腺機能亢進症。そう診断されたのは、私が小学6年のとき。病院の先生に、「完治するまではとても長い時間がかかるかもしれないけれど、ゆっくり様子をみていこうね。」と言われたのを覚えている。それから約2年がたった今、良くなったり悪くなったりを繰り返しながらも、健康に毎日を暮らすことができています。だが、2年間も治療を続けていると、相当な医療費がかかってしまう。それを今まで支えてくれたのが、小児慢性特定疾患の医療費助成制度だ。長期にわたり治療が必要な18歳未満の児童が対象の制度で、医療費の自己負担額が2割になるというものだ。この制度のおかげで、病院での検査や適切な診断、上等な薬の処方をしてもらうことができています。その自己負担額以上の医療費は、国のお金、税金で賄われている。私の身近なところで、とても大きな税金の力がはたらいていたのだ。

今まで私は、税金のことについて知らないことだらけだったし、知ろうとしなかった。なぜなら、税金というものは私たちとは程遠い存在で大人になってから関わってくるものだと思っていたからである。しかし、夏休みの宿題でこの税の作文を書くには、税のことについて少し学ばなければならない、そう思い、税務署を訪ね、税のことについてたくさんのお話を聞くことができた。この機会があったからこそ、自分のために使われている税金の大切さに気づくことができたし、税金のおかげで今の健康な暮らしがあるということも知った。そして、自分の中にある税の悪いイメージがうすれ、税に関して興味を持つことができた。

みなさんは、税についてどんなイメージを持っているだろうか。悪いイメージを持っている人も少なからずいるだろう。テレビのニュースや新聞記事に載るのは、「消費税 10%に引き上げ」「税金の無駄使い」「税金滞納問題」など大半が悪いニュースである。しかし、税金というのは、私たちの身の周りの教育、医療・福祉、公共など、様々な場面で私たちの暮らしを豊かにするために使われているのだ。

消費税引き上げの問題も、引き上げられた分は、私たちの暮らしのためにサービスとして、いろいろな形で提供されていく。

これからの税についての課題や問題点は、少子高齢化が進むにつれ、とても厳しいものになっていくだろう。そのときに、私たちが税についてしっかりと理解し、税金の大切さや重要さを次の世代に伝えていかなければならない。

私たちの暮らしを豊かにする税金、逆を言えば、税金を払っているから私たちの暮らしは快適なものになっていると言えるだろう。税には様々な問題もあるが、私は税を前向きに捉え、これまで受けてきた恩恵をしっかりと返えしていけるような、納税者になりたい。

税金という名の募金

根室市立厚床中学校 2 年 久保 智基

みなさんは「税金」と聞いて、何をイメージしますか？

私は正直、あまり良いイメージをもっていませんでした。しかも、「そもそも税金って何に使っているの？」や「何で払わないといけないの？」という初歩的な事を知らずに、先入観からマイナスイメージをもっていたのです。しかし、一昨年(2019年)の4月の消費税増税をきっかけに、「なぜ税金を上げなければならない状況なのか」「増税することで何が変わるのか」などの事に興味を持ち、調べてみたいと思うようになりました。そしていざ調べてみると、税金は私が思っていたよりも身近な所で使われていたのです。道路や図書館、教室や教科書なども税金が使われています。この事を知って私は税金に対して一気に親近感が湧き、考えを改め直して大切であり、なくてはならないものだと感じました。

私が住んでいる市である「根室市」では、平成二十八年度にふるさと納税の寄付額が、三十三億円超で全道一位となったのです！そのおかげで根室市では、フットパスの整備にさらに力を入れて観光客増加を図ったり、北方領土の返還運動事業を強化することが出来たり、医療設備の買い替えなどをすることができたのです。この話を聞いた時、私は、納税してくれた皆さんの善意によって、私のふるさとが活性化しているという事実にとっても嬉しくなりました。そしてそれは、消費税などといった国に対しての納税も同じように、日本という私達が暮らしてお世話になっている国を活性化させるための募金だと私は考えています。例えば消費税でいえば、百円のものを買った時に、レジの隅にある募金箱に八円を入れる、といった感覚を持つことで「義務だから税金を払っている」ではなく、「国に対しての善意で税金を寄付している」という思いをもつことが出来ます。

今まで私達が体験してきた主な税金は、消費税だけでしたが、大人になるにつれて様々な種類の税を経験します。そんな時に「納税額が多くなって嫌だな」と思わず、むしろお世話になっている地域や国を盛り上げることに自分は貢献することが出来ているんだ、と思い、前向きに考え、それを発信することで少しでも「税金を取られる」という考えの人を減らせることにつながると信じて、税は善意によってできている、と強く訴えていきたいです。

「日本」というチームの一員として

大館市立下川沿中学校 3 年 藤岡 快皇

「私たち日本人は学校に通うのが当たり前でも、アフリカの子どもたちは小さい頃から大人と一緒に働くのが当たり前なんです。」

発展途上国の中でも多くの問題を抱えるアフリカについて学習した時間、私は先生の言葉に衝撃を受けた。資料には、毎日命がけで働く子どもたちの姿が載っていた。今にも崩れそうな大きな岩の下で、目のくらむ高い崖の上で、長い時間水中で働く子どもたち。これを知ったとき、どれだけ私たちが恵まれているかということに気付かされた。そしてその環境を作ってくれているのが税金なんだと。私たちが住む日本とアフリカを比較するだけでも、どれほど税金が大切なものであるかということが分かった。

私は小学生の頃から中学三年生になる今日まで、野球に全てを捧げてきた。引退した今、今度は高校で甲子園を目指したいと考えている。父はそんな私を支えるために夜遅くまで働いた上に、時々野球の指導もしてくれている。野球の試合をするには実に多くのものが必要で、さらに大会ともなるともっとたくさんの環境が必要となる。球場の様々な設備、審判、スタッフなどなど、このような一つ一つにも税金が使われているのだという。そして、私の父のように働く人たちをはじめ多くの人々の納める税金によってスポーツ施設は整備されているのだ。いわば、税金を納める全ての人が、一つのチームになって支え合っているのだ。納めた税金は少なからず自分に還元される。そればかりか必ず誰かの役に立っている。私がこれまでに納めた税金も誰かの役に立っているのかと思うと少しうれしくなる。

しかし、一方でこんな話も聞く。「生活保護を受けている人がパチンコをしているっておかしくないか。」ある日、新聞を読んでいた父がこう言っていた。確かにそうだと思う。一生懸命汗を流して働いた人のお金をこんな娯楽に使うのはあまりにも失礼だと思う。昨年、「パナマ文書」の流出で、「脱税」に関するニュースをよく耳にした。聞く度に「税のあり方」や「税を納める理由」をもっと多くの人に考えてもらいたいと思った。

少子高齢化が進む日本では、働ける世代が少なくなり、税としての国の歳入は減るが、お年寄りのための社会保障関係費は増えるため、財政は苦しくなっていく。租税の多くを占める消費税も、8%では間に合わず、さらに高くなるであろう。それでも、私が大人になったら早く税金を納めたいと思う。これまでたくさんの方々の力のおかげで恵まれた環境で暮らすことができた分、今度は自分が誰かの役に立ちたい。自分がそうであったように、子どもに税金を納める理由を聞かれたら迷いなく答えられるようになりたいと思う。そして、日本が一つのチームとなって、誰もが「幸せ」だと思える国になってほしい。

税金に助けられたこと

栃木市立藤岡第二中学校 1 年 早乙女 愛佳

「学校が水没しちゃったって。」

その言葉を聞いた時、心配と不安で胸がいっぱいになった。

平成二十七年九月の関東・東北豪雨により、各地で大規模な水害が起きた。その時私は小学五年生だった。学校は一メートル以上水没し、休校となった。学校の周辺は一面湖のようになり、通学路も通行止めになっていた。二学期が始まって一か月もたっていなかった。いつまで休校なのか心配していたが、今、私が通っている近くの中学校の教室を借りて授業ができることになった。ほんの数日間の休校であったが、みんなと顔を合わせることができ、安心した。

それから一か月半の間、中学校で生活させてもらった。小学校に戻れる日が決まり、中学校の皆さんへの感謝の気持ちがわくと同時に、小学校が元のように直っているか心配になった。

一か月半ぶりに小学校に戻ってみると、昇降口や廊下の床がとてもきれいになっていた。そのことを家に帰って親に伝えたと、直した費用は税金から出ていることを教えられた。その他にも、水害によりくずれてしまい、通れなくなってしまった通学路の歩道や、床がめくれ、使えなくなっていた体育館も、税金によって急ピッチで工事が進められ、きれいに直された。

水害から半年後、税金のおかげできれいになった体育館で卒業式が行われた。学校中の皆が感動した。同時に、税金をきちんと払ってくれた多くの人たちと、集まった税金を私たちの学校を直すために使ってくれたことに感謝をした。その後開催された「感謝の会」では、栃木市長さんや教育長さんにも私たちの感謝の気持ちを伝えることができた。

このように、私たちの便利で安全な生活は、税金によって成り立っているといても過言ではない。だから、私たちは、税金のありがたみをもっと知るべきだと思う。

税金と一言で言っても消費税、所得税、固定資産税など様々な種類の税金がある。道路や学校を作ったり、生活の安全のためや、福祉や介護サービスのためなど、使い道も様々である。どれも、人々がよりよい生活を送るために欠かせないものであり、税金に頼らない日はない。

現在の日本は、急速に少子高齢化が進んでおり、納められる税金も減ってきていると聞く。年金や医療費が増加するのに、それを負担する世代が減少している。私は大人になったら税金を「払う」のではなく、自分たちの生活のために使われるように、「預ける」つもりで納めたい。そのために今の私にできることは、たくさんの税金を納められる立派な大人になれるよう、しっかりと学び、多くの知識を身に付けることだと思う。それが、今までお世話になった社会への恩返しだと思う。

救急車と税金の利用

小平市立小平第三中学校 3 年 小海 一樹

昨年、私の家に一本の電話が入った。その時私は風呂に入っていたためその電話は母が出た。なんの電話だろう、と思いながらのんきに湯につかっていると、だんだんと母の語気が強まっていった。何事かと思い聞き耳を立てていると、母は「自分で救急車呼べる？」と繰り返していた。ただごとではないと思うすぐに風呂を上がった。すると母は家の電話を持ったまま、携帯電話を手にとった。そして、それでどこかに電話をかけているようだった。そこで聞こえてきた言葉は「うちの主人が脳梗塞の症状で路方に車をとめているのですが…」という危機迫るものだった。それを聞いた瞬間、私は大慌てで外へ出る準備をした。場所が分からず救急車を呼べなかったため、父の言ったこと手がかりに父を探した。幸いすぐに見つかり、救急車もすぐに来てくれたため、大事にはいतरなかった。その後も特に問題はなく、ほっとした。

しばらくして、新聞であるニュースが目にとまった。それは、救急車の出動件数が増えて、今の救急搬送体制を維持するのが難しいというものだった。その理由として高齢化が進んだことが一因であるが、不用な出動要請が増えていることが大きな要因だとあった。小さなケガでも「納税しているのだから使える」という軽い気持ちで救急車を呼び、まるで病院までのタクシーのように使う人がいるという。また、それによって救急車の到着が遅くなり、助かる命が助からなかったというケースもあったようだ。そして、そんな不要不急の救急要請が年間約七十五万件の救急出動の内、半数以上を占めている。（「日本経済新聞ウェブ刊」より）

僕の父の場合には一一九番通報をしてからすぐに救急車が到着してくれたため何事もなかったが、もし少しでも救急車の到着が遅れていたら助からなかったかもしれないと後からお医者さんに言われた。それを聞いたとき、私は本当に怖かった。

また、救急車一回の出動で約四万五千円かかるとされ、日本ではその費用をすべて税金でまかなわれている。タクシーのかわりとして使う人がいるのならその人にとっては無償だとしても、その費用は国民全体で使うべき「税金」から払われていることになる。

だれにでも消防や救急などのサービスを受ける権利があるとはいえ、それをむやみやたらに使っていいものではない。税金とは個人で使用するためのものではなく、一般の人々の安心・安全な、また、より快適な暮らしができるようにするためのものだ。

私は、自分の身近なところに使われている税金に感謝するとともに、正しく公平に使うものという意識を高めていきたい。

私は小学校高学年のとき、初めて税についての授業を受けました。そのとき配布された世界各国の消費税率を比較した資料を見て、驚いたのを今でもよく覚えています。理由は、デンマークの消費税率が二十五パーセントと高く、対してカナダは五パーセント、国によって消費税率が大きく異なっていたからです。

税に関してもう一つ、祖父母の海外旅行の話聞いて驚いたことがあります。祖母がイギリスを訪れた際、急な体調不良となり救急車で搬送され、治療を受けたそうです。しかし、医療費の負担はなく、外国人でも福祉保障の対象となっていたそうです。対照的にドイツを訪れた際、祖父の友人が体調を崩して病院に搬送されたときは、日本円にして十万円の負担が必要となったそうです。

私はこれらの話から、国によって税率に差があって、それによって社会保障の内容や社会の仕組みに違いができていたと感じました。そして、なぜ、国によってこんなに税率に差があるのか疑問に思い、調べてみました。

まず、消費税率が高いデンマークやノルウェーなどの国では、税金が高くて豊かな生活を送ることができます。例えば医療費や学費は無料で、ほかにも様々な補助金が出ていて、あらゆる人が手厚く社会保障を受けることができます。税率が高い国ではその税を最大限にいかして、国民全員で豊かな社会を築く、という意識が強いと思います。

次に、カナダや台湾といった消費税率が低い国では、消費税率が低い理由の一つとして国民の所得に格差が生じていることがあげられるそうです。消費税は誰もが納める税です。消費税率が高ければ、国民の負担が増えて貧しい人は生活が苦しくなります。カナダは消費税率が低い代わりに、外食税などの裕福な層を対象とした変わった税で補うなどの工夫をしているそうです。消費税率が低い国ではその人の所得と釣り合う金額の税金を納める方法が行われているのだなと感じました。

そして、日本の消費税の場合です。消費税の主な使われ方は、公共施設の維持管理や、福祉・教育などの補助です。日本の消費税率は近いうちに再び増加します。それは少子高齢化に対応して、年金の負担や福祉、医療の充実が必要とされているからです。

消費税率の高い国、低い国、そして日本。なぜこのように違いがあるのか調べて、気が付いたことがあります。それは税金が政府の方針や経済、そして国民一人ひとりの意志と深く関係があるということです。これからも日本の社会は成長し変化し続けます。そんな社会に対応して、税金の仕組みも変化していくことでしょう。それをきちんと理解し税を納めることが私たち国民の義務であると思います。

みんなの税金で、成長していく日本を創っていく、素敵なことだと思いませんか？

一冊の大事さを伝えよう

静岡市立清水第七中学校 1 年 村井 夏海

私は、本が大好きだ。学校の図書館で借りたり、市立図書館へ行って読んだりもする。ある時、雨の降っている日に図書館へ行こうとしたら、母に

「その本はみんなのお金で買われているんだから、扱いには気をつけなさい。」

と言われ、はっとした、図書館は公共施設だ。本はもちろん、エアコンやいすといった設備も、税金でまかなわれているのだろう。だとしたら、それらのものをもっと大切に扱わなければならないのではないか。と私は考えた。そのことをもっと多くの人に実感してもらうには、どうしたらよいのだろうか。

調べてみると、私たちが当たり前のように使っている公共物には、たくさんの税金がかけられていることがわかった。本や建物も、私たちが日々払っている消費税や所得税の一部を使ってできているものなのだ。館内で飲食禁止などの貼り紙は、税金で買われた物を大切にしようという意味があったのだ、と私は今回改めて気づいた。

でも、もし本やいすなどの公共物を破損してしまったらどうなるのだろう。実際に、全国の図書館で本のページが破られるという事件が数十件起きている。前に、私の借りた本が水ぬれでにじんでいて、返却する時に館員さんに言うと、

「水でぬれたりしても言わないで返しちゃう人が多いんですよ。」

と悩んでいた。それを防ぐためにポスターや見本の載った貼り紙もあるのだが、なかなか減らないという。でも私は、それはいつか自分に返ってくるのではないかと思う。破損した物があれば、ひどければもう一度買わなければならない。それは税金によるものなので、こういったことが増えれば増えるほど、税金が高くなるのだ。消費税率が上がり、自分が困るのは目に見えている。それに、ぬれたり破れたりした本をそのまま返せば、誰がやったか分からなくなり、関係のない人たちまで疑われてしまう。そうなれば、周りの人も迷わくするし、自分も後悔する。こういうことを防ぐためにも、公共物は大切に扱わなければならないのだ。

小学生のときの租税教室のように、税金を身近に感じられる行事などが、今の私たちにはあまりない。そこで私は、今の学級委員の立場を利用して、生徒会本部に税金についての議題を提案してみようと思う。そうしてアンケートを行ったり、税に詳しい方をお招きしてお話をうかがったりすれば、税への関心も高まるはずだ。私たちが当たり前のように使っている公共物を大切に扱ってもらうには、税金を身近に感じる事が大切だと私は考える。そうすることで、税があることにありがたみを感じ、また、利用のマナーを守ることの重大さを実感できることだろう。

国の借金が1053兆円もあるらしいと聞いて驚いた。今年の春、友人がネットでニュースを読んでいたところ、「国の借金1053兆円、国債残高過去最高に」という見出しを見つけてびっくりし、私に「日本って借金千兆ぐらいあるらしいぞ」とメールしてきたのである。調べてみると、歳出、国が一年で使うお金のことだ、が税金など国が一年で得るお金である歳入でまかなえなくなって、「国債」という国の借金を発行して何とか補っていたのだが、毎年そのような状態が続いて借金が積み積みこんだ莫大な額になってしまったらしい。そのニュースには、「高齢化の影響で年金・介護・医療などの社会保障費が増加したのが原因」と書いてあったが、私は失礼なことに国が若干無駄使いしているのではないかと考えた。

そこで日本と他の国を比較したいと思い、資料を探すと、「OECD諸国の政府支出（対GDP費）」というデータを見つけた。OECDとは先進工業国の経済協力機構で約30ヶ国が加盟している。このデータを見れば、他の先進国と日本を比較できるだろうとそれを見ると、なんと日本は28ヶ国中24位、即ち4番目に支出が少ないのだ。では税金についてはどうなのか、租税収入についてもOECDの中で比較したデータを見ると今度は日本は下から2位だった。

これらのデータから考えると、日本は経済規模の割に支出が少ない、つまり全然無駄使いなどしていないのに、単純に税収が少なすぎるために赤字になっているのだ。これでは増税しても仕方がない気がする。

日本と同じ程の割合を医療費に費やしているイギリスを見てみると、日本と同じ位充実した医療を提供しているが、税金はとても高く、例えば消費税は20%もあるのだ。このように税金をある程度高くしないと充実した医療は提供できない。

だがしかし、いざ消費税が20%に上がったと考えてみると、うまい棒は12円になるし、百円ショップは百二十円均一になるし、千円の品物に対しては二百円もの消費税を払わなければいけない。やっぱり増税は遠慮したいな、という気持ちになってくる。しかしこの国の未来を考えるならそれを我慢しなければいけない。もしこのままいくと、未来の世代にはより莫大な借金が残るということになる。今のことだけでなく、未来のことまで考えなければならず、もし将来の国民によりよい生活を送らせたいなら、今の世代で税の問題を解決すべきだろう。

社会保障とは、国が国民の最低限度の安心・安全を保障するシステムで、税によって担われている。もし私たちが高い税金を払ってでも困っている他の国民を助けたいという思いやりの心を持てば、日本は良くなっていくだろうし、私自身も税金のように人を支えることのできる人間になっていきたいと思った。

「暑い。本当に暑い。いつになったらエアコンが付くのだろうか。」

僕がいつも車イスサッカーの練習をしている体育館にはエアコンがない。夏は灼熱で、冬は凍えるように寒い。健常者の卓球チームやバドミントンチームもこの体育館を利用しているが、夏はみんな汗をかいてうちわも手離せない。強い冷風機も二台あるが、一台は故障していて使えない。すぐにエアコンを付けてほしいのだが、そう簡単には付かないようだ。体育館などは公共施設のため、エアコンを付けるには多くの税金が必要になるからだ。その税金を使うには、議会での話し合いも必要になってくる。

税金と言えば、僕も小さい頃から税金のお世話になってきた。障害者手帳を受け取ったときに福祉事務所の担当者の方が、

「福祉サービスを最大限利用してください。」

と言ってくださったそうだ。母はその言葉がとてもありがたかったと言っている。体の成長に合わせて、車イスも作ってもらえた。日中一時支援サービスも受けることができた。僕が気が付かないうちに税金が使われていた。

僕の車イスサッカーのチームのメンバーは全員で九人。みんな体が不自由で、いろいろな福祉サービスを利用しながら生活している。そのうち七人は社会人だ。チームのリーダーは首の大ケガが原因で手も足も動かないので、電動車イスの操作には顎を使っている。操作のコントローラーを、顎の下位置に取り付けている。スマホでメールをするときは、口に短い棒をくわえて文字を打っている。もともとは健常者だった。病院のベッドで寝ていて何もできなかったときは、病室の天井を見つめて一生を過ごすのだと思っていたそうだ。それが、リハビリ施設を紹介されて入所したおかげで座れるようになり、介助者がいれば好きな所へ出かけられるようになり、そうして車イスサッカーにも出会ったと言っていた。また、仕事も紹介してもらい仕事をしているそうだ。

リーダーも福祉サービスが行き届いていることに、とても感謝している。税金のおかげで福祉サービスが充実していることを僕は、改めて感じた。

この作文を書くために、インターネットで税金の流れについて調べた。福祉サービスを含む社会保障の財源が消費税などであることがわかった。平成三十一年十月に消費税を十パーセントにすると安倍首相が表明していることもわかった。僕は、消費税を十パーセントにすることに賛成している。むしろ、消費税を十パーセントにするだけでは、足りないと思う。海外では、消費税がもっと高い国があるみたいだ。僕はまだまだ税金のお世話にならなければならないが、体が不自由でも将来は仕事をして、税金を納められるようになりたいと思っている。

税を身近に考えよう

高松市立高松第一中学校 3 年 小西 涼菜

「鳥取県の大山町から、梨が届いたわよ。」

我が家には、全国の至る所から、おいしいフルーツやお肉などの名産品が届く。父が始めたふるさと納税の返礼品だ。私はこれまで深く考えることなく、その恩恵にあずかってきたが、先日、テレビ番組で、ふるさと納税のウェブサイトを立ち上げた社長さんのお話を聞いて意識が変わった。それは、ふるさと納税は税金の使い道を選べる制度であり、納税する一人ひとりの意志が地方に届き、地域の課題解決に貢献しているというものだった。実際に財源不足で困っていた地方の自治体が、全国から寄せられる寄附を、子育て支援や高齢者ケア、環境保全、震災復興などに役立てて、地域が活性化している様子も報告されていた。私は、おいしいものを食べられるから、ふるさと納税っていいくらいに考えていたので、少し恥ずかしく思った。

税金と聞くと、「知らず知らずにとられるもの」「負担」というマイナスのイメージをよく聞くが、それは、税が何のためにあるのか漠然としていて、納得できていないからなのかもしれない。そこで、私は身近に税について考えてみることにした。

私は吹奏楽部でフルートをしているが、部活で毎月集められる部費が税金に似ていると感じた。だから、税金を部費、お金の使い道を決めている国会議員を顧問の先生、国民を吹奏楽部員として考えてみた。私はこれまで部費を払っているのに、自分のパートに使ってくれないことに疑問を持っていた。フルートパートのメトロノームはいつも後回しで、パーカッションには、たくさん新しい楽器を買っている気がしていたのだ。しかし、よく考えると、部活全体として、パーカッションにいろいろな音が必要だという判断で部費が使われていた。私は、限られた金額の中で優先順位があり、みんなでいい音を奏でるために、先生はそう判断したのだと納得した。パーカッションの部員だって、大きな楽器を自分で買うことは無理だから、みんなで負担し合う仕組みが必要だ。

税金についても同じことが言える。今日の税は、所得の再配分という役割も持っているということだ。つまり、病気の人や働けなくなった人も、すべての国民が生活に困ることなく、安心して暮らしてゆける日本であるために税が集められ、社会全体の中で配分され、使われているのだ。

納税を考えるということは、日本の社会をどう運営するか考えることに繋がっている。だからこそ、これからの社会を担う私たち世代は、税が有効に使われているか意識する必要があると思う。税金を納める法律を作るのは国会議員で、議員を選ぶのは国民である私たちだから政治に関心であってはいけない。

私は今、守られた社会の中で、安心して暮らせていることに感謝して、将来の日本社会に貢献できる人になりたい。

外国への援助、あなたは どう 思いますか。

長崎市立日見中学校 3 年 松尾 和香

「税」と聞いて、何を思い浮かべますか。私は一番身近な「消費税」という言葉が思い浮かびました。しかし、税には他にもいろいろあり、使い道もよく知らないため、税の種類と使い道について調べてみました。

まず、税には消費税の他に所得税や住民税、法人税などがあります。聞いたことのない税が数多くあり、また、それぞれ税を納める場所が異なっています。例えば所得税や消費税は税務署、住民税は区役所や村役場に納めます。

次に税の使い道についてです。国民が納めた税金は公的サービスで多く使われています。例えば、医療、年金、介護、福祉などで、病院で受診した時の料金も一部は税で補っているのです。このように私たちの身近なところでたくさんの税が使われています。その一方、外国への援助のためにも税金が使われています。いわゆる政府開発援助、ODAです。発展途上国へただお金を貸すだけではなく、ダムや道路、病院を造ったり、薬や注射器など物資や技術面で援助しているのです。私たちが納めた税金が世界でも使われていることに驚きました。

私は三年間タイに住んだ経験があります。私がいる間に、タイの空港は新しくなりました。初めて空港を訪れた時、父から、

「この空港建設には日本の援助が関わっているんだよ。」

と聞き、驚いたことを覚えています。また同時に、なぜ日本がタイに援助するのだろうと疑問にも思っていました。税のことについて調べた今、改めて日本の税金が世界でも有効に使われていることに感動しました。

しかし、国内では、このODAに対して批判も少なくありません。日本の税金は日本国内で使うべきだという意見などです。そう思うのも分からなくはありません。しかし私は、発展途上国への援助はやはりした方がいいと思います。調べてみると次のようなことが分かりました。第一に資源の確保や環境保全に役立つことができるということです。衛生事情の悪化や環境汚染などの問題は、その国だけの問題ではありません。世界がグローバル化した今、国境を越える世界全体の問題として日本も取り組む必要があると思います。そして何より、日本の援助によってでき上がったものが大切に使われて、必要な存在になる。大切な命を助けることができる。そのように世界に貢献している私たち日本人を、誇らしく思います。

今回改めて税金のことについて様々なことを知ることができました。そして、一人一人が納めている税金が集まり、大きなものとなってその一部は世界へ渡り、笑顔になってくれる人がいることに気付かされました。私が大人になった時、快く税金を納めることができる納税者でありたいと思います。それと同時に日本が税金を大切に使える国であってほしいと心から思います。

私の生活を支える税

熊本県立玉名高等学校附属中学校 3年 本田 沙也花

私は幼い頃から体が弱く、小学校の中学年までは週一度の通院が欠かせなかった。医師の診察を受けたり、薬を処方して貰ったりすると、多くの医療費がかかってしまい、家計には痛手である。

しかし、私の住む玉名市には「子ども医療費助成制度」があり、玉名市に住民登録していて、健康保険に加入している中学卒業までの子どもの医療費を市が全額負担してくれる。この制度があるおかげで、多くの子どもたちは治療に専念できるのである。

私も今までお世話になってきたが、こんな制度があると知る前は苦い粉薬を飲み残してしまったり、塗り薬を塗り忘れて大量に余らせてしまったりしていた。

「子ども医療費助成制度」は税金で賄われているため、私たちは無料で病院にかかることができる。そのことを知らなかった幼い私は、いわば税金を無駄にできてしまっていたのである。「子ども医療費助成制度」を初めて知った時、母が「苦くても薬はきちんと飲みなさい」と言うもうひとつの理由が分かった気がした。

また、同じく税金が使われているもので、「救急車を有料化するかどうか」という問題が物議を醸している。こんな問題が出てきたきっかけは、命を救うために存在している救急車をタクシー代わりに使う人が居たり、搬送された人の症状の多くが入院を必要としない比較的軽度なものであるということだった。

外国では救急車が有料である場合も珍しくないが、私は有料化に反対だ。本当に治療を必要としている人が、救急車が有料であることを理由に利用できず、命を落としてしまうことはあってはならないと思うからだ。

今でこそ普遍的なものになっているが、病院に行けて、薬を貰えるということは非常にありがたいことだ。同じように、皆から集められた税金が、私たちの健康のために使われていることも、ありがたいことだと思う。

消費税が引き上げられる度に嘆く私たちだが、その一方で税金の存在に甘えてはいないだろうか。他の人たちが汗水垂らして働いて得た給金から、税金は払われているのである。そんな大切な税金を、無駄にしたり軽んじたりしてはならない。

昨今は年金制度の崩壊も危惧されている。少子高齢化に伴い、高齢者ひとりに対する働き手も減っているためである。納税者がこのまま減り続けてしまえば、私たちが今当たり前に受けている福祉制度は利用できなくなるかもしれない。

私たちは税金を通して、社会の中で見えない誰かを支え、また支えられている。納税することの意味と、税金の在り方を、今一度考えてみる必要があると思う。それが現在抱えている年金問題をジンテーゼすることに繋がり、ひいては日本の未来のためにもなると私は考える。

私は、中学一年生の時に社会保障制度という言葉を知りました。そのきっかけは祖父です。私たち家族は祖父の自宅介護の際、社会保障の一つである介護保険制度を利用しました。祖父の入院生活が二年を過ぎた頃、人工呼吸器も取れ、祖父の意志もあり、家族で相談して自宅介護をすることを決めました。祖父は気管切開と胃ろうをしており、寝たきりの状態で、かなりハードルの高い介護が予想されました。そこで、ケアマネージャー、病院のソーシャルワーカー、祖父の介護の手助けをしてくれるスタッフと話し合い、私たち家族の負担をなるべく軽くできるように、介護保険制度をすすめてくれました。介護保険制度は、他の社会保障とは異なり、お金を支給されるのではなく、介護サービスをいくらか自己負担するだけで受けられるというものです。介護保険を受給するには、要介護認定申請を出さなければならないのですが、祖父はそのうち要介護五で最重度の介護が必要な状態でした。そして、実際に自宅介護が始まると、予想以上に大変でした。気管切開をしているため、数分置きに痰の吸引をしなければならず、二十四時間体制のケアが必要でした。そんな私たちが休むことができるのは、看護師さんが、訪問介護に来てくれた時間でした。この訪問介護は、介護保険のうちの居宅介護サービス費としてのもので、寝たきりで減多に入浴できない祖父の体を拭いたり、それだけでなく、祖父に優しく声を掛けたり、私たちにアドバイスをくれたりと、家族みんなの心のケアをしてくれていた様に思います。

祖父は、私が中学二年生に進級して間もなく亡くなりましたが、その数日前に、私たちは祖父を車イスに乗せて、庭で写真を撮りました。祖父を乗せた車イスは、居宅介護福祉用具購入費として業者から借りたものでした。また、一番印象に残っているのは、祖父は亡くなる二日前、訪問入浴介護で数か月ぶりの入浴をしました。リビングに簡易の浴槽を組み立て、祖父は温かいお湯を体にかけてもらい、とても嬉しそうな表情を浮かべていました。私たち家族だけでは自宅介護をできていなかったと思うし、たくさんの人にサポートしてもらいながら、祖父と一緒に過ごすことができました。

最近税について学習し、年金制度なども社会保障の一つだと分かりました。日本がこれだけ社会保障制度などが充実しているからこそ、私たちは祖父を自宅介護できたのだと思います。今、日本では少子高齢化が進み、社会保障の費用を負担する働き手が少なくなっています。充実した社会保障を日本がこれからも継続できるよう、社会を支えられる大人になりたいです。

私たちの暮らしを支える税

芽室町立芽室中学校 3 年 森 佳綾

先日、社会の授業で税の学習をした。国の税収の内訳や、社会保障費をはじめとする国の主な歳出について学び、税金の種類やその使い道などを知ることができた。この中で、社会保障費といわれる医療や介護、福祉に使われるお金は最も多く、少子高齢化が進む日本にとって大きな課題であることを学んだ。

この学習をきっかけに、私たちが住む町ではどのように税金が使われているのか調べてみた。芽室町では毎年四月に、その年使われる町のお金の使い道を公表している。今年度の予算が二百十二億円。そのうち、幼稚園や保育所の建設や運営に九億円、小中学校の整備に六億円、公園や道路・水路の整備には四億円、病院の整備には三千五百万円など、私たちの身近な暮らしに直結するあらゆるものに税金が使われているようだ。

ところで、私と弟は小さい頃は体が弱く、特に二歳年下の弟は生まれてすぐから病院に頻繁に通わなければならず、長く入院することも多かったと母から聞いた。まだ小さかった私は父と留守番をすることが多く、はっきり覚えてはいないが、どうして弟ばかり母といつも一緒にいるのかと泣いて父をよく困らせていたらしい。この時の話を母に改めて聞いた。熱を出し、血液検査やレントゲン検査、点滴注射や薬を処方してもらい、入院は長期間になることもあったが、そのすべては無料だったという。中学生の私でも、大変な額の税金を使っていたのだと実感がわいた。

今では私も弟も病院に行くことはほとんどなくなったが、具合が悪い時に病院で治療を受けることができるのも、税金によって医療の保障という公共サービスが行われているからだを知った。

今、中学生である私は一日の大半を中学校で過ごす。私の通う学校では現在体育館の改修工事が行われている。これは私たちが安全に、快適に授業や部活を行うためだ。通学路には街灯があり、暗い不安な部活の帰り道も安心して通ることができる。道路も整備されていて、自転車に乗るのも快適だ。家では洗面所もお風呂も、レバーを動かせば水が出る。これらは当たり前の生活の中にあるので改めて考えたことがなかったが、大人が納めてくれている税金がその資金になっていると知った。

中学生の私はまだ税金を納めることはない。私は正直なところ、これまで普段の生活の中で、税金について考えたこと、実感したことがなかった。しかし今は、日常の多くが、私たちのために多額の税金の支えによって築き上げられたものであり、様々なサービスを利用する私たちが、しっかりと心にとめておくべきだと感じている。これからは、税金の意味や必要性を正しく知り、決して無駄使いをすることなく、納税をする立場になった将来も、その責任を果たしていかなければならないと感じている。

消費税アップについて考える

西和賀町立湯田中学校 3 年 荒木 雪

私は、消費税は上げてもいいと思う。目的通りに使ってくれるなら、それはとても意味のあることだと思うからだ。

税と聞いて、私にとって一番身近なのは消費税だ。今、消費税を上げるか、上げないか二つの意見が議論されている。日本では、近年消費税五%から八%に上がった。とても多くなったように感じるかもしれないが、北欧の国々と比べたら、少ない方だ。そして、北欧の国々は高い分、教育面では大学まで無料、医療面でも医療費全て無料だ。自分の将来を考えると、学びたいことはたくさんある。子供に向かって、「きみたちには、無限の可能性が秘められている」と言っても、その可能性を最大限に発揮するには、学ぶことが不可欠だ。学びたいときに、学びたいことを学びたいだけ学べるとしたら、それは、本当に素晴らしいことだと思う。また、病気になったり怪我をしたりしたときに、お金の心配をせず、完全に回復するまで最善の治療をしてもらえるとしたら、どんなに安心して過ごすことができるだろう。

こんなにメリットがあるのに、どうして今の日本は消費税を上げない方針で動いているのか。それは、国民がその方針を選んだからだ。そして、消費税アップが決まったとき、反対の声がとても多かったからだ。私はこのことについて、三つ問題があると思う。

一つ目は、一時的に払うお金のことしか考えていないことだ。確かに、買いたいものの値段が高いほど、消費税として納める金額も大きくなる。しかし、それは、今の社会や自分の未来に確実に役に立つのだ。そういう視点がないことが問題である。

二つ目は、国にどれだけお金が必要かを知らないことだ。国には、やるべきことがたくさんある。もちろん、それらを行うには財源が必要だ。その財源は、国民から集めた税金から成っている。それが足りなくなったら、借金をするということが理解されていない。

ここで三つ目の問題が出てくる。それは、次世代に対しての責任がないことだ。このまま、税金を増やさずに、借金ばかりが貯まっていったら、それらの借金を返すことになるのは次世代だ。今、自分たちは、豊かな生活をして幸せかもしれないが、その分のツケを次の世代に押し付けるのは、非常に無責任な行為だと思う。

税金は、自分たちの国をより良い国にするために必要なものだ。税金を増やせば、年金問題や医療、高校の無償化など、福祉・教育の面でより過ごしやすい環境を作ることができる。それは、自分にとっても次世代にとっても、社会にとっても、本当に良いことだと思う。私は一時の楽よりも、ずっと続く幸せのために力を尽くしたい。だから、その幸せのために、今、国がお金を必要としているのなら、私は税金を上げることについて、前向きに検討していくべきだと思う。

税金～安心安全の暮らしを支えるために～

学校法人星野学園中学校 1 年 田中 玲実

去年、私が通学していた小学校で、租税教室が開かれた。その時私は、少子高齢化が進む中、多くの高齢者、また、私達子供が、安心安全な社会で、健やかに暮らせるために、税金は存在している事を、初めて知った。そして中学生になった今、私も消費税という税金を払い続けているが、この税金によって作り上げられる、安心安全の暮らしとは、どのようなものかを考えてみた。

私には、来年の春、百歳を迎える祖父がいる。ちなみに祖母は、九十三歳だ。今の自分にしてみたら、信じられない年齢ではあるが、私の住む街には、七十代以上、八十代、九十代の高齢者の方々も多くいる。沢山の高齢者が長生きし、その人達の生活が守られ、生活を支える役割の一つとして、税金があるのだ。例えば、多くの高齢者の中には、自分で歩き回る元気な方もいれば、私の祖父のように、デイサービス、ヘルパーさんのお世話になっている方々もいる。このようなサービスも、国民の税金によって補助されている。さらに、公共施設もそうだ。最寄駅には、車椅子の方でも簡単に通れる、スロープがある。また、多目的トイレ、介護施設も多く、高齢者に優しい施設があることで、将来も安心して暮らせる町作りが進んでいると感じた。

さらに、税金は子供にも使われている。病院で診察を受けた際、毎回お金を払わずに済むのも、税金のおかげだ。子供の医療費の無料化により、集団生活で感染症にかかりやすい私達は、いつでも安心して、病院へ行ける。今挙げた医療費以外にも、学校生活の中で、教科書をはじめ、沢山の部分が、税金に支えられている。“学べる環境”は、当たり前でなく、周囲の支えによるものとして、感謝するのが大切だと思う。

二〇二〇年東京オリンピックまであと三年。このオリンピックを通じ、今までにない完成度で、日本を訪れる世界各国の人達と、興奮や感動を共有したい。日本＝安心安全、と理解してもらうために、日本全体、国一丸となって協力し合い、競技場や選手村等の建設費だけでなく、過ごしやすい街の美化活動、交通網の発展等、オリンピックの成功への道として、有効に税金を使ってもらいたいと思う。

正直、中学一年の私は、まだまだ税金の知識はない。ただ、私達も成長するにつれ、いずれ数年後には、支えられる身から、社会人として働き、支える立場、税金を納める側に立つ。もしかすると、この時に、払うことへの負担というマイナスのイメージが湧くかもしれない。でも、常に「支えられる側」であった時の感謝を、私達は忘れてはならない。責任を持ち、子供から大人まで誰もが豊かに健やかに、安心して暮らせる社会を作り出す一員として、将来、“納税の義務”に対して前向きに考え、「支える側」である事を自覚し、税と関わっていきたいと思う。

今年の7月、福岡県と大分県に九州北部豪雨が襲った。1時間に100mm以上の記録的な豪雨は甚大な被害をもたらした。被災地には大量の流木が見られ、この流木が川の流れをせき止め、氾濫させた。林業の衰退とともに手入れが行き届かなくなった人工林が流木の発生要因の一つとして考えられている。

私の住む町の近くには鶴見川が流れている。私は小学校の時流域センターのイベントで生き物観察に家族で参加した。日頃、橋の上から鶴見川を眺めるしかなかった私にとって川岸の水草が生い茂ったところにテナガエビや小魚など多様な生物が住んでいることを知り、地図上の無機質な川から色鮮やかな川になったことを思い出す。そんな鶴見川も、かつて「暴れ川」として氾濫していたと父から聞いた。森林や田畑が市街化によって失われ、保水機能が低下した事により雨水が一気に流れ込むようになっているからだという。

そんな中、横浜市は「横浜みどり税」を平成21年から導入しているということを知った。横浜市の緑の総量は減少を続けており、約40年前緑被率が約50%だったのが、現在の緑被率は約31%まで低下しているという。そこで緑の減少に歯止めをかけ、緑豊かな町を次世代に継承するため、植林地や農地の保全、市街地の緑化活動支援などの取り組みを柱としているという。私は今まで税金というと最初に思いつくのは消費税で、それ以外は所得税、ガソリン税など耳にしたことがあるくらいで、どちらかというと「取られる」など嫌なイメージがあった。それに対し次世代へ緑を守る税金と聞き、将来を担っていく一人として自分も少なからず関係あると思い興味を持った。

森は人々に精神的な安らぎを与えるだけでなく、洪水緩和の助けになっている。森林の土壌は、スポンジのように大量の水を蓄え、降雨後に徐々に放出する機能を持つ。つまり森を保全するということは洪水緩和することにつながるのだ。緑は一旦失われると元に戻すことが非常に困難で、将来の緑の保全は着実に取り組んでいかなければならず、足踏みしている余裕はない。しかし個人で対処できる事はたかが知れている。なので地域に住んでいる人が自分の事だけでなく、社会をよりよくするために税金の制度はあると私は思う。

この緑を守る税は、今すぐその結果が実感できるものではない。また緑地を確保するだけでは不十分で健全な状態で管理することが重要である。そこには個人で対処できない問題が山積している。今の私には何もできないが、その問題を解決するため税金は大切な役割をしていることを理解し、やがて大人になった時、社会を支える一人の人間として、次世代に大切な環境を残していく一員として、私はきちんと税金を納めていこうと思う。

受け継ぎたい感謝の気持ち

魚津市立西部中学校 3 年 吉野 真白

昨年、接骨院の待合室でピンクの用紙が使えなくなることを知った。病院に行く時は、必ず私が持たされたこの福祉医療費請求書で、会計が無料となることは知っていた。それが当たり前のように思えていたからか、高校生から使えなくなること、正直驚いた。

そんな私に母が入院中の話をしてくれた。母は妊娠にリスクがあり、特に弟の時は長期の入院となった。ベッドに横たわる母の姿と淋しかった記憶が一気に溢れ出した。

「つらかったよね？」

と聞くと、予想しなかった「税金」の話しをし出した。長期間の入院、治療費にも福祉医療費請求書が適用となったこと。それは多くの方の納税によって支えられていたこと。

しかし、母もいつの間にか妊産婦検診等、無料を当たり前に感じるようになっていたそう。母が入院中、担当の看護師さんから、母の体に流れる点滴は、ほんの数ヶ月前まで保険適用でなかったことを聞かされた。その頃これを使用されていた方の、ひと月にかかる入院費を聞いて驚いたという。入院のストレスに加え、金銭的な不安もあったようだ。

母は、多くの方の税金や社会制度に支えられていることに気付かず、当時は毎月の給与から引かれる所得税や住民税は給与が「減る」という感覚にしか思えなかったことも、少し恥ずかしそうに話してくれた。

母はこの用紙を見るたびに、私達の成長を思い出すそう。福祉医療制度は私達にいつも寄り添ってくれたことを。そしていつも、湿布、解熱剤等の残薬を確認して病院に向かう母の行動が分かった気がした。私もこのピンクの用紙一枚の重みを知った。

帰りの道、見慣れた景色は公共施設やサービスで溢れていると感じた。豊かで安心して暮らせる社会。私達や障害者を守る町造りの資金は税金だと認識せずにはいられなかった。

一学期、発展途上国を調べる機会があった。水道や道路のインフラ整備が遅れ、子供は労働力となり、満足に教育すら受けられない。そのことが貧困から抜け出せない原因にもなっている。JICAを通して資金援助していることも知った。税金は国を豊かにし発展させていくのに欠かせないものだと改めて認識し、勤労、教育、納税、日本国民の三大義務が頭から離れなくなった。

五月に私の住む魚津市で全国植樹祭が開催された。良質で豊富な水が命を育み、生活や産業を支え、暮らしと共存している魚津市を誇らしく感じた。そして自然豊かな環境も先人の皆さんの納税で成り立っていることに、感謝の気持ちで一杯になった。私はどこに住んでも地域を愛し、社会を守る為に使われる税金を気持ちよく納税出来る人になりたい。

県税の「水と緑の森づくり税」が五年延長になっている。私が納税するまで続いてほしい。私を今まで助けてくれた恩返しと、未来の私達のためにも、心からそう思う。

滞納を減らそう！

弥富市立弥富北中学校 3 年 柘植 照希

ぼくたちは普段買い物をするとき、その商品がどのくらいの値段かを見て買います。ただ、値札に 2 つ値段が書いてあることがよくあります。例えば税抜き 100 円と税込 108 円などです。この商品にかかる税は消費税とよばれています。その他にも、会社で給料をもらう人に対してかかる所得税や住んでいる市区町村に納める住人税などがあります。

税金は納めなければならないものです。しかし、決められた日を過ぎても税金を納めない滞納をする人がいます。平成 26 年度は約一兆円もの滞納額があります。滞納が続けば滞納者の家の財産などを捜査されて、差押というものが行われます。差押とは、滞納者の財産を強制的に、金銭に換価可能にできる状態にする最初の手続きのことです。少しひどく感じますが、税金を払わない事の方が罪が重くて当然の結果だと思います。年々、滞納額は減ってきていますが、まだ一兆円もあるのでまだまだ減らせると思います。最近見たテレビで滞納をしている人の家を検査し、差押するのを見ました。滞納している人のなかには、豪邸に住んでいたり、高級な物を買っていたりなどと、税金を納めることができるはずの人がなぜ納めないのか疑問に思いました。差押は滞納者の意思を聞かないので、差押えられた人は怒ったり、悲しんでいました。

こうした滞納者を減らすために、ある地方ではその地域の市長さん自らが滞納者の家へ訪問し、税金を納めさせようと呼びかけています。ぼくはその行動をしているのを聞いて滞納対策をととてもがんばってしていて、税金を納めるということは、日本国民の義務だと改めて思いました。

しかし、税金を払うことによって小・中学校の教育が受けられ、身近な公共施設が建てることもできたりなど、良い事もたくさんあります。中学生の僕はまだ税金の知識が浅く、納める税金は消費税ぐらいです。大人になった時に困らないように、しっかりと税のしくみを理解しておきたいです。

現在の日本の問題である高齢化は今後も増え続けていきます。高齢者が増えると、年金の全体の金額が増えます。つまり、若者の一人一人が払う税金が増えるということです。そんな時に滞納をする人がいれば、滞納をした人も高齢者の人も困ります。税金を納めるということは、将来の自分が暮らせるようになるためでもあります。消費税が 10% に上がることが予定されています。そこで税金のしくみを理解し、税金を扱う人も不正に利用せず、適正に利用して税金をメリットを引き出してほしいです。みんなが税金を納めればこの国がより平和になるでしょう。

累進課税と意識改革

学校法人愛泉学園堺リベラル中学校 3年 八木 この葉

税のおかげで義務教育を受けられ、医療を安心して受診できたりと財政活動によって生活が成り立っている。

世界の国々から見れば、日本の税の意識が低く関心がなく、税の流れを人任せにしているのではないだろうか。

日本の間接税にあたる消費税は世界から見ても低い。1%上げれば二兆円の財源にもなるなら、消費税を上げて、日本の歳入額を増やし、債務残高を減らし、日本の円の価値を上げ、格付けを上げることで信用をとりもどすことが先決ではないか。

消費税（付加価値税）は上げるが、生活必需品は5%に下げ、一定基準を越す高額な物については累進課税にして税率を上げる。

直接税の所得税同様、相続税・自動車税・固定資産税を累進課税し、高額納税者のプライバシーを配慮しつつも高額納税者こそが社会に貢献していることを知らしめることが大切ではないだろうか。

例えば広報紙にて掲載をし、納税番付で表彰したりするなど。

基準とは、一般家庭平均を基にして、累進課税にすることをさす。

また、節税対策で他国へ移る場合、仮に移先出国特別税を納付してから出国させたり、高額当選者については、幸せを分けあたえる分配税として納税して社会貢献をして頂く。

まず、歳入を増やすためには税の確保が必然となる。

それには、教科書も財政活動の一環であることやサービスを受けて今日があることをしっかりと教え、憲法で定められた義務ではなく納税できる成人に育成することこそが、未来をになう私たちの使命であり、次の世代へバトン出来ると考える。

今の赤字国債によって国債残高が増えている現状や防衛費が世界三位の額といわれているぐらい税が流れている。

そのお金を環境保全や地震対策や感染症予防といった公衆衛生などに活用し、税への福利厚生を受けていることを社会科授業や総合学習で教えることで、税の大切さや税の意味をもっとしっかりと教えることで納税に対する意識がかわると思う。

また、公的扶助は生存権として必要な人には生活保護として支給すべきであるが、ワーキングプアで働く非正規雇用の問題やニート・フリーターといった非労働者に対しては、社会全体で見直すことも大切だが、働く意志を持てる労働条件の整備と、教育のなかでも学校を卒業したら社会の一員となるには、納税し勤労して自活できる人間を養成しなければならないと教えるべきだ。

その教育内容として、諸外国のように義務教育中の進路別学習を早くから導入し、社会人となるべき技術や知識を多用な分野から経験し職に就くまでの教育を行い納税者を確保することが、未来の日本へと結びつくと思う。

よりよい社会にするために私達ができる事

広島県立広島中学校 1 年 鍋島 一花

私が住んでいる地域は土地が低く、大雨の日は冠水することがよくありました。ある日、いつもより激しい大雨が降り、トイレからコポコポと妙な音がし始めました。水が増水し、いつ家の中に下水があふれるか分からず、気が気ではありませんでした。急いで玄関にかけつけてみると玄関の中にまで水が迫っていて私はどうすることもできませんでした。しばらくするとレスキュー隊員の方々が土のうをたくさん持ってきてくださり、すんでのところでも床上浸水は免れました。また、水が引いた後日、市役所の方が床下の消毒の仕方を丁寧に教えてくださり、消毒液も渡してくださいました。この時に経験から、大雨が降ると冠水するのではないかとハラハラしてしまうのですが今では冠水することがほとんどなくなりました。なぜだろうと思い、母に尋ねてみると下水道の大規模な工事が行われたからもう大丈夫、と教えてくれました。私は、もうあのような思いをしなくて済むのだと思うと、心から安堵しました。また、このような道路や下水道などの公共の工事は税金でまかなわれるのだとも教えてくれました。私は、その様なことに税金が使われていたと知らなかったのが驚きました。私が身近に感じる税金といえば消費税です。今まで品物を買うとき、何気なく支払っていましたが、税金が何に使われているか考えたことがありませんでした。調べてみると、助けていただいたレスキュー隊員や市役所の方々の給料、病院の治療費の一部、さらには、私が学校で使っている教科書でさえ税金で支給されていた事がわかり、身近なのに気付かない事が多くありました。

さらに調べたところ、集められた消費税は約二十一兆円ですが、社会保障にあてる金額が約三十兆円と九兆円も足りないことが分かりました。その九兆円は国が借金をしているそうです。その借金を返済するためには、未来の働き手である私たちが対策を考えなければなりません。また、年金は税金の一部があてがわれるそうですが、一部の若者が「自分が年金をもらえるか分からないから」と年金を払わない人がいると聞きました。しかし、その年金を払わない人が普段支払っている消費税も、実は、回りまわって年金の財源になっているのに、正しい知識がないために「もらえないかもしれないから払わない」というまるで権利を放棄するような間違った考えが生まれてしまっているのだと思いました。

これから迎える超少子高齢化社会において私たち未来の働き手は、正しい知識を持ち、より良い社会にするために正しく税金を納め、お互いが支えあっていくことがとても大切だと思います。

私が住んでいる日浦地区は山奥にある。松山市に住んでいる人でも、日浦を知らない人が多いと思う。一番近いスーパーマーケットでも、車で二十分程かかる。近くに歳の近い友達が少なくなった。高齢化が本格的に進んでいる、典型的な過疎地域に値するだろう。

私が通っている日浦小中学校は、かつて多くの生徒が通っていた活気ある学校だった。しかし、高度経済成長によりどんどん住民が減り、衰退していった。そして、二十一年前、廃校の危機に直面した。卒業生や若い住人が次々に外に働きに出てしまい、子どもどころか住人まで減ってしまったからである。でも、本当に学校がなくなってしまうと、困ると感じる地元住民は多かったようである。

日浦は、緑豊かで、松山市の水源となる石手川ダムの上流にある。そんな自然豊かに囲まれたこの学校を残そうと、今から十四年前、地域全体が一丸となって学校存続運動を行った。そして、努力の甲斐あって、廃校を免れたのである。この存続決定のおかげで、今、父と同じ日浦小中学校に通い、勉強や部活動を通して私は学ぶことができている。

十四年前、学校は存続のために、小中連携教育を目指し、学校改革を行った。自然を活かした体験学習。日浦の特産に着目し、地域の名人との交流を通した総合的な学習の時間。小中合同の学校行事。日浦にしかない、日浦独自の学校へと、当時、多くの人が改革に携わったようである。私の父も例外ではない。

また、地域のみならず、様々な機関が学校存続に協力してくれた。愛媛銀行さんもその一つである。松山市内から、児童生徒が登校できるよう、スクールバスを提供して下さった。また、税金のおかげで、教科書は無償、パソコンや、理科の実験道具など、学ぶ環境は税金に支えられた。現在、全校生徒の九割が、松山市内から通い、学校は在続できている。学校が今も守られていることを、とってもありがたいと思う。

今年、七月に起きた九州北部豪雨では、消防士さんや警察官、自衛隊の人達が懸命に救助活動をしている姿をテレビで見た。税金は学びだけでなく、命まで救うのかと改めて思った。人が働いてもらう給料の一部には税金がつく。この原稿用紙一枚、お店で買う時には消費税がつく。自分の学びが税金に支えられている私は、それを億劫だとは思わない。身近な所に税金は関わっており、それを納める義務があることは当然だと思っている。一方で、国民一人一人の税金が、自分の学びにつながっていると思うと、勉強も部活動も一生懸命取り組んで、誇りある学校にしたいと思う。私は、税金で支えられているのだから。

毎年、日浦小中学校の卒業生代表の言葉には、必ず感謝の言葉がつづられている。私も、感謝の気持ちを忘れず、誰かの支えになれる大人になりたいと思う。

「税」と聞いて、私が一番に思い浮かぶのは消費税。一〇〇円の品物を買うと一〇八円の支払い。中学生の私でも買い物をするたびに決して安くはない「税」を払っていて、「税」は必要なのか疑問に思った。

先日、テレビのインタビューを受けた人が、将来自分が年金をもらえるかわからないのに年金や介護保険を払う気になれないと言っていた。たしかに中学生の私が年金をもらえるようになるまであと六十年くらいある。しかし、今この瞬間も地球のどこかで戦争や飢餓に苦しむ人がいて、恒久な平和を念願している日本国民も願うだけでは安定した生活を送ることは難しい。私たちは日々の生活でただ「税の支払い」をしているだけだろうか。

小学四年生のとき、私はクラス全員で「二分の一成人式」をした。そのとき母に見せてもらった「母子健康手帳」。ページのほとんどが切り離されて薄くなった「予防接種手帳」もあった。「母子健康手帳」には私が生まれてくる前のことから小学校入学までのことが書いてある。小さい頃は体重が増えなくてグラフで見ると平均より下だったんだなと思った覚えがある。それらを記録しているのは見慣れた文字。間違いなく母の字だ。自分では覚えていないことばかりだけれど、この手帳を見ると母のお腹にいるときから小学校まで検診や予防接種をたくさんうけていたことがわかる。以前母がこの予防接種手帳があったから予防注射がほとんど無料だし、この手帳があるから注射を受けるタイミングがわかるのだと教えてくれた。でも、「無料」というのは「料金がいらぬ」という意味ではない。私ひとりが生まれて生きていくために、見知らぬたくさんの方が納めた税金を使わせてもらっている、ということである。いわゆる「出世払い」のようなものだと思う。つまりそれは、私たちが大人になって様々な税金を払うようになったら、その税金は次に生まれてくる子供のためにも使われるということである。私たちは、生まれる前から、この世から天国へ旅立つ日まで、ずっと税金を使って生活していることを忘れないようにすべきだと思う。何となく歩いているこの道も、税金からの補助で維持されているし、小学校や中学校で支給された教科書も税金で買ってもらっている。

生まれるときも、亡くなるときも、自分ひとりだから誰にも迷惑をかけない。このような寂しいことを話している人もいた。でも、人は見知らぬ誰かのおかげでこの世に生まれ、見知らぬ誰かのために恩返しをする。みんなが参加し、目に見える助け合いが「税金」だと私は思う。

ふるさと納税で叶った私の夢

都城市立沖水中学校 3年 森重 日詩

宮崎県都城市——私の住む町は、昨年、一昨年と「ふるさと納税日本一」に輝いた。しかし、このニュースを聴いた時には、たいして興味ももたなかった。まさかこの税金が、私の夢を叶えてくれるとは。

都城市では昨年度から「中学生海外交流事業」が行われている。都城市内の中学生が、夏休みにオーストラリアを訪問し、ホームステイをしながら、現地の学校で授業体験をしたり、現地の中学生と交流活動をしたりするものである。「ぜひこれに参加したい」という強い気持ちがあったが、この夢が、今年の夏、叶うこととなった。

一回目の事前研修の時、副市長さんから

「この事業の予算は、『ふるさと納税』として納められた税金が使われています。」

というお話があった。お話を伺った時にはあまり理解できなかったが、とても興味を持ったので、家に帰ってから、市のホームページで調べてみた。すると、ふるさと納税として納められた税金から、約七百六十五万円ものお金が、この海外交流事業に使われているとあった。また、さらに調べてみると、ふるさと納税は、納税者が使途を指定できる、つまり、ふるさと納税には、納税者の思いが込められているということも分かった。母は、

「都城市からの補助があるから、あなたはオーストラリアを訪問できる。補助がなければオーストラリアには行けなかったよ。」

というような話をしてくれた。私がこの海外交流事業で、オーストラリアを訪問する際にかかる費用のおよそ三分の二は、都城市に、ふるさと納税として納められた税金が使われているとのこと。オーストラリアの訪問に市の税金が使われるということは知っていたが、まさかこんなにたくさんのお金が私たちに使われるなどとは考えもしていなかった。改めて、この事業に参加することの重みを感じ、「絶対に良い体験をしてこよう」と強く思った。

今回、私を含め、都城市内の二十名の中学生と四名の引率の先生方が海外交流事業に参加した。ふるさと納税をしてくださった方々のおかげで、私たちはオーストラリアを訪問でき、様々な体験ができたのだという、感謝の気持ちを大切にしたい。

今年の夏の体験は、とても貴重なものであった。それはオーストラリアを訪問できたことだけではない。税金の大切さを改めて感じる事ができた体験でもあった。税金を納めてくださった方々に「このような事業に税金が使われて良かった」と思っただけのよう、体験してきたことを生かして、社会に貢献できる人になりたいと思う。

税金を納めることは、確かに国民の義務ではあるが、社会貢献の一つでもあると私は感じる。私はこれから、胸を張って税金を納めていく。どこかで私と同じような夢を持つ人の願いを叶えるお金だと信じて。

「このバスができて便利になって良かったさあ。いつもありがとうねえ。」

これは、バスの運転手と乗車したお年寄りとの会話である。夏休みによく「護佐丸バス」を利用していた私は、同じような会話を何度も耳にした。ほとんどのお年寄りの方は、運転手の方と笑顔でお喋りをしていたりして、今ではこのバスが運行する以前に比べ、とても活気が溢れたようにも見える。

「護佐丸バス」とは、私が住んでいる村が運営するコミュニティバスだ。村内と村外の一部を運行するこのバスは、どこから乗ってどこで降りても一般二百円、中学生・六十五歳以上のお年寄り・障がい者の方は百円、小学生は五十円で乗れるとても優しいバスだ。それに加え、朝の一番はちょうど通学・通勤、夕方の便は下校の時間帯に運行しており、学生にも社会人にもとても便利でありがたい。このバスの運行のおかげで、これまで車を持っていないと村内でさえも移動が難しかった状況が改善され、通学・通勤・通院が非常にしやすくなったといえるだろう。では、こんなに安い運賃で運行できるのはなぜだろうか。その秘密は税金にあった。

父に協力してもらい調べると、「護佐丸バス」は村の総務費から、そしてその九割が国からの補助で賄われていることが分かった。私は「税金ってこんな良い使われ方していたんだ！」と率直に驚いた。

私はこれまで「税金」という言葉にあまり良い印象を持っていなかった。三年前の四月から消費税が五パーセントから八パーセントへ引上げされることが決定したときには、大人たちの漏らすため息を、その口からこぼれる言葉をたくさん聞いた。そのころ税金についてほとんど何も知らなかった私は、「税金はあまりよくないものなのかな」と、なんとなくがそう感じていた。私自身が支払っている税といえば最も身近な消費税だけであり、それがどのように活用され、現代社会を支えているのかなど知る由もなかった。その後学年が上がっていくにつれて、税金の用途や役割を学んできたが、それでも税金に対してのイメージが変わることはあまりなかった。それが今、この「護佐丸バス」を通して、税金は決して悪いものではなかったと、一人一人の暮らしを支えるために必要なものなんだと実感でき、税金に対して前向きな気持ちを持つことができた。

様々な問題を抱えているこの日本で、より良い社会を作るためには税金が大きなカギとなるだろう。中学生の私たちはそのカギを握り、道を切り開いていく大きな役割を担っている。そのためには一人一人が税を見つめ直し、社会に貢献しようとする心向きが必要だと強く感じる。私もその一員として貢献できるような「納税者」になりたいと思う。

税について考える

旭川市立永山南中学校 3 年 高橋 莉歩

「ただいま。」

ある日、母と姉が大荷物をもって帰ってきた。私が

「こんなたくさんの本、どうしたの。」

ときくと、母は

「お姉ちゃんの教科書。買ってきたの。高校は義務教育ではないから、小学生、中学生みたいに税金で買ってもらえるわけではないんだよ。」

と教えてくれた。その時私は、教科書はもらえるものと思い込んでいたことに気づいた。

税金に対してあまり良いイメージをもっていない人は多いだろう。私もその一人だった。消費税がなければ買えるのにと何度も思ったことがある。税金は「とられる」という感覚が強かった。でも、普段私が使っている教科書は税金によってまかなわれていることを再確認し、私は税金に感謝しなければならないと思った。また、恩返しとして喜んで納税しなければならないと再認識した。税金を通して、誰かの役に立ったり、支えられていると考ええると、税金のしくみは社会全体で助けあう、本当に素晴らしいしくみだと思う。

私の教科書には、全てこう書かれてある。「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」と。今までの私は、この文を読んでも特に何も思わなかった。しかし、今はちがう。「国民が日頃納めている大切な税金をあなたたちのために使っています。しっかり勉強して立派な納税者となって下さい。」といわれているような気持ちになる。

警察や消防が活動している。ゴミを収集してもらえる。災害が起きたとき、自衛隊が国民を守ってくれる。道路が整備されている。どれもあたり前に行われていることだが、これらは全て税金のおかげで成り立っていることだ。あたり前の日常は税金によって守られているとっていいだろう。私は、母の言葉をきっかけに税金のありがたみに気づくことができた。「あたり前」は税金がなければ、「あたり前」ではなくなる。私はもう税金を「とられる」なんて表現はできない。税金を納めることは、私たち皆が安定した生活をつなげることに繋がる。納税者でいることが誇らしく思えてこないだろうか。

中学生の私は、まだ消費税しか納めていない。これから大人になるにつれ、納める税金はどんどん増えていく。多くの税金を納めるようになったら、また税金を「とられる」という感覚になるかもしれない。そんな時は周りをみよう。税金に支えられていることやものはあふれている。今の生活があるのは、税金のおかげだと気づくはずだ。税金はこれからもずっと日本にとってなくてはならないものであり続ける…と私は考える。

私達の暮らしを支える税

久慈市立大川目中学校 3年 田中 愛結実

「税とは何でしょう。」租税学習をする前に先生が言った言葉に私は答える事ができなかった。私は「税」があまり身近な物ではないと思っていたし、なぜ必要かよく分からなかった。なぜなら、税金は大人達が払う物で、中学生にはあまり関係がないと思っていたからだ。なので、租税学習をする時はなぜ学習する必要があるのか、大人になってからでも良いのではないかと疑問に思った。しかし、租税学習をしていくと、「税」がとても身近な物に感じた。

さて、私達中学生が一日に関わる「税」はどのくらいだろうか。私達の生活に欠かせない水。その上下水道は税金で整備されている。安心して食事をするための農業、漁業の支援にも税金は必要だ。学校に安全に通うための道路や信号、見守ってくれる警察も税金がなくては成り立たない。学校などの教育施設の建設や机、椅子、教科書にも税金は使われている。そして、義務教育九年間でかかる費用約八百三十七万三千円を税金で負担している。私は一日に関わる「税」がとても多く、九年間の多額の費用が税金で支払われている事を知って、とても驚いた。他にも、「税」はどのように関わっているのか気になり、調べてみた。「税」は教育施設、道路、港湾、水道などの公共施設やゴミの処理、警察、消防などの公共サービスを提供している。また、医療、年金、福祉、介護などの社会保障も行っている。これらから、「税」は私達の暮らしに身近な物で、私達の生活を支えている事が分かった。

しかし、正しい申告、納税せず、故意に不正な手段で税金を免れようとする人もいる。「税」は私達の生活を支える大切な物だから、しっかり申告し、納税してほしいと思う。

私の父は地域の納税組合に入っている。納税率を上げるために、のぼり旗やポスターを掲示している。父の話によると、実際に税金を払う事を忘れていたり、お金があるのに税金を免れようとする人がいるらしい。しかし最近では「納税組合は税金を集めていないから、必要ではないのでは。」という町民の声もある。その声に対して父は「意味はある。啓発活動をする事によって、納税に対する意識を高めている。」と考えている。私も、税金を負担する一人ひとりが、「税」に関心を持ち、納税に対する意識を高める事が大切だと思う。

租税学習で「税」に対する意識が変わった。将来、私が払う時が来たら、しっかり申告し、納税していきたい。そして、納税率を高めていきたい。

子供たちの成長を見守るために

土浦市立土浦第四中学校 1 年 平野 華穂

今秋、私の叔母が二人目の子供を出産予定です。大きくせり出したお腹を見るたびに、いとこの誕生を楽しみに思います。三歳になったいとも産まれた時から、かわいがってきました。いつの間にか大きくなったいこの腕に消えない予防接種の痕を見つけました。叔母に聞くと、BCGという、結核を予防する注射の痕だと言います。乳幼児に接種することにより、結核や髄膜炎を予防できるそうです。興味を持ち調べてみると、一歳の誕生日を迎えるまでに実に多くの予防接種を受けなければならないことを知りました。ヒブ・小児用肺炎球菌・四種混合・麻しん風しん混合・水痘・日本脳炎など多くの病気を予防するための大切な接種です。

子供を守るための制度は、誕生する前から整えられていることも知りました。お母さんが妊娠した時から出産までに、公費で何度も健康診断を受けることができ、出産後は、子供の健康診断が何度もあります。また、叔母の住む町では、赤ちゃんの健やかな成長とお母さんの育児を応援するため、全ての赤ちゃんを対象に、保健師等が家庭訪問を実施するそうです。「不安に思っていることや分からないことなど、たくさんのことを聞くことができ、心強かったし、またお世話になるつもりだよ。」と叔母は話していました。

このように多くの市町村や機関でお母さんと赤ちゃんの成長や健康を見守る体制ができています。そしてその制度は、税という財源によって守られています。子供は、親だけでなく、税金を納める全ての人によって、守られ育ててもらっていることになるのだと思いました。私自身も守ってもらってきました。多くの予防接種を無料で接種し、病気やケガをしても、少ない負担で診てもらえます。小学校に入学する前は入院したこともありました。その時のことを母に聞くと、医療費もほとんどかからなかったそうです。私も、税金でまかなわれた多くの福祉に当たり前のよう守られ、私は今までそのことに気付きませんでした。

しかし、これは世界の多くの子供たちにとっては当たり前のことではありません。生まれてすぐに亡くなってしまう子供、病気になってもすぐに手当てを受けられない子供、世界では日本のように子供を守ってくれないのです。

私は、この国の税金で受けた恩を、必ず返していきます。税金によって受けている今の義務教育を無駄にせず、たくさん勉強し、いつか納税の義務を立派に果たせる大人になりたいと思います。税金で守られてきた自分ができることは、税金の意味を理解し、社会に貢献できる人間になることだと思うのです。

奈良時代の人々へ

神崎町立神崎中学校 3 年 柴入 拓矢

「青丹よし 奈良の都は さく花の にほうがごとく 今さかりなり」

この短歌は、七一〇年に完成した平城京の美しさを詠んだものである。日本で本格的な税のしくみができたのは、奈良時代の頃である。その当時の想像図を見てみると、青の屋根瓦と朱塗りの柱が華やかな平城京と貴族の暮らしとは対照的に、貧しい格好をして税を運んでいる人々の姿が描かれていた。

今の時代、税金は誰のために使われているのだろうか。朝、目が覚めてすぐに顔を洗いに行く。蛇口を回せば出てくる水。この水は、税金によって私たちの家まで届けられているのだ。

学校へ行く途中にも税金によって作られている場所はいたるところにある。ドアを開けてすぐ目に入る道路。車と歩行者が安全に通行できるように使われた信号や横断歩道も税金によって作られているものだ。また、学習に必要な教科書、さらには学校そのものもそうだ。

身近な暮らしも税金によって支えられているものはたくさんある。暮らしの安全を守る警察官。火事のときに火を消してくれる消防士。町の図書館は私自身もよく利用している。集中して勉強することができる環境が整っているうえ、気軽に利用できるのも、とても便利だ。また、私の町では、医療費が中学生まで二〇〇円である。怪我や病気が多い私たちにとって、うれしいことだ。

二〇一一年三月十一日におきた東日本大震災では、甚大な被害にみまわれた。私の住む神崎町も例外ではなかった。町の一部の地域では、液状化現象により家が傾き、住むことができなくなってしまった人もいた。そんな人々のために、小学校の体育館に避難所が設けられ、食料や毛布が無償で配られていた。液状化した道路の舗装など、人々への援助の資金の多くは税金によってまかなわれているのだ。

現代では、税金は一部の人々のためだけではなく、私たち住民が安心して、そして豊かな生活が送れるように使われているのだ。

税の歴史を振り返ると、税は貴族や武士などの一部の人々のために使われていたが、明治時代に入り、ようやく税金がすべての人々のために使われるようになった。学校ができたのも明治時代に入ってからのことだ。しかし、戦争が起これば、税金が戦争に使われてしまうこともあった。つまり、奈良時代から約一三〇〇年かけて、税金は本当の意味での使われ方になったといえる。

このように、税金は、私たちの暮らしになくてはならないものになっている。今は消費税しか納めていないが、自分が働けるようになったら、税金をしっかりと納めようと思う。そして、奈良時代の人々にこう伝えたい。

「暮らし良い 平成の世は 人々の 税の力で 今さかりなり」

税について

墨田区立錦糸中学校 3年 亀沢 実夢

私の両親は飲食店を営んでいます。そこで私は母に身近な税金について話を聞きました。

まず、お客様からいただく売上げに消費税が含まれます。両親のお店では、そこから店が仕入れの時に支払った消費税を差し引いて、年に二回納税を行っています。店の決算が八月なので、四月に前半の半額をとりあえず納税し、十月に決算できちんと計算された残りの納半額を納税しているそうです。その支払額は当然半年分とまとまり、結構な額になるそうで、預かっているだけの消費税を支払うだけなのに、なぜか結構ダメージをくらうそうです。それが中小企業の一般的な実態のようです。

その消費税とは平成元年に三パーセントで導入され、平成九年には五パーセントまで引き上げられました。店では、定価を変えずに内税で頑張っていたようです。そして、平成二十六年から八パーセントに上がり、さすがに外税で計算するようにしました。

今、飲食店で混乱しているのが、平成三十年に導入予定の軽減税率制度に対してだそうです。軽減税率制度とは、消費税率十パーセントへ引き上げられても、低所得者への配慮から、酒類や外食を除く飲食料、週二回以上発行する新聞の定期購読料を八パーセントのままにしておくというものです。お店では店内での飲食だけでなく、お弁当としてお持ち帰りされるもの、レトルト商品、さらにお届けサービスがあるので、店内でのお召し上がりとお持ち帰りとして計算を分けなければいけなくなります。そのため、例えばお持ち帰りとしてお弁当をたのみ、お会計を済ませた後、お店が空いていたりすると、店内での飲食に変更されることがあり、このような場合、二パーセント安く食べていくことができるのです。なので、もしかすると故意にそうされるかもしれないので、その辺を母は気にしていました。

この事に関して私は、お客さんにその二パーセントを支払わせればいいと思いましたが、実際手間もかかり、他のお客さんのことも対応しなければいけないので、そうはいかないそうです。逆に自分がお客として行った時、そういった事でまたされることも増えるのかなと思いました。

もう一つ導入にあたって大きな問題がレジやシステムの改修等です。場所によってはかなりの経費が必要になります。なので国ではA型「複数税率対応レジの導入等支援」とB型「電子的受発注システムの改修支援等」の二つの補助金が用意されています。

私は今回母の話を聞いて税についてよく知ることができました。そして今後税についてよく考えてみたいと思います。

インド、税の大改革

福井市清水中学校 3 年 松村 さくら

二〇一七年七月一日、世界中の政治経済界が注目するなかインドで税の大改革が実行されました。

そもそも税は、誰が納めるものかという点で直接税と間接税とに分けられます。所得税や法人税などはその対象である個人あるいは法人が直接国や地方自治体に税金を納めるため直接税と呼びます。一方、消費税や関税などは消費者が物やサービスを購入したり輸入したりする際に販売業者に料金プラス税金という形で支払って、それを受領した販売業者が国や地方自治体に後でまとめて納めるという仕組みを取っており間接税と呼ばれます。

今回インドで起きた税の大改革では、これまでインドに四十種類あった間接税が「物品・サービス税」(G S T) という一つの間接税にまとめられました。インドでは歴史的にそれぞれの州が各々の税制度を導入してきたため、今日のグローバル経済の速いスピードに対応するには複雑になりすぎ、政府にとってもすでに管理の限界に来ていました。

そこで救世主のごとく登場したのが二〇一四年にインド首相となったモディ首相です。モディ首相はインドを先進国にするためにこれまでも様々な改革を宣言してそれを実行してきたリーダーシップのある人物で、インド国民からのみならず世界の政治経済界から大いに注目されている政治家です。そのモディ首相の宣言した改革の一つが、この税の大改革「一国一税」でした。

ちょうどインドで仕事をしている兄に話を聞いたところ、G S T 開始時は税率や税名の変更対応で少しばたついたようですが今はほとんど落ち着いてきているとのことで、とてもスムーズな導入だったようです。この税の大改革はモディ首相の宣言した通りの時期に実行され、さらに昨年末には脱税を防ぐための流通紙幣の大幅変更もあり、そんなモディ首相の前向きで積極的な改革手腕とリーダーシップにインド国民はみな毎回驚かされつつもとても奮い立たされているそうです。この税改革は今のところ大成功と言えるでしょう。

国や州、自治体の大事な収入源は税であり、それをもとに街のインフラが整備されたり公務や行政サービスが充実したりして、人々の暮らしがより良くなっています。一方で、市民や企業にも家計や経済的責任があり十分な話し合いや相互理解が必要です。税の効率的な徴収方法というのは古くから現在にいたるまでどの国も重要な課題であって、その一つの出来事として今回のインドの税改革があるのだと思います。

まだ社会人経験のない私には難しい話題だったかもしれませんが、インドにいる兄から体験談を聞くことができ、税の大切さについて実感することができました。税というのは世界のどの国でも重要な話題であって、国民と政府とがお互いに支え合う仕組みのことなのだと学びました。

税金から学んだこと

学校法人梅村学園三重中学校 3年 村田 倫子

私たちの生活は、税金によって支えられている。例えば、道路や公園、上下水道などの社会資本の整備や、教育、警察、消防、医療、介護、福祉の公共サービスの提供などがある。私は、学校での租税教室でこれらを学んだ。

その中でも深く知りたかったのは、介護と福祉に関する税金だ。日本は今、少子高齢化社会が深刻な社会問題だ。そのためにも、充実した介護、福祉サービスが必要となる。しかし、日本は中福祉・低負担といわれている。国民負担率が約四三パーセントの日本は、ヨーロッパの国々に比べ、著しく低い。だから、現在私たちが受けている公的サービスの水準に比べ、負担している税金が少ないのだ。私は、サービスの充実のためにもっと税金を払っていいと思う。

スウェーデンという国は、高い水準の福祉サービスがある。高齢者の増加に伴い在宅介護を提供している。このサービスの特徴は、長く家にいられることである。病院での生活に比べてストレス軽減につながる。しかも、家のバリアフリー化のために住宅改造資金手当も支給される。諸々の国や地域のサービスにより、国民の負担は大きくなってしまう。

福祉サービスの一つにアンダーナースという職業がある。この人たちは、医療の基礎を修学し、在宅の高齢者のケアをする。それもたったの十五分だ。この十五分は、体のケアも心のケアにもなる。また、会話をすることで認知症を予防することができる。こんなに政府が積極的に対策をとるのは良いことだと思う。ぜひ、日本でもサービスとして取り入れてほしいと思う。

しかし、日本には公債という国の借金があり、これを返済しなければいけない。現在の残高は、約八六五兆円にもなるそうだ。これも今後の財政にとっての課題になると思う。だから、サービスよりも先に税の負担について考えなければいけないのかもしれない。

課題は多いが、未来は今よりももっと税金のいる社会になる可能性もある。でも、緊急時に安心できるのは全て公共サービスのおかげだ。救急車なんて一刻を争う命を救うのにとっても重要な存在だ。だから、知らず知らず忘れているかもしれないが、税金は私たちにより良い生活を提供してくれることは間違いないと思う。まずは、払う義務についてしっかり理解することが大切だと知った。そこから、色んな意見が生まれることで私たちが住む国はもっと良くなるのだと思う。私は、税金の役割を勘違いしていた。安心して自由な暮らしのためだと思っていなかった。でも、テレビに映る訪日外国人の人たちが日本を素晴らしいと言ってくれるのが私は嬉しい。日本しか知らないからあたり前のことばかりだと思っていた。だから、あたり前ではなく、考えられた私たちの税金であることを忘れてはいけないと思った。これからは、積極的に興味の薄いものでも触れてみたいと思う。

私の祖父

田布施町立田布施中学校 2 年 相本 紫苑

お盆に久しぶりに母方の祖父に会いました。幼い頃から祖父が大好きで、祖父が家にお泊りをした日は祖父と一緒に寝て、夜中遅くまで話をするのが嬉しくてたまりませんでした。中学生になり部活動が忙しくなって、だんだん予定が合わなくなり、疎遠になっていましたが、久しぶりに会ったせいか、もちろん年をとったのかもしれませんが、なんだかすごく痩せてしまって、とても小さく感じました。

私の祖父は腎臓が悪い為、現在週に三回透析を受けているそうです。祖父の腎臓が悪くなったのは二十代の頃らしく、それからは薬で抑えて定期的に病院で検査して過ごしていたそうです。定年退職になった頃から体調を崩し、週に二回透析を受け、更にそれが進行して身体障害者一級として認定され、現在七十四歳まで辛い思いもしながらなんとか生活していると聞きました。昔から民間の保険になかなか加入する事が難しかった為、入院しても保障はありませんが、健康保険での医療費負担にはかなり助けられているようです。

ちょうど、老齢年金の受取も段階世代だったため、祖母は六十歳から全額、祖父は六十二歳からの受取でしたが、再就職する事もなく暮らしているけれど、まだまだ元気に過ごしてほしいので、社会保障制度がとても必要だと思いました。

現在、年金の受給も六十五歳に引き伸ばされたことから、定年後再雇用制度などがあり、七十歳を超えても元気に働いている人が増えてきました。年々寿命も延びてきて、びっくりするほど元気なお年寄りが増えました。私たちの時代には、高齢化が進み年金の受給自体がもらえるかどうか怪しい限りですが、老人福祉、介護保障などの様々な制度が進み、必ず何らかの形で保障されると思います。

また、私たちが生まれてすぐに係る社会保障制度は「ゆりかごから墓場まで」充実した内容になっています。病気や怪我をしても乳幼児・子ども医療費助成や災害共済給付制度があり、負担が少なくなるように保障され、中学校卒業まで児童手当がもらえるなど少子高齢化だからこそその制度が充実しています。特に、これからの公的保証は、もしものことがあった時の弱者に対して生活を支えるという制度が多いようです。

「消費税十パーセントへの引き上げ」と聞いて不満を持つ人が多いようですが、私でも支払える少額の消費税でも、みんなが負担すると大きな金額になります。このみんなから集められた税金で多くの高齢者の助けになるという制度は今の高齢者、そして私たちが高齢者と呼ばれる立場になった時に、なくてはならない生きる架け橋だと私は思っています。

公共サービスや社会保障制度をもっと詳しく学び理解した上で、その制度の必要性を考え、税金の大切さと、国民みんながお互いを助け合う心が、これからの発展に繋がると私は思います。

『明るい未来を支える税金』

吉野川市立山川中学校 3年 住友 利帆

私が通う接骨院でのことです。

「今日は結構です。」

私の住む市には、義務教育終了まで月初めに定額を支払うと、その月は同じ医療機関で診療を受ける場合無料になる制度があります。足首を捻挫して通院を続けている私は、この制度のおかげで毎月の治療費が低額で済んでいます。中学入学までは風邪にかかりやすかったし、歯の矯正に通っていましたが、この制度のおかげで安価で治療を受けられました。私がまだ二歳のころ入院した時も、思ったよりも入院費用がかからなかったことを母から聞きました。ふと見上げた接骨院の受け付けには、県内の各自治体の乳児子ども医療費助成制度についてのお知らせが掲示しており、この医療費助成制度がどの自治体でも行われていることを知りました。もしこの制度がなかったら、病気の度に相当な治療費を負担しなければならないことになるでしょう。

この医療制度は、社会保障のひとつです。私たちが払った税金が最も多く使われているのが社会保障にかかるものです。医療のほかに、介護、年金、子育てにかかる費用の負担をみんなで分かち合い支え合う制度です。

ところが、年金を受給している祖父が、

「介護保険料が高いんよ。」

と嘆いています。年金生活をしている祖父なのに介護保険料を支払わなくてはならないのはどういうことかと思い調べてみると、介護保険制度は税金半分と保険料半分で賄われているようです。今は介護サービスを利用することがなくても、将来介護が必要になった際に介護サービスを受けられる仕組みになっていれば一人一人の大きな安心につながります。介護する家族の負担も減ります。そのための貯金と言えるでしょう。

介護保険料にしても年金にしても、少子高齢化の進むわが国の社会保障の費用が年々増大することは必至であり、将来のためにもお互いが支え合うという気持ちで納税・納金することが大事なのだと思いました。

私は今中学三年生。これまで、義務教育を受けさせていただいています。教科書が無償でいただき、学校のあらゆる設備も、そしてエアコンも快適に利用させてもらっています。毎日のおいしい給食も、税金のおかげで低料金で食べることができています。舗装された道路を歩いて信号機を見ながら安全に学校へ通っています。誰かが払ってくれた税金のおかげで治安のよい町に住んでいます。

今ある安心は、今までに納めていただいた税金のおかげだと思います。さらに少子高齢化が進んだ二、三十年後もこの不自由のない暮らしがずっと続くように、税金の使い道をよく知って、せっかく納めた税金を大切に使うような賢い納税者になりたいです。そして近い将来、今度は私たちが税金を納めることで、私たちや次の世代のみんなの暮らしを守っていこうと思っています。

みんなで支え合う社会を目指して

須恵町立須恵中学校 3 年 白濱 瑠菜

暑い中、必死に働く作業員の方々…。私が見慣れた同じ球場とはとても思えない状況だ。

私の兄は、幼少から野球をしており、特に中学生になってからは、この朝倉球場で多くの試合をしてきた。私は、朝早くから両親に起こされ、やむなくこの球場に足を運ぶことが多かった。きれいなグラウンドで伸び伸びと野球をする兄の姿を思い出す。

しかし、今は状況が全く違う。九州北部豪雨で大きな被害を受けた朝倉市。家を失った方々のための仮設住宅が建設されている。重機がたくさん入り、作業員の方々が急ピッチで作業を進めている姿に、胸が痛んだ。

先日、先に入居が始まった仮設住宅の映像を目にした。入居者が、「久しぶりに、家族だけで生活できることが嬉しい。」と、涙を流しておられた。この仮設住宅建設にあたって、税金が使われている。私たち中学生からしてみると、税金とは少し遠い存在であるが、今年の夏は、九州北部豪雨を通して、税金とは、人々に幸せを運ぶものだと感じた。災害救助のために使われた税金で、どれだけの人が救われたことだろう。

自分の生活を振り返ってみても、税金のおかげで私も幸せを感じる一人であることに気づく。私たちが毎日使っている教科書。先生が使われるチョーク。小さいころよく遊んだ公園。全てに税金が使われていることに気づかされる。多くの人の支えによって、私の生活は支えられているのだ。小学生の時、黒板にチョークで落書きをしていて。ひどく先生に叱られたことを思い出す。

「みんなのお父さんお母さんが納めた税金で買っていたいているチョークを無駄にしてはいけません。」

と。あの時はよく意味も分からなかったが、今は十分に理解することができる。

私たち中学生は、まだ税金を納めることはなく、税金の恩恵を受けることばかりであるが、私たち中学生にできることは、学校のものや公共のものを感謝の気持ちをもって、大切に使うことだと感じる。そして、義務教育の期間は残りわずかだが、しっかりと学習し、将来、社会の役に立つ人間になることだと思う。

先日母は、朝倉市の災害ボランティアに参加した。

「来週のお休みにも参加する」と意気込んでいる。父は、仕事が忙しく休みが少ないため、「参加できない」と悔やんでいたが、父はきちんと税金を納めている。災害ボランティアとして参加できなくても間接的に朝倉市の方々を支えているのではないだろうか。

私も大人になったら、きちんと税金を納め、人々を支えられる人になりたい。税金によって、自分自身も支えられているということも忘れず、立派な納税者になりたいと思う。

税の大切さ

出水市立大川内中学校 2 年 切通 寧々

「税金について知っていることは」この質問で改めて感じた。全くと言っていいほど私は税のことを知らないのだと。

税金とは何なのか。

私の住む市の市役所が新しくなり、とてもきれいな新庁舎になった。出水産の木を何本も何本も使っているらしく、庁舎内はとてもいい木の香りがする。

市でとれる材料を使用することで、市の中でお金が周り、市の活性化につながるのだと思う。

四年前まで私は、スペインで暮らしていた。そこで分かったことがある。

税金はすごいということだ。人の運命を簡単に変えてしまうのだから。

私の父は小学校の教師だ。四年前までスペインの日本人学校に赴任していた。そして、私たち家族も一緒にスペインで生活していた。海外で生活している子どもたちに日本の教育を保障するための制度だ。スペインに行ったことで私は、国によって様々な制度が違うことを実感した。

スペインは物によって消費税に差がある。普通の物は十八パーセントと、とても高い。だが、パンや牛乳など生活している中で、必要となる物への消費税は四パーセントと少ない。

日本では、一一九番通報をすると、無料で救急車が駆けつけてくれる。スペインは救急車に来てもらうには、多額な費用がかかる。お金がない人は救急車を呼べず、もしかすると命に関わることもあるかもしれない。日本のすばらしさを改めて感じた。

もし、日本に税金がなければどうなるのか。火事になっても消防車が来ない。倒れたり、大ケガしても救急車が来ない。学校に通うのに、多額の費用がかかる。ゴミ収集車が来ない。とても不便な日本になってしまう。

私は幼稚園の頃、ガラスを突き破り、足に大ケガをしたことがある。母がすぐに、一一九番通報し、父がタオルで傷口を押さえてくれた。

まず来てくれたのは、消防車だった。救急車が全部出ているらしく、代わりに来てくれたのだ。応急処置をしてくれた。税金がなければここまでしてくれなかっただろう。もしかしたら、もっと出血してしまい、大変なことになっていたかもしれない。もしものときのためにも税金は大切なのだ。税金のありがたさを感じることができた。税金は、今の自分たちのためだけではない。未来の家族や子孫へのプレゼントという側面もある。

納税は、憲法に規定されている。たった三つの「国民の義務」のうちの一つだ。それだけ、国民の生活を支えていくために重要な存在なのだ。国民の一人一人が、税金の意義と恩恵を今一度考えていかなければならない。

税金を知る

名護市立名護中学校 3 年 上間 秋

日本国民の三大義務のひとつに、「納税の義務」がありますが、ぼくは、それについて考えたことがありませんでした。身近な消費税さえ深く考えたことはありませんでした。更に、税金に対してのイメージもあまり良いイメージはありませんでした。なぜなら大人はよく、「税金が高い」とか、「何でも税金がつく」とか、「また消費税が上がる」などというからです。

税金とは何だろう？税金を身近なことに例えてみました。ぼくは野球部員です。野球部に部費を払っています。その部費を「税金」とすると、税金を払っている部員が「国民」で、野球部全体が「社会」、部費の使い方を考える先生方が「国会議員」で、その話し合いの場が「国会」として考えてみました。

その「国会」で先生方が、部費を集計して、年間に備品（ボール等）の購入にいくら、遠征試合に行く為のバス借用や、ガソリン代にいくら、他にも色々あると思いますが、そういったお金の使い道を管理しています。そのおかげで、ぼく達部員は、みんなで使うボールや、道具が揃えられたり、遠征試合に行くためのバスを借用できるので、同じバスで、部員全員が一緒に行くことができます。そういったことの全ては、部活動をしているみんなの為に使えるお金「部費」があるからだと思います。もし、部費が無かったらどうなるのでしょうか。ボールや、みんなで使う物が足りなくなったり、古くなったりした時、誰が買うのかという問題が起こったりします。また、買える部員、買えない部員がいて、不平等になってしまいます。遠征試合には、その都度、送迎の車のことや、ガソリン代を考えないといけないので、行く事の出来ない部員もいるかもしれません。みんなで平等に使えるお金「部費」がなければ、野球部の中で部員一人一人が、平等ではなくなり、野球部全体がまとまらなくなってしまうのではないのでしょうか。

そう考えると、ぼく達、国民が納めた税金は、国民の安全を守る警察、消防などの活動や、道路、水道の整備といった「国民」に役立つサービス、ゴミ収集や処理、年金や医療、福祉、教育などに使われています。つまり税金は、みんなで社会を支えるための「会費」といえるのではないのでしょうか。その「会費」のおかげで、国民一人一人が平等に助けられて、社会全体がまとまるのだと思いました。子供が減り、高齢者が増えるなかで集められる税金は、更に減ることが予想されます。税金は様々な使われ方をしています。どれも、ぼく達の暮らしに欠かせないものばかりです。限りある税金のなかで、なにを大事にし優先するか、税金をどう使うかは

「ぼく達は、どんな社会で暮らしたいか」

「どうすれば、みんなが幸せな社会になるのか」を考える必要があります。そのためには、税金そのものを知り、みんなが、納税に対して納得することが必要なのだと思いました。